

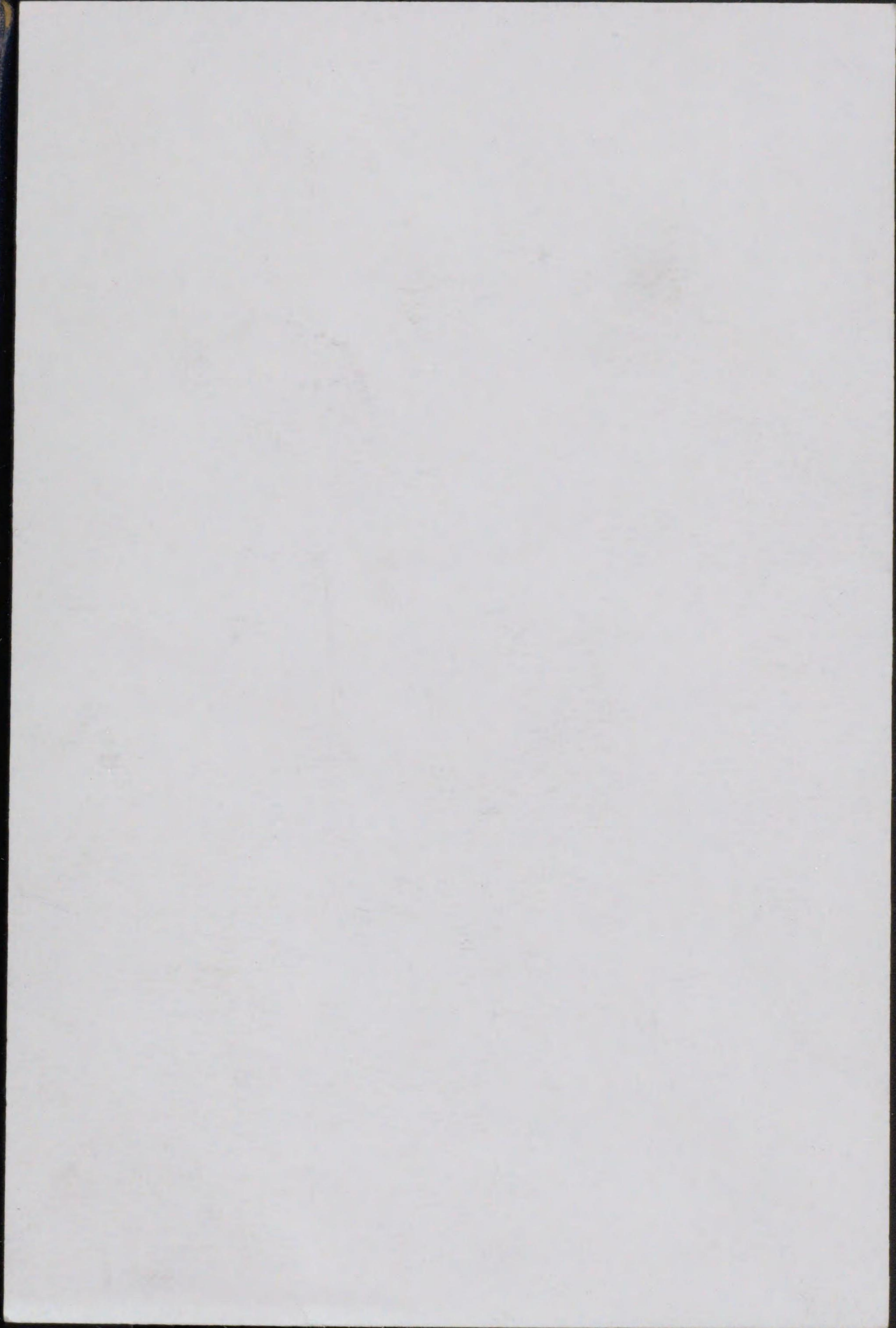
598-1

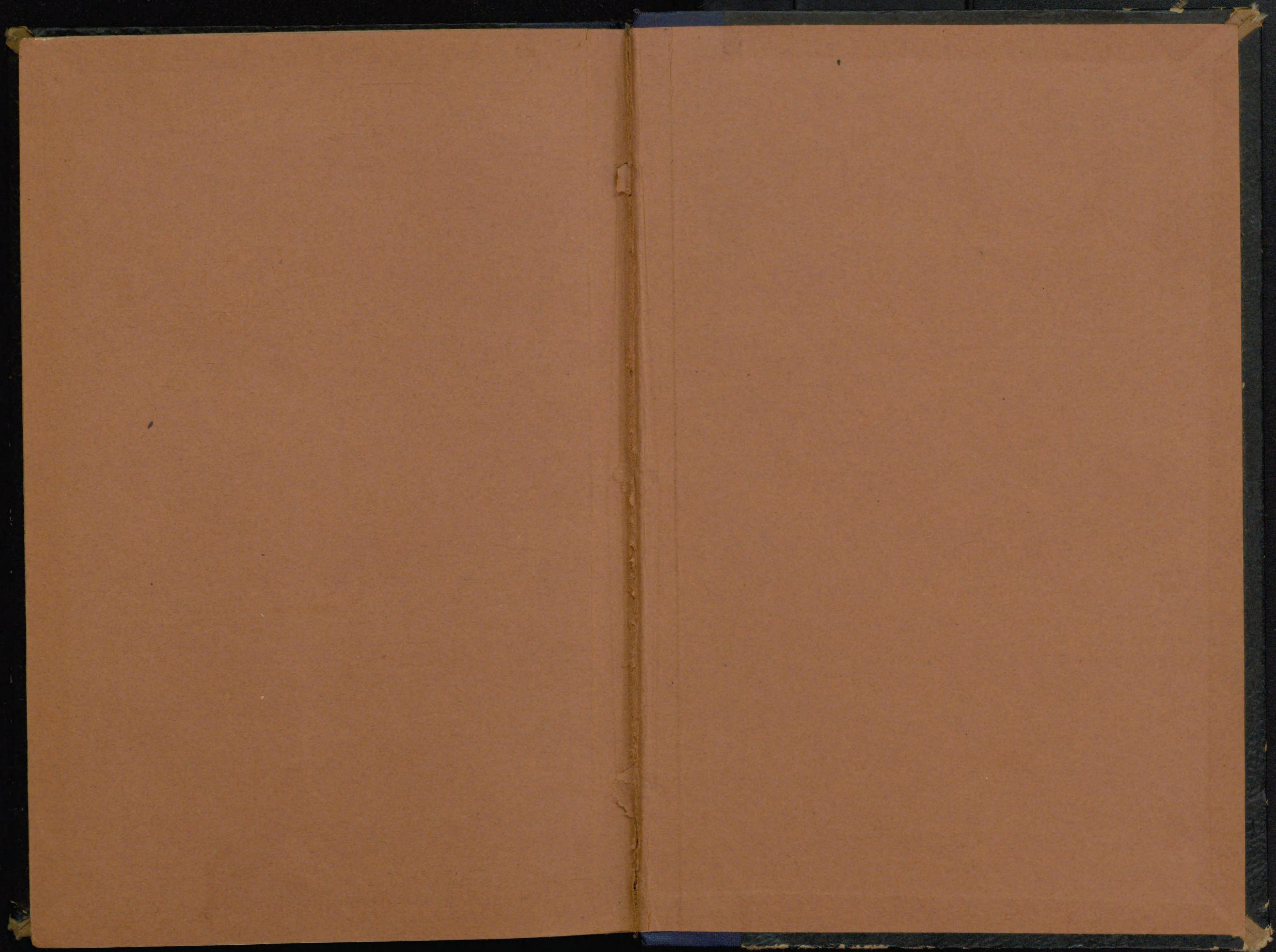


1200501528737

598
1

口
複
写







釋宗

演全集

第一卷





在りし日の宗演禪師

禪學大衆講話

目次

疑ひなき境涯……………三
 悟りは奇術にあらず——毀譽褒貶何かあらん

平常心是道……………八
 心は主で身體は客——眞、善、美が理想——修養は頗る面白い——苦しみの裏は楽しみ

人生向上の出発點……………三
 開示悟入の道理——我れの問題に徹底せよ——大乘佛教たる所以

世界中總て禪の現はれ……………三〇
 悟り了れば未悟に同じ——一指頭の禪——丙丁童子來求火——禪が世界を生み出す

軍人の修養……………四〇
 聚義の工夫——靜座の法——智仁勇は天下の達徳

心の大休息……………五三

禪は心なり——悪魔の襲来——能く働き能く休め
 擔取し去れ 一六〇

上醫は毒を藥とす——自己を忘却せよ——自ら訓へ自ら誠む
 鏡を打破し來れ 一六六

道は近きにあり——學問其儘中毒——精神的の明鏡
 支那の佛教 一七〇

極端なる個人主義——道教及び孔子教——佛教は社會と没交渉
 渡米雜感 一八五

座禪の思ひ立ち——衆生は悉く我が子——日本には立派な教へ——聖徳太子は大ハイカラ
 狗子に佛性ありや 一九九

眞意は深遠高妙——道の解釋——生活の眞意義
 儒教と禪宗 二〇九

明德を明かにす——活動力は休息から
 無我即ち大我 二二三

世界は戦争の生活——所謂常樂我淨

意味ある生活 二一八

ハイネの疑問の詩——信は眞なり——解信と仰信——佛法の言葉では平等——筆が手か
 手が筆か 二二二

上根、中根、下根 二二七

眞劍の修行——執着心がなくなる
 五種の禪 二三〇

精神上的の實地の經驗——和光同塵或は入塵垂手
 禪と武士道 二四三

起つた新宗教——敵は富なり——先づ慾を去れ——空前絶後の壯舉——忘れられぬ美談
 物我一體 二六〇

心の本體を知る——廬山が我れ——心の現はれが物——又十郎の劍道修行——鍛錬修養
 は理論でない
 德育の修養 二七四

攝受といふこと——佛神には虚偽は許さぬ
 臨濟の四料簡 二八〇

禪の本領——原因と結果は同じこと——我れ一人の境涯——禪宗の一つの特色
禪は實參實究……………一九三

白樂天と如滿禪師——鐵文和尚の刻苦……………二〇〇

詩禪一味……………二〇〇

妙所を現はすは詩——眼中の眼即ち心眼——穿ち得た人情漸——恰も回轉する井戸車——
悲觀も樂觀もない——眞理には生命あり……………二〇〇

四恩とは何ぞや……………二〇三

篤く三寶を敬せよ——衆生の恩——慈悲心と佛は共通……………二〇三

婦人に就いて……………二〇六

婦人に佛弟子——夫婦の和合から始まる——心の美しきが眞美人——本來同等同一——
艱難に生れ逸樂に死す……………二〇六

煩惱は菩提の種子……………二〇六

生死其儘が涅槃——超越が大切……………二〇六

平等主義と差別觀念……………二〇四

佛も人間も同じこと——差別觀念は建設的——理に順つて心を起せ……………二〇四

永久不變の大道……………二五〇

宗教的安心——四苦とは生、老、病、死——眞宗教的精神……………二五〇

陰徳を積み……………二六三

金錢に萬能力あるか——曰く無功德——月僊和尚の陰徳——迷ひに代ゆるに悟り——丹
霞木佛を焼く……………二六三

靈と靈との接觸……………二六二

意力の修養が足らぬ——惡魔を佛ひ退ける力……………二六二

有難い情想……………二六八

日本の名物——宗教の特色——不離不二の妙味……………二六八

佛教特殊の教訓……………二九六

大慈大悲の心が報恩謝徳——大切なるは三寶の恩——統一的萬有神教……………二九六

意力の修行……………三〇六

智識や學問のみで世は渡れぬ——怖るべきは文明病——人も物も不滅——一心不動の三昧……………三〇六

大なる寶……………三〇〇

精神的に貧しい人——慈悲には敵なし——詩人スコットと犬——成器の長……………三〇〇

無舌人の説法……………三三三

偽山住持の試験——舌頭骨なき底の人

信は大慈大悲の心……………三四〇

信念は堅實鞏固——信仰の大光明——月影は濁水にも映る

人生眞の樂み……………三四六

四喜の詩句——苦中に樂あり——面白い教訓

大安樂の境涯……………三五二

眞の脱體現成——百丈和尚の大悟

世尊拈華迦葉微笑……………三五七

歴史上の禪の始め——禪は到る所にあり——以心傳心の妙

本領を會得せよ……………三六三

正師を見るが大切——參禪の目的——道昭の化蹟——關山國師の勝鬪

自己に克て……………三七二

克念も克己も同一——心は誘惑の根源——境と同化せよ

白隱禪師……………三七九

良醫の門に病者多し——舊套打破固陋警醒

天地同根……………三六五

一切悉く同一根——隱元と素鏡の問答——身口意の三業相應——平常心是れ道

善惡の種類……………三九六

徳川家康の寶——十善十惡——眞理其儘の姿——自己の良心は獨立自尊

相手を見る力……………四〇六

猫は鼠を以て試みる——形式に囚はるゝな

正念相續……………四〇九

井蛙海を知らず——本來の面目を徹見せよ——先づ自己を知れ——元是れ一精明

一 圖 相……………四一七

君子は愚なるが如し——賊は賊を知る

時を使へ……………四二二

生死一如——金の生る木

祖師西來意……………四二六

大器は晚成す——蒲團を持ち來れ

目次

一 禪の源流と宗派の概観

二 禪の修行と悟りの境地

三 禪の歴史と現代の意義

四 禪の修行と生活の融合

五 禪の修行と心の健康

六 禪の修行と社会の発展

七 禪の修行と人生の智慧

八 禪の修行と心の自由

九 禪の修行と心の平和

十 禪の修行と心の解脱

禪學大衆講話

疑ひなき境涯

悟りは奇術にあらず

東海道原の松蔭寺の白隠禪師に、おさつといふ老婆が熱心に參禪して、永年修行をしたので、身分柄にも似氣なく、悟りを開いてゐるといふ評判でありました。或る時おさつ老婆さんが、大層愛してゐた孫が病死しました。おさつ老婆さんの悲歎は一と方ならず、前後不覺に泣いた。すると或る人が、おさつ老婆さんに向ひ

『お前は白隠禪師に就いて禪を學び、悟りを開いてゐるといふが、矢張普通の女と同じやうに悲しいのか、それでは悟りも何もあつたものではない』
と言つて冷笑しました。これを聞いたおさつ老婆さんは、端然として、

『お前さん何を言はツしやる。緋の法衣や、紫の法衣を着て、金欄の御袈裟を掛けた多勢の高僧方が、讀經して下さるよりも、日頃孫を愛してゐた此老婆が泣いて遣つた方が、孫はどんなに喜ぶか

『知れない。』
 と言つて、又も泣き悲しんだといふことでありますが、悟りといふものは、吾々をして血も涙もない石地藏や、枯木寒巖のやうにするものではありません。禪宗の大悟徹底は、灰吹から蛇を出すやうな、魔術師の松旭齋天勝でもやりさうな奇術に類したことをすると思つたり、又どんなに悲しい場合にも、決して悲哀を感じないし、どんなに楽しい場合でも、決して楽しく感じない、恰も石地藏のやうなものだと考へてゐる人が、世間に往々あるが、これは本當の悟りを知らぬ人で、全く誤解であります。納の知人が、可愛盛りの兒に死なれたので、納は氣の毒でならず、可哀想と思ふたから、ハラ／＼と涙を流して悲しんだ。すると或る人が、

『宗演は禪僧でゐながら、泣き悲しむのは、悟つてゐないからだ。』

と評したといふことを、後に聞いて、寧ろ滑稽に感じました。然らば悟りとは、如何なるものを言ふかといふに、何者に對しても、斷じて一點の疑ひなき境涯に達したのをいふのであります。之れを他力門で言へば、彌陀の本願に爲り切つて、其處に一毫も疑ひを挿む餘地なきに至つたものを指すので、之れを喩へると、水の冷たく、火の熱いのは、何人も疑ひを挿む餘地がないやうなものであります。恁く總てに對して、疑ひの一點も存しないのが、悟り得た當體であります。爰に至るには、各自一心不亂の三昧に入つて、自分々に冷暖自知するより外に道はありません。一點疑ひなき所に達

し、確固不動の信念を有せぬ者は、如何なる場合にも、躊躇逡巡する、換言すれば二の足を踏む。善か悪か、是非か、褒められるだらうか、それとも誹謗られはしまいか。こんなことではいざと言ふ場合に臨み、周章狼狽して爲す所を知らず、實に見苦しい醜態を演ずるのであります。哲學の力、腕力、財力、地位、名譽あらゆる力が、何んの役に立ちませう。唯爰に吾々をして、惴然ともさせない剛い力が一つある。それは何んであるかといふに、即ち自己胸中に一點疑ひなきところの確固不動の大信心であります。カイザ！、ウイルヘルムが言つたことに、『世に怖る可きものは神のみ』と、總て世に大事業を爲す程の人で、宗教を無用物視した者は決してありませぬ。ところが往々神も佛も用はない、宗教などは無用の長物だと言つて、得々たる者があるに至りては、自己の無識を標榜してゐるやうなものであります。

毀譽褒貶何かあらん

昔から聖賢、君子、英雄、豪傑と稱せらるゝ人は、皆胸中確固たる信仰があります。だから白刃頭上に閃くも、泰然自若としてゐます。彼の好箇の鐵漢、好箇の快男子北條時宗が、西海に蒙古襲來するに際し、武装して鎌倉圓覺寺の開祖佛光禪師に見えて言ふには、

「大事到來せり」
と、禪師答へて曰く、

「如何か向上せん」

と、其處で時宗が大喝一聲しますと、禪師言ふ、

「眞の獅子兒なり、能く獅子吼す、驀直に前進して回顧する勿れ。」

と、時宗拜辭して出づ。爰に於て時宗の意志金剛の如く、眼中十四萬の元兵なく、英氣大元四百餘州を呑むの慨があつたのであります。これから先、時宗が佛光禪師から、五ヶ條の垂示を蒙つたが、其第四に

「勇猛の士氣は、能く白刃を踏むべし。柔弱の肢體は、窓隙の風をも忍ぶ能はず。宜しく常に勇猛の士氣を保持すべし」

とありますが、果して時宗の勇猛なる士氣は、白刃を踏むも怖れず、數百の艦艦十四萬の總糸を擊碎して、海底の藻屑と爲しました彼れの功績は、實に偉大であります。總て人は、平素確乎たる信念を得て居れば、どんなに苦しい場合でも、どんなに辛い場合でも、どんなに危険な場合でも、少しも怖れ臆せず、毀譽、褒貶、得失、是非の如何に關せず、斷々乎として自己の信する所に向つて突進することが能きるのであります。殊に大事業に着手して、吾れ一代に爲し能はずんば、子々孫々にかけて

も、必ず成就せしめんとの永久的の事業も、之れに依りて能きるのであります。前述した「驀直に前進して回顧する勿れ。」といふのが大切なところで、吾々が一點疑ひなき確固不動の大信念を有して進んだならば、商人が算盤を操るも、農夫が鋤を動かすも、將た廟堂に立ちて、天下國家の經綸を施すも、總て百花爛熳たる中に、微妙に奏する小禽の音樂を聞きながら、騎蕩たる春風を浴びつゝ、常に各自の責任を盡してゐるやうなものであります。吾々が一度此境地に達せんか、樂んで淫せず、悲しんで傷らず、中庸を得たる立派な人格を作成して、永久に通じ、無限に活躍する生命を得ることが能きるのであります。

道念濃時世事稀	松陵深處掩柴扉
剪茶深愛趙州味	煨芋殊憐懶瓚機
時至三重吟便叫妙	禪從三昧始知微
且喜年窮無二人訪	午汲溪泉濯衲衣

平常心是道

心は主で身體は客

心ある人は、常に修養といふことを口にして居りますが、既に口にして居るといふのは、其必要を感じてゐるからで、言はゞ人各々がそれだけ自覺して來たのであります。人間は唯伎倆があるばかりでは不可ぬ。又仕事が出来るといふばかりでも不可ぬ。其處には人格といふやうなものを鍛え上げねば不可ぬ。品性といふものを高めなければ不可ぬ。ところで其修養であります。文字の示す通り、修め養ふといふことであつて、それは一朝一夕に出來得るものではありません。能く長足の進歩といふことを言ふが、如何にも一と跨ぎに進むのは、壯快な感じがするけれども、此修養の意味に至りましては、却々以て然う一足飛びに行くものではありません。漸以て之れに進むで行くのであります。諺に『桃栗三年柿八年』といひますが、これを能く味つて見ると、大いに意味があると思ひます。木一本植ゑるにしても、三年乃至八年培養して而して後に實を結ぶのでありまして解り易い道理であります。

山の頂上へ登るには、何うしても低き所から往かねばなりません。又深きに往くには、淺き所から往かねばなりません。凭うしたことは三歳の童子でも知つてゐます。けれども其實行であります。此實行して往くといふ心懸が、恰も水の滴りは僅かなものであるけれども、遂に大器に満つるといふ譯で、是又解り易き道理であります。雨垂が一と雫宛落ちるのは、實にまどろしいが、滴々として熈まぬ時は、大なる器物に充滿するのであります。丁度それと同じ意味で、塵も積つて山と爲るのであります。雲間に屹立する高大な山も、豈圖らんや僅少なる塵が積り積つて爲してゐるのであります。だから吾が苟くも修養をしようといふ心懸を起したならば、今説いたやうな心でかゝらねばならない。ところで其修養に就いては、種々なやり方があります。身體から修養するのも一つ、又心から修養するのも一つ、大體すれば此身體の修養と、精神の修養との二つに歸するのであります。併し之れは假りに分つたものでありまして、大體吾々の身體とか、心とかは引分けやうもないので、聲と響とを引分けやうとしたところで、逆も引分けることは能きませぬ。又形と影とを引分けやうとしたところで、引分けられるものでないと同じく、密接な關係どころではありませぬ殆んど裏と表といふやうな最も親密な間柄であります。去れば身體の修養とか、心の修養とかいふのは、假りに分けて言ふのであります。此身體と心、物質と精神とは、それ程密接なる關係のあるものであるけれども、柄どもの立場から考へて見ると、心は主にして、身體は客といつても可いと思ふ。けれども之れは學問と宗旨との立

場によりて異なるので、彼の唯心論者から言へば、心が何處までも主であつて、唯物論者から言へば、物が何處までも主であります。然しながら主と客とは、地を換へれば同じものであります。少年少女の時代には、心とか何んとか然ういふ深い所に入らなくとも、先づ身體の方から拵えて行つたら宜しからうと思ふ。身體で爲したことは、必ず心に及ぼすもので、其影響は却々著るしいのであります。例へば吾々が制服をキチツと着て、人前に行儀よく姿勢を正して座れば、心も亦引き締つて、謹直に爲る。それがしだらなく姿勢を亂して、横臥でもしてゐると、矢張心も又臥してゐるやうに爲ります。莞爾ついた顔をしてゐると、心まで愉快に爲つて來る。青筋を額に立てゝゐると、心までが毒々しく爲るのです。だから昔は敬といふやうな一字を以て、修養法の規矩として、人に教へた人があります。ハーバート大學のゼームスといふ人、此人は最早故人と爲りましたが、此人が妙なことを言ふて居ります。『心といふよりも、先づ身體に重きをおきて、身體を取り亂さぬやうにせよ。』と教へて居ります。吾々の眼に、涙を催すから悲しい氣に爲り、顔が緩むから可笑しく爲るのだと言ふのであります。それで其先生は、門下生に平素座禪のやうなことをさせる。姿勢を正しくして、全身の注意力を氣海丹田即ち臍の下に充たして黙考させるのです。そんな鹽梅で、修養も身體の上から種々せねばならぬことが澤山あります。座るやうなこと計りでなく、冷水摩擦であるとか、海水浴をするとか、或は深呼吸法であるとか、又は擊劍なり、柔道なり、總て其中に修養の氣が含まれてゐるのであります。

眞善美が理想

次に心から修養するのは何うかといへば、吾々の理想通りに見て往かねばならぬ。吾々の理想は今更言はぬでも判つてゐるが、先づ眞とか、善とか、美とか、恚ういふものが理想であります。眞なり、善なり、美なりといふものを實現して、活かして行かうといふのが理想であります。教育の目的も進めて行けば、此點に歸するのであります。吾が宗教も又其通り、戒、定、慧といふものを修して、理、智、用の完全を期するのであります。今理、智、用とか、眞、善、美とか言ひましても、決して其心が前々にあるといふのではない。素より一心の三方面に就いて、假りに眞とか、善とか、美とかいふやうな名を附けてゐるのみであります。去れば修養にも、智的修養があれば、情的修養もあり、又意的修養もあるのです。若し青年の人々にして、教師から種々百科の學問、即ちサイエンス、天文なり、地理なり、乃至歴史なり、化學なり、物理なりを少しづつ教授されて、それで學問は終りかと思ふたら、大いに違ひませう。素より其學問の主體、諸智識の土臺と爲るものは、自分に有つて居るので、それを萬般の學藝の上に引ツ張り出して、應用するのが今の教へ方で、誰れでも人間は生れると同時に、智慧が開けて往く、それで疑ひが同時に起つて來る。子供がヤツと口が利けるやうに爲ると、

何物を見ても疑問を發する。これが物事を識りたいといふ作用を有つてゐる證據でありませう。去れば西洋人も『學問は半ば解釋なり』と言つてゐます。疑ひを多く有つてゐる者は、言はゞ智慧の多い人と言ふても可い位で、學問が進む程疑ひが増して行きます。其疑ひを一々道理に照らし、解釋して往く、自分に會得して往くのであります。さういふ工合に、智慧が進むと共に、一方には吾心を修養して往かねばならぬ。それが智的修養のやり方でありませう。次には情的修養であります。これは享樂といふ意味を以てゐねばならぬ。即ち一つの趣味を、心から生み出すことであります。其情的修養の中には種々あるが、文學とか、美術とか、其中でも音楽とか、繪畫とか、彫刻とか、建築とか、數へれば際限はないが、總てそれを好奇心に供するのでなくて、例へば朝から晩まで、算盤を弾いてゐても、鉄を把つてゐても、法律に従事してゐても、勞力的のことをやつてゐても、仕事其ものに就いて、知らず／＼品性を高めて往くといふ一つの趣味を生み出さねばならぬ。縦令ば越々たる武夫、國家の干城たる軍人でも、戰亂絶え間なき時代に於ても、それが入要であります。源義家が安部貞任と出會した時にも、敵でありながら、和歌と和歌とを以て、情意の投合をやつて居る。『年を経し糸の亂れの苦しさに、衣のたては綻びにけり』と言ひ合ふて戦争をしてゐます。所謂英雄の胸中閑日月ありといふ有様であります。又武田信玄と上杉謙信とが、合戦をした時、謙信が太刀を眞向に振り冠つて、『如何なるか是れ劍刃上のこと』

と、一刀兩斷とばかり振り卸さうとした時、信玄が

『紅爐上一片の雪』

と答へました。其禪的商量は暫く措き、此中に一つの文學的趣味といふものがあるのです。彼の魏の曹操が、赤壁の戦ひに、鏗を横へて詩を賦し『月明かに星稀に、烏鵲南に飛ぶ』と言へる其風流洒落たる心を有つてゐること、今でも想像できます。何うも昔の人は、恁ういふ點に、一頭地を抜いてゐるやうであります。彼の加賀の千代の名高い俳句の、

朝顔に釣瓶取られて貰ひ水

は如何にも優美であります。朝顔に同情して、態々隣家に水を貰ひに行つた。其人柄のやさしさが見えます。これは即ち情的修養に、一つの趣味を有つてゐるのであります。去れば一幅の掛物を見ても、無量の感化を受けます。恁ういふ意味に於て、謡曲を聞いても、何等かの良き感化を受けるやうにならなければなりません。謡曲が難かしければ、淨瑠璃でも、流行歌でも、聞きやうに依りては、情味の修養に爲るでありませう。西洋人の家庭には、必ず樂器が備へてあり、机の上には宗教書がありませう。そして又文學上の書籍も置いてあります。それだけを見ても、家庭の中に、情的修養の準備が出来てゐることが分ります。

修養は頗る面白い

それから意的修養でありますが、之れは意志の方で、即ち換言すれば『心の力』のことでもあります。どんなに智恵があつても、情が麗しくても、此心の力といふものがなければ、總て無駄に爲つて了ります。だから智恵が頭であるならば、情が胸であります。然うして意志は恰も二本の足のやうなものであります。一つの良いことをしやうと、目的を定めて置いたならば、千里の遠きも一步より始まるで、外見せずに進んで往くのであります。それは皆意志の力であります。意志の教育といふものは、初めは行らぬ人から見れば、無意味に爲ります。腹式呼吸の如きも、毎日缺かさずに行ふのは、随分難かしくからう。冷水摩擦も、一と月や、半年は能きるが、却々繼續は難かしい。併し此意志的修養は吾々同胞に於て、最も必要なことであると思ひます。吾々同胞を外國人が批評するのを聞くと、日本人は智恵の敏捷い人間である。又情義も辨へてゐる。けれども意志が弱い、忽ち熱するが、忽ち冷める。藥罐見たやうな人間だと評して居ります。一つの仕事を爲し遂げやうとするには、何うしても意志の力が強くなければ能きませぬ。吾々の先祖が、吾々に何か尊いものを遺して置いてくれたといふことは、祖先の意志が、今日まで存在してゐるのでありますから、吾々も又之れに倍した良き物を遺して往かねばなりません。ところが之れを爲し遂げやうとするには、意志の力に俟たざるを得ないのであります。人と人、國と國とが相對してゐる以上は、一個人の意志、國家の意志、或は社會の意志、群集的意志といふものが、堅實に鍛え上げられなければなりません。吾々の四圍を見廻すと、却々以て油断も隙もならぬ世の中であります。或る學問の道理に照らして見ても、總ての境遇に適するものは、存在して往くのであつて、それに應じない所ものは、悉く敗滅して了ふのであります。優勝劣敗と言はゞ、多少の誤弊があるやうに思はれる文字であります。吾々は何處までもストラツグルせねばならぬ運命を有つてゐます。今の生存競争の世の中に立つては、努力せねばならぬ。若し油断があると、落伍者と爲つて、後に残されて了ひます。だから吾々は智的修養もせねばならぬし、又情的修養も尊ばねばなりません。更に意志の修養といふものに、最も重きを置かねばならぬと思ふ。『景德傳燈錄』の趙州章に

『趙州南泉に問ふ、如何なるか是れ道』
と、泉云く、
『平常心是道』
と出てゐますが、智恵とか、情とか、意志とか、何か學問じみたことを言ふたが、それを一と纏めに

して、心が統一されて了ふと、此處が智慧、此處が情趣、此處が意志といふやうな境はありませぬ。愆く彼是の差別を撤去して、孰れも皆渾然たる統一體の平常の心といふものに歸結して了ひますと、其處に精神上の平和が見出される。世界の平和といふものは、何處から來るかと言へば、此心の平和から來るのであります。愆くの如く心の統一が、確實に實現されるやうに爲る迄、修養を経て來ると、平常の心是れ道といふことで、洵に平々凡々たることでありませう。『平常心是道』とは、常並の心、それが即ち道であるといふのであります。誰でも、心とか、神とか、佛とか言ふと、近い所にあることを知らずに、却つて之れを遠きに求めるのが常であります。神様や、佛様は、別世界にゐられるやうに思ふ。然うして又大道とか、眞理とかいふと、如何にも難かしいことのやうに思ふのが常であります。何んぞ知らんや、孔子の言はれた通り、『道は近きに在り、却つて之れを遠きに求む。』で、足許にあるものを、頭の上に向つて求めてゐます。事は易きにあり。却つて之れを難きに求む。人間は氣が利いてゐるやうで間が抜けてゐることが多いのです。此精神の修養を仕上げたところから言ふと、洵に道は須臾も離るべからずであります。朝ムツクリ起き上つた時にも道があれば、顔を洗ふて仕事に着手するにも道があります。人間は毎日それを繰り返して行つてゐるのです。吾々は道の上に立ち、道の上に働き、道の上に寝るといふやうなもので、道は決して吾々を離れた別のものではありません。これを日々の行事の上に味はつて往けば、往けるのであります。道元禪師の和歌に

水鳥の行くもかへるも跡絶えて

されども道は忘れざりけり

といふのがあるが、愆うした心を以て、仕事をして往つたならば、スラ／＼と抄取つて、困難とも何とも思はないで、水鳥の水の上を往く如く、誰れの足跡もないが道は忘れざりけりで、スラ／＼と往くことか能きます。これが修養を積んだ境涯であるのです。此境涯を孔子が

『吾れ十五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に從へども矩を踰えず。』

と言はれてゐる。愆く爲り來れば、修養は却々面白いことで、之れに依りて得たる力は、生涯用ゐ盡すことは能きまいと思ふ。

苦しみの裏は樂しみ

修養を積んだ心を以て、總ての自然界を眺めて吟じた詩が『無門關』に出てゐます。

春有二百花 一秋有月

夏有二涼風 一冬有雪

若無閑事掛三心頭

便是人間好時節

といふのであつて、これは讀んで字の如く、春に爲れば、誰れがするといふ譯ではないが自然とら
 く春風が吹き、花が咲いて来て、鶯が嬌音を弄する。月は何時でもあるが、殊に秋の月は皓々と
 して牙え渡る。夏は熱いが、涼風が吹いて来て、爽快味を興へてくれる。冬に爲れば、雪が降つて一
 望白皚々の銀世界である。若し閑事の心頭に掛るなくんば、便ち是れ人間の好時節で、自然界は吾々
 に恚ういふものを興へて、慰め樂ましめてくれる。人間致々として終日働いてゐるから、其勞
 に酬ゆる爲めに、之れを興へようと、春は花、夏は風、秋は月、冬は雪を興へてくれるのであります。
 けれども人間閑事が心に掛るから、恚ういふ恩賞に興かつて居りながら、煩悶し苦しんでゐます。だ
 から花を見ても、月を見ても、樂しまずに泣いてゐる。『月見れば千々にものこそ悲しけれ、吾が身一
 つの秋にはあらねど』。月は牙えてゐるが、吾が心に閑事が掛るから、折角朗な世に居りながら、却
 つて自分が苦しんでゐる。それは修養のない人でありませう。若し閑事の心に掛るなくんば、便ち是れ
 人間の好時節で、恚うしたことに爲つて來ると、宛ながら日本晴の空を見たやうな心地に爲つて來ま
 す。此世界を唯蒼蠅い世の中だと觀じたり、味氣ない浮世と見たりして、遂に世の中を果敢なみ、捨
 て了ふのとは豪い違ひであります。修養が出來てゐたら、此世を着蠅いと思はず、樂しく働くこと
 ができます。忙しいのを忙しいと思はないで、働くことができます。それが本當の活動であります。
 機械的に働いてゐるのは盲動的で、何れも働くのは同一でありますが、其精神に立ち入つて考へると

大なる違ひがあるのです。古人が寒山拾得の畫に讚をしました。

掃ふべきほこりもなきに帚持つ

人の心ぞ塵となりぬる

如何にも面白い。ところが其上があつて

掃ふべきほこりもなしといふ人を

掃はんとする帚なりけり

で、頗る面白い。學問とか、理屈とかいふても、古道具屋が店に道具を並べたやうな有様、屑屋が、
 諸所から買ひ集めて來た襪襪を並べたやうな學問や、智識だけでは不可ぬ。修養の上から見れば、洒
 み落々として、すること爲すことが、自ら道に合ふやうに爲つて來ねばならぬ。悟りといふことは
 難かしく論ずることは措いて、一種の修養から練り出した心の光りであると、恚う見たら宜しい。
 恚ういふ工合に、自由に爲つて來れば、何事をするにも取り外しがありません。獨りでも淋しさを感じ
 せず、樂んで仕事をするのができます。であるから此修養といふことを續けねばなりません。人間
 は順境と、逆境との間を往來してゐるもので、順境の裏には、必ず逆境があり、逆境の裏には必ず順
 境があります。又苦樂の間を往來してゐるもので、苦しみの裏には樂みがあり、樂しいと思つてゐる
 と、苦しみが來ます。だから逆境に出合つて、苦しいといふ場合には、修養のある人と、ない人とが

始めて分るのであります。此時若し此世を、平坦な道を大手を振つて歩く如く往くには、修養の力がなければ能きませぬ。然うした時に際し、大抵の者は挫折して、煩悶に陥るのであります。日本は今や、列強の仲間入りをして、一等國と爲つてゐますが、將來更に世界の舞臺に立つて、大いに發展せんとするには、愈々益々精神上の力を深く根底から養はなければなりません。

編者曰く宗演禪師の『座右銘』は左の如し

- 一、早起未だ衣を更めず一炷香。
- 一、既に衣帯を著く必ず神佛を禮す。
- 一、眠るに時を違へず、食飽くに至らず。
- 一、客に接するに獨りをるが如く、獨處客に接するが如し。
- 一、尋常苟も言はず、言へば則ち必ず行ふ。
- 一、機に臨んで讓ること勿れ、事に當りて再び思ふ。
- 一、妄りに過去を想ふ勿く、遠く將來を慮る。
- 一、丈夫の氣を負ひ、小兒の心を抱く。
- 一、寢に就くときは棺を蓋ふが如く、褥を離るゝ時は屣を脱するが如し。

人生向上の出発點

開示悟入の道理

『四河海に入りて復河の名なし。四姓沙門と爲りて皆釋種を稱す。』とは、釋尊弘教の第一聲であります。又、又恠くあらしめることが、釋尊傳道の本旨でもありました。當時の印度に於ける社會制度は波羅門、刹帝利、毘舍、戌達羅の四種で、換言すれば僧族、貴族、農商族、奴隸といったやうな階級でありました。此血族階級の弊に惱まれて、動きの取れぬやうに爲つてゐた印度の社會現狀を、根本的に打破して、一般民族に活氣を吹き込み、之れに慰安と、活力とを興へ、印度民族の向上を圖らうといふにありました。それは單に釋尊が、衆生を濟度せられんとする方便で、釋尊の本意は、百尺竿頭更に一步を進めた一層根本的なもので、人をして世の中の榮枯盛衰に齟齬せず、一時的の安樂に眩惑せられず、永久の安樂平和を享けしめやうとせらるゝにあつたのは言ふまでもないことである。釋尊が自ら『我れ一大事因縁の爲に、世に出現す。』と獅子吼せられたことは、明かに此間の

消息を傳へたものであります。去れば佛一代四十九年の説法を一貫して、説かれたところは『開示悟入』の道理で、人の迷執を開いて、之れに宇宙に於ける常住不變の本體を擧示し、以て人生としての本懷は何のであるかを悟らしめ、日々是れ好日の生活を送らしめんとするにありました。では其常住不變の本體とは、果して何んでありませうか。曰く、我れであります。我れとは何んでありませうか。佛であり、正覺であり、一切萬物であります。古人の語にも『心を識得すれば、大地に寸土なし』と言つてあります。佛敎は其本心を識得するのであります。禪は眞我を徹見徹證するにありるのであります。そして本心といふものは、人々個々圓成にして、動物でも、植物でも、皆具有してゐるものであります。天は高きにありて蓋ふてゐるも、地は低きにありて、萬物を乗せてゐるのも、柳の緑なるも、花の紅なるも、皆悉く本心の現はれに過ぎませぬ。唯本心が、縁に觸れて、種々の形を現したものであります。そして其本心とは、我れであります。人は須らく萬物の究極する所、悉く皆我れに歸し、有爲轉變の激しい此娑婆世界にありても、獨り常住不變のものに我れあるを覺り、戒律を持して、此正覺を生活に於ける行爲の上に現はし、戒行を嚴にして、扶律淡常、我れにある我れの眞我たり、大我たる那一物を顯成する工夫を積まなければなりません。さて釋尊以前の宗教又以後に於ける他宗教、殊に基督教に於てすら、神佛を宇宙の上に、超然たる存在者とし、神佛は我れの外にありて我等をも宇宙をも支配する者であるかの如く敎へ、我れと宇宙と一體、萬物と自己と一如、佛我一體、神我一體といつたやうな敎へは説いてゐませぬ。イエスが『人は神の子なり』と説いたのも、要するに人を神の奴隷従僕を以てしたに過ぎませぬ。然るに釋尊は、『三界唯一心』とも『心佛及衆生是三無差別』とも言はれてあります。

我れの問題に徹底せよ

『禪林類聚』といふ書は、撰者も刊行の年代も判りませぬが、古則公案を人物事物等二十部に分けて類聚し、そして其出處を示し、古人の著語、評唱等をも掲げたものでありますから、古人の間答商量の痕を見るには、最も便利であります。さて此書に

『馬祖道一禪師、衆に示して云く、汝等諸人各々自己これ佛なることを信ぜよ。是れ心即ち是れ佛なることを信ぜよ。是の心即ち是れ佛心なり。達磨南天竺より來りて、中華に至つて、上乘一心の法を傳へて、汝等をして開悟せしむ。僧問ふ、和尚甚麼としてか即心即佛と説く、師云く、小兒の啼くを止めんが爲めなり。云く啼き止んで後如何。師云く心に非ず、佛に非ず』

とありますが、恚くの如く我れが神であり、佛であり、宇宙であり、萬物である。我れは天地の顯現であると自覺するのが、青年に取つても、老人に取つても、男にも、女にも大切なことで、これが人

生向上の出發點であります。臨濟大師は

『隨所に主となれば立所皆眞なり。』

と説かれ、如何なる境遇に入つても、其境遇を支配する主人公と爲りさえすれば、到る處可ならざるはないと説かれてあるのも、又孔子が『中庸』で

『富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ひ、君子は入るとして自得せざるなし。』

と教へられたのも、我れを知り、我れを識得した上の話で、其處まで往くには、即ち修行が必要であります。自分は豪いとか、自分の力を殊更に振り蒔かないでも、修行工夫がチャーンと出来上つて、佛心に得入し、眞我を究明してあれば、一言を發せず、末席に座してゐても、威は満場に揮ひ、氣は天地を動かす力は、自然に現はれて來るものであります。ところが世の中を見渡すに、學問もあり才能もあり、財産もありで、何不自由なく生活して往ける人達が、案外精神的に貧弱で心が貧しく、賤しいのがある。學問もあり、才能もありながら、動もすると財産とか、才能とか、學問とかの上

運用し、而して解脱任運なる境涯を得るやうにしなければなりません。釋尊が初生下に於ける『天上

天下唯我獨尊』の絶叫は、決して孤立的の唯我ではありません。又假我でも、小我でも、我見の我で

もありませぬ。大我でもあり、眞我であります。其眞我の力の顯現したところが獨尊であります。隨

所に主と爲る力は、此獨尊なる唯我の活躍するところに現はれるのであります。だから吾人は、獨尊

の意義を、深く究明し、衣食住に貪着せず、學問、才能、財産の上に超然として、之れが主人公たり

得るやう努力しなければなりません。此隨所に主と爲るには、我れの問題に徹底して、始めて現成さ

れるのであつて、禪門の教ゆるところは、此處にあるのです。けれども何んと言ふても、人の身に取

つては、最も大切なものは身體であります。人は身體が健全でなければ、何一つ出来るものではあ

りませぬ。釋尊は人間として、實に健全なる身體の所有者でありました。四十九年の横説縦説専ら度

生に盡された間はいふまでもなく、出家入山以來の苦行に於て、一麻一米、頰落ち肉瘦せ、憔悴骨立

するといふまでに、苦修練行せられました。若し釋尊にして、生來弱い身であられたならば、或は雪

山に斃られたかも知れませぬ。又は檀特山下に、屍を横へられたかも知れませぬ。けれども釋尊

の堅實なる精神力に加ふるに、健全なる身體は、内外の惡魔とも戦ひ、あらゆる艱苦に堪へても、毫

も撓まず、八十歳の長壽を保たれ、斃れて己むまで、日夕衆生濟度の爲めに、法輪を轉ぜられ得たの

は、一は身體が健全であらせられたからであります。世語に『生命あつての物種』と言ふが、一面か

らいへば、人間一切は、實に身體が生命であります。勇猛精進も矢張り健全なる身體の力に俟たなければなりません。古人には、病軀に鞭ち、虚弱の身體を引立て、行道せられた蹤蹟もありまして、一般にいふことは能きませぬけれども、又然ういふ方面に就いても、更に深く考へを廻らさねばなりません。

大乘佛教たる所以

釋尊は出家してから、苦行外道の仙人に就いて、生老病死の苦から解脱する道を學ばんとせられ、阿羅邏、迦蘭、鬱陀羅といったやうな苦行派の聖者ともいふべき仙人に就いて、修行せられたが、一體此派の主張は、身を苦しめ、雑念を防いで、梵天に生れるといふのが、究竟の目的でありまして、頬に鐵火箸の如きものを貫通して、路傍に立ち、通行人に之れを扶せたり、或は輕業師の如く、高い竿の頂上に、片手で掴まつた儘、ブラ下つたりなどして、苦痛を忍ぶのが、永久の安樂を得る所以であると考へてゐました。老子の

『吾所以有大患者、為吾有身、及無吾身、吾有何患』

と言ふたやうな譯で、最後は何うしても、灰身滅智の空々寂々な冷塊となるのが終局であります。恁

ういふ主義が、決して釋尊の意を満たす筈はないのである。納が若い頃印度に往つた際にも、今尙ほかゝる苦行外道のあるのを實見しましたに、恰も五六月頃水田の中に、蛙の子がウヨ／＼してゐるやうに、ガンヂス河の水中に、浸つてゐる苦行者もあつたが、其主張の淺劣さは、遂に釋尊をして、無師獨語の方針を取らしめたのであります。そして釋尊は、尼連禪河の東畔に、靜地を卜し、六年間端座し、遂に菩提樹下の大禪定に依りて、曉星の煌きを觀て豁然として大悟せられたのであります。人は何事を爲すに當つても、仇や疎かでは到底一事をさえ成し遂げ得らるゝものではありません。釋尊の如く、久しい間の難行苦行を積み、禁慾の修行もし、あらゆる誘惑と戦ふて之れに打ち勝ち、それで漸く眞正の人間が仕上がるのであります。事の成るは、決して成るの日に、成るのではありませぬ。即ち丈夫な身體と、如何なる事に出遭ふても、撓まず、屈せぬ忍耐力がなからねばなりません。釋尊は恁うして自己を究明し、眞義を開智して、永久の平和安樂を得られたのであります。ひとたび慈悲の眼を開いて、世間を見渡すと、此永久の平和安樂を得ること能はず、瞬間の快樂を得んとするこのみに齷齪し、榮枯盛衰、愛別離苦に食着して、惱み悶へてゐるものが、世の中に多いのが眼に着きました。それで何うかして彼等を生老病死の苦悶から解脱せしめ、自分と等しく涅槃を得るやうにしたいものであるとの一念を發起せられたのであります。人は總て自分さえ正しく、賢ければそれで可い筈のものではありません。世間を見渡すと、我利我慾の人が多いやうであるが、社會は一の大き

な家庭生活であつて、長者は幼者を慈愛し、幼者は長者に敬順し、富者は貧者を憐み、智識ある人は無智の者を啓發して往くといふやうに、人々の間には、相扶助し合つて往かねばなりません。釋尊が四民平等を主張せられたのも、斯る社會状態を現出して、社會をして永久平和安樂ならしめんとせられたのであります。けれども吾人は、多く悪平等に陥らざれば悪差別、悪差別に墮せざれば、悪平等に陥り易いのでありますが、此邪思妄見を打破して、宇宙人生の當相を體得し、慈悲心を發起して、人間相互、動物、植物、無生物に至るまで、平安ならしめねばなりません。此處が大乗佛敎の大乗佛敎たる所以であります。釋尊が四十九年間の大獅子吼は、實に一切衆生をして、一味の法益に浴せしめ、一大安樂境に導かんとせらるゝにありました。吾人は此敎を信じ、行し、證得して、眞我を發揮しなければならぬのです。眞我の發揮に依りて、吾人は宇宙と一體、萬物と一如、神佛と如同することを知ります。従つて四民平等、四海同胞の實を知り、社會人類の一大平和を將來せんとの切情が起るに相違ないのであります。

普陀寺

袁枚

一寺藏三山四

松竹淡如許

古佛坐無言

流泉代作語

世界中總て禪の現はれ

悟り了れば未悟に同じ

『山に登らば、須く頂きに到るべし。海に入らば、須く底に到るべし。山に登りて、頂きに到らざれば、宇宙の寛廣を知らず。海に入りて、底に到らざれば、滄溟の淺深を知らず。既に寛廣を知り、又淺深を知れば、一蹴に四大海を蹋蹴し、一推に須彌山を推倒せむ』
これは曹洞宗の開祖道元禪師の書かれました『永平家訓』にある一齣で、言はゞ徹底の禪風を説かれたのであります。人を斬らば、須く血を見るべしであります。苟も參禪に志したならば、中途にして之れを癢するが如くんば、寧ろ初めから、行せざるに如くはなしであります。都鄙の別なく、近頃盛んに禪學の會が設けられ、名ある宗匠を請じて、參禪するものが多いのは、結構なことであります。けれども僅か一週間位の座禪を爲し、提唱の二三則も聞き嚙り、一流の禪者と爲り齎ましたやうな風で、得々としてゐるのを見るが、恁くの如きは洵に痛歎に堪へませぬ。又學生で禪を修する者が

多く、夏季などは休暇を利用して、納の會下にも盛んに飛び込んで来る。けれども其多くは、眞劍に禪を修めんとするのではなく、ほんの避暑がために、禪とは甚麼ものか、一つ座禪を行つて見やうといふやうなのがあるから、少し手強く接待をすると、直ぐに遁げて往つて了ふ。現代を通じて、愆くの如き野狐禪者流を以て、満ちてゐるのであるから、隆盛だからといつて、それは單なる表面の隆盛でありまして、裏面からは寧ろ呪ふべき前兆であると言はざるを得ませぬ。苟も禪を修せんとする者は、愆くの如き淺薄な考へを以てしてはなりません。古人も言はれたのに、

『佛法修行といふは、正傳の善智識に値ふて、佛々祖々の修證せる要訣を明らめざれば、多年辛勞しても徒事なり。乃至萬事を抛げ棄て、唯常識を離れて、迷ひの根源を斬り、三昧の光明を發して、般若の智慧を開くべし。これ即ち佛の知見にして、學佛道の正路なり。』

とも、又

『參學はこれ猛烈大丈夫の事業なり。手に金剛王寶劍を提げて、佛來魔來を問はず、若しこれに觸るゝことあらば、尸萬里に横らん。』

とも言はれて居ります。禪は愆くの如く苦修しなければならぬから、古人は大悟するまでには、一方ならず骨を折つてゐます。慈明、谷泉、瑯琊の三人は、相結んで汾陽に參じました。時に河東苦寒、衆人之れを憚つた。慈明志道にあつて、曉夕忘れず、夜座睡らんとすると、錐を自ら刺すを常とし

ました。後慈明禪師と言はれ、其法を嗣ぐもの五十人に及び、黃龍慧南、楊岐方會の二人最も著はれ、黃龍派、楊岐派の禪の一分派を出すに至りました。又伊庵の權禪師は、晩に至ると必ず涙を流して

『今日も亦、唯愆塵に空しく過ぐ、未だ知らず、來日の工夫如何』

と言ひました。そして衆と逢つても、人と一言も交へず、唯一心に座禪するを常としました。又分庵主といふ人は、道の爲めに猛烈にして、食息の暇がなかつた。一日欄に倚り、狗子の話を看し、雨の降るのも知らず、衣濕ふに至つて、初めて知つたといふことであります。愆く古人の行履を推測するに、實に其苦心されたことは、現代禪徒の想像も及ばぬ程であります。然らば悟つた境涯は、どんなものであるかと言ふに、別にこれといふて變つたことはない。悟り終れば未悟に同じであります。説明を便利ならしむる爲めに、之れを三段に分類説明します。

第一段 は未だ悟らざる境涯で、此時は山は自ら山と見え、水は自ら水と見え、花は自ら紅に、柳は自ら緑に見ゆるのであります。

第二段 は既に悟つた境涯で、此時には、山これ山にあらず、水これ水にあらず、花はこれ紅にあらず、柳これ緑にあらずと見ゆるのが、其悟つた境涯であります。何故然らう見ゆるかといふに乾坤も全く其色を失ひ、日月も夙く其光りを藏すからであります。

第三段 は悟りを忘れた境涯で、此境涯に爲ると、山は自ら山と見え、水は自ら水と見え、

花は自ら紅に、柳は自ら緑に見ゆるのであります。だから悟りを忘じた境涯に爲ると、未だ悟らざる時の境涯が、既にこれ悟つた境涯であつたといふことが解ります。だから蘇東坡は『到り得て歸り來れば別事なし、廬山は煙雨、湘江は潮』といひ。道元禪師は、支那に修行に往かれ、歸朝せらるゝや、嘉禎二年丙申宇治の興聖寺で、開堂して

『山僧叢林を歴ること多からず、唯是れ等閑に天童先師に見えて、當下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞せられず、便ち空手にして郷に還る、所以に一毫も佛法無し、任運に且く時を延ぶ、朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む、雲收まりて山骨露はれ、雨過ぎて四山低し、畢竟如何、良久して曰く、三年一閏に逢ふ、鶏は五更に向つて啼く』

と言はれてゐます。此法語の中に、眼横鼻直といふことがありますが、實に面白い言葉であります。何人と雖も眼は横に、鼻は直に附いてゐます。此點は萬人に共通するけれども、眞個に其眼横鼻直なることを認得して、人に瞞せられぬやうに爲るのは、容易ではありません。恚くの如く悟り了れば、未悟に同じであるが、此大悟を忘るるまでには、容易の修行で出來得るものではありません。

一指頭の禪

悟りに引ツ附いては不可ぬ。禪は執着といふことを、最も嫌ふのであります。迷ひを去るには、悟りといふことが大切であるけれども、其悟りに執着して、悟りが即ち禪宗の眞面目だと考へたら、それこそ大變な誤解と言はねばなりません。人は病氣に罹つたら、藥を飲むが、あれは病氣を癒す爲めの藥たるに過ぎませぬ。若し病氣が癒つてからも、猶ほ服藥してゐたならば、必ず藥の爲めに、身を亡して了ふであります。だから迷ひに執着するといふことも勿論悪いに違ひないが、悟りに執着するもの、又一つの病と言はなければなりません。味噌の味噌臭きは上味噌にあらずといふことがあつたが、悟りの悟り臭きも、又上悟りでないことを知らねばならぬ、ところで現今の禪者は、悟つたらには、何か人よりも風變りのことでもしなければならぬやうに考へて、矢鱈無性に拂子を振つたり、棒を立てたり、又は喝を下したりしてゐるのは、甚だしき間違ひであります。其處は誤解してはならぬ。棒を行したり、喝を下したりすることが不可ぬと言へば、往古徳山が棒を行したり、臨濟が喝を下したりしたのも不可ぬだらうと、非難する人があるかも知れぬが、徳山や、臨濟は共に充分禪を會した上の手段であるから、決して不可ぬといふのではない。眞個に足が、實地を踏んだ人ならば、如

何なる手段に出でても、佛法を離れることはない。佛法を會得もせず、空見識で徳山の眞似をした
り、臨濟に習つたりするのが、不可ぬといふのであります。ところが現代の禪界には、恚うした似て
非なる宗師家があるから、痛敷に堪へませぬ。俱胝といふ和尚は、初め實際と名くる一尼來りて、問
ふたところ、答へることが能きなかつたので發憤し、庵を捨て、諸方に遊歴し、大事を究めんと欲
し、遂に天龍和尚に參しました。天龍和尚は唯一指を立て、示したのみでしたが、俱胝和尚はそれで
大悟しました。これから以後、問ふ者があれば、必ず一指頭を竖起しました。それで世人は『俱胝の
一指』又は『一指頭の禪』と稱しました。此俱胝和尚に一人の弟子があつたが、それが小僧の癖に、
和尚の眞似をして、矢張り指をニュツと立てるので、檀家へ讀經に往つて、

『小僧さん今日は……』

と挨拶されても、指を一本ニュツと立てる。人が玄關へ来て、

『和尚さんはゐらツしやるか』

と訊いても、取次に出た其小僧は、矢張り指を一本ニュツと立てます。それで或る人が、俱胝和尚に
其事を告げました。すると和尚は小僧を呼びつけて、

『お前は何んの爲めに、納の眞似をして指を立てるのか』
と訊きました。すると小僧は、例の通り指を一本ニュツと立てました。和尚はそれを見るなり直ちに

鉢を持つて、其小僧の立てた指をチヨキンと切つて了つた。小僧は痛がつて、悲鳴を揚げつゝ逃げて
往く一刹那に、忽然として大悟しました。俱胝和尚の立てる一指頭は、眞に徹底した上の作用である
から、決して眞理に背いては居りませぬ。けれども小僧のは眞似た上の一指頭ですから、佛法とは毫
も觸れて居りませぬでしたが、一指頭を截斷せられて、初めて其一指頭の禪に徹底大悟することが能
きたのであります。同じ問答でも、徹底してゐるとゐないとは、大變に相違するものであります。
此處に其例話を二三擧げて見ませう。

慧覺和尚は、支那西洛の人で、澧州薬山の古刹で出家しました。諸方を參叩し、遂に法を汾陽の善
昭に嗣ぎ、潯州瑯琊山に住じ、大いに臨濟の宗風を振ひ、雲門派の雪竇重巖と互に唱和し、當時の二
甘露門と稱せられました。そして其住した山名に因んで瑯琊とも、又廣照禪師とも號しました。此慧
覺禪師の所へ、子瑿和尚がやつて来て、

『清淨本然なるに云何か忽ち川河大地を生ずる』

と問ひました。これは元來天地法界は、總て清淨本然であらねばならぬ筈なのに、何うして川河大地
のやうな穢れたものが生じたのであるかといふ質問であります。すると慧覺禪師は

『清淨本然なるも云何か忽ち川河大地を生ずる』

と、問ひと同じ答へをしました。全體此答へは、問ひとどれ程の相違があるものであらう。これは聞

いたと見たとの相違であります。聞いて知つてゐるばかりでは本物ではない。百聞は一見に如かずであります。實物を實地に見て、眞にそれに體達しなければ、得たといふことは能きませぬ。

丙丁童子來求火

雪峰義存和尚は、泉州南安の人で、唐の穆宗帝長慶二年に生れ、十二歳で莆田の玉澗寺に慶玄律師に師事し、十七歳の時落髮受具し、長じて、芙蓉山恒照に事へ、尋で諸所を徧參し、遂に法を徳山宣鑑に嗣ぎ、其苦修練行は『三到三投子九至三洞山』の語を以て、世に知られてゐます。唐の咸通十一年福州府の西二百里象骨山に結庵し、地を雪峰と名けて、此處に居られたから、雪峰と稱されました。此雪峰和尚の所へ、或る僧が來た。すると和尚が、

『是れ什麼ぞ。』

といふと、僧も又同じやうに、

『是れ什麼ぞ。』

と言ひました。雪峰和尚の言つた『是れ什麼ぞ』と、僧の言つた『是れ什麼ぞ』とは、雲泥の違ひがあります。僧の言ふた『是れ什麼ぞ』は唯眞似したのであるが、雪峰和尚の『是れ什麼ぞ』は、眞個

に徹底した上の『是れ什麼ぞ』でありました。實に『是れ什麼ぞ。』も恚う爲つて來ると、輕々に看過することは能きないであります。尚ほ法眼和尚にも、恚うした問答があります。法眼和尚は清涼文益禪師のことで、支那餘杭の人、唐の僖宗帝元年に生れ、七歳の時新定智通院に於て、全偉禪師に依つて薙髮し、長慶慧稜に參すること久しく、更に轉じて羅漢柱琛に侍する數年、遂に其堂奥に入りて衣法を嗣ぎ、後清涼寺に住し、四方の學者翕然として至り、大いに化門を張られました。それで門下には清涼の泰欽禪師や、天台の徳韶禪師などいふ偉傑が、雲の如くあつて、遂に一家を成し法眼宗の高祖と仰がれるやうに爲られました。此法眼和尚の會下に、玄則監院といふ人がゐた。これは金陵報恩院の玄則禪師のことでありまして、監院といふのは、或は監寺、院宰、主首など、稱して、禪院の事務を總管する役僧、即ち今の執事長といふ職位であります。當時玄則和尚は、法眼の會下に在りて、清涼山の監院を勤めて居られたものと見える。ところが玄則監院が、法眼和尚の會下に在りながら、一度も參請入室しませぬ。其處で法眼和尚が或る日、

『則監院何んぞ來りて入室せざる』

と問ふた。物の數にも足らぬ端くれの小僧に言ふのなら兎に角、苟も同寺の副住職の格にある玄則禪師ともあるべき人に、恚う問ふたのでありますから、洵に氣味が惡い。玄則答へて

『某甲青林の處に於て箇の入頭あり』

と言つた。青林は洞山第三世の青林師虔禪師で、洞山大師の法を嗣がれた人であるが、『傳燈錄』や『會元』などには、青峰和尚に見えて、箇の安樂の處を得たりとあるから、青林和尚の法孫に當る青峰の義誠禪師の會下に在つて、見性をした人にも見える。時代から言ふと、青峰義誠の會下にあつたと見る方が妥當であるやうに思はれるから、青林は青峰の誤りと見るが可からう。法眼曰く、

『汝試みに我が爲めに擧せよ。見ん』

と、既に青峰の所で參じて來たといふのは頼母しい。それならば、如何なることに向つて參徹して來たか、言つて聞かせてくれまいかといふのであります。其處で玄則は、

『某甲問ふ、如何なるか是れ佛、林の曰く、丙丁童子來つて火を求むと。』

といつた。ひのえ、ひのとの童子は、即ち火の神を指していふので、それが火を求むるのであるから、それを喻へて見ると、自己を以て、自己を求めやうとするに、同じことであるといふ考へを有つてゐるのでありますから、玄則は恚う堂々と答へたのであります。法眼曰く、

『好語なり、恐らくは爾錯つて會せんことを、更に説着すべし。』

と。お前の言ふことは實に良い言葉ではあるが、恐らくお前は、誤つて會してゐるに違ひない。更に納に向つて、説明して見よといふのであります。玄則は其處で、

『丙丁は火に屬す。火を以て火を求む、某甲の如くんば是れ佛更に去つて佛を覓む。』

と丙丁童子來求火の講釋をし始めました。法眼曰く

『監院果然として錯會し了れり。』

何んだ此莫迦坊主、今少し徹見してゐるだらうと思ふて居たら、何んたる狀だ。さても見下げ果てた青坊主ではあると言つた。玄則は此罵倒を聞いて、烈火の如く憤りました。何んだ法眼の莫迦坊主お前こそ莫迦ではないか。俺の見解が間違つてゐるなんて随分ものを見る眼のない糞坊主だと、匆々支度をして寺を出て了りました。其處で法眼和尚他に語つて言ふには、

『此人若し回らば救ふべし。若し回らずんば救ふことを得ず。』

と。法眼和尚は、血の涙を揮つて、玄則に這裏の一着子を得悟せしめやうとしてゐます。こちらは玄則、寺を出は出たが、途中でハテなと考へました。

『他は是れ五百人の善智識、豈に我れを賺すべけんや。』

今禪界に於て、法眼和尚は一と言つては二と下らぬ大達者である。其人にして俺を未だ不可ぬといふて、許さぬとすれば、これは俺に未だ足らぬ所があるに違ひない。俺は逸り過ぎた。今一度聞き直して來ねばならぬと思ひ付いたのでした。

有繫は玄則禪師でありました。此處まで考へ付くのは、並々の人ではなかつたのです。恰も徳山が、『金剛經』を背負ふて、茶店の老婆さんの一喝を喰ひ、我を折つて龍潭に參じたのと能く似てゐます。

愆^かくて玄^{けん}則^{そく}が再^{また}び還^{かへ}つて來^きた時^{とき}には、最^ちう其^{その}我^が慢^{まん}が全^{すつかり}然^の除^をかれ、前^{まへ}の玄^{けん}則^{そく}とは打^うつて變^{かは}つてゐました。

則^{すなは}ち法^{ほう}衣^いを着^{ちやく}し、袈^け裟^さをつけ、禮^{らい}拜^{はい}して立^たつた。すると法^{ほう}眼^{がん}和^わ尚^{じやう}曰^{いは}く、

「儻^{なんざ}但^だ我^われに問^とへ、我^われ儻^{なんざ}の爲^{ため}に答^{こた}へん。」

何^なんでも可^よいから問^とふて來^きいと。其^そ處^こで玄^{けん}則^{そく}曰^{いは}く、

「如^い何^かなるか是^これ佛^{ぶつ}」

法^{ほう}眼^{がん}和^わ尚^{じやう}問^{もん}髮^{はつ}を容^{ゆる}れず、

「丙^{へい}丁^{てう}童^{どう}子^じ來^きりて火^ひを求^{もと}む。」

と。此^{この}一^{いっ}言^{ごん}下^かに、玄^{けん}則^{そく}監^{かん}院^{いん}は大^{だい}悟^ごする可^で能^きたのでありま。前^{まへ}に青^{せい}林^{りん}和^わ尚^{じやう}が言^いつた「丙^{へい}丁^{てう}童^{どう}子^じ來^きりて火^ひを求^{もと}む。」と、法^{ほう}眼^{がん}和^わ尚^{じやう}の言^いつた「丙^{へい}丁^{てう}童^{どう}子^じ來^きりて火^ひを求^{もと}む。」と同じ語^ご句^くであるが、會^あせる上^{うへ}と、會^あせざる上^{うへ}とに於^おいて、實^{じつ}に天^{てん}地^ち懸^{けん}隔^{かく}の感^{かん}があります。

以上^{いじやう}の例^{れい}によりて見^みる如^{ごと}く、同^{おな}じ問^{もん}答^{たう}でも、徹^{てつ}底^{てい}の如^い何^かに依^よりて、これ程^{ほど}の相^{さう}違^いがあるものでありま

禪が世界を生み出す

『隨^{ずい}聞^{もん}記^き』に

「見^みずや、竹^{たけ}の聲^{こゑ}に道^{みち}を悟^{さと}り、桃^{もも}の花^{はな}に心^{こころ}を明^あかにし、竹^{たけ}豈^ありに利^り鈍^{どん}あり、迷^{めい}悟^ごあらんや。花^{はな}何^なんぞ淺^{せん}深^{しん}あり、賢^{けん}愚^ぐあらんや。花^{はな}は年^{ねん}々^々開^{ひら}けども、人^{ひと}皆^{みな}得^え悟^ごするにあらず。竹^{たけ}は、時^じ々^々に響^{ひび}けども、聞^き者^{しや}盡^{ことごと}く證^{しやう}道^{だう}するにあらず。唯^{たひ}久^{きう}參^{さん}修^{しゆ}持^ぢの功^{こう}により、辦^{べん}道^{だう}勤^{きん}勞^{らう}の緣^{えん}を得^えて、悟^ご道^{だう}明^{めい}心^{しん}するなり。是^これ竹^{たけ}の聲^{こゑ}の、獨^{ひとり}り利^りするにあらず。又^{また}花^{はな}の色^{いろ}の殊^{こと}に深^{ふか}きにあらず。竹^{たけ}の聲^{こゑ}妙^{たへ}なりと雖^いも、自^{おの}ら鳴^ならず、風^{かぜ}の緣^{えん}を待^{まち}ちて、聲^{こゑ}を發^{はつ}す。花^{はな}の色^{いろ}美^うなりと雖^いも、獨^{ひとり}り開^{ひら}くにあらず、春^{はる}風^{かぜ}を得^えて花^{はな}開^{ひら}くなり。學^{がく}道^{だう}の緣^{えん}も又^{また}斯^{ごと}の如^{ごと}し。此^{この}道^{みち}は人^{ひと}々^々具^ぐ足^{そく}なれども、道^{みち}を得^えることは衆^{しゆ}緣^{えん}による。人^{ひと}々^々利^りなれども、道^{みち}を行^やふことは、衆^{しゆ}力^{りき}を以^{もつ}てす。故^{ゆゑ}に今^{いま}心^{しん}を一^{いつ}にし、志^{こころざし}を專^{せん}らにして、參^{さん}究^{きう}尋^{じゆん}覓^{めい}すべし。玉^{たま}は琢^{たく}磨^まに依^よりて器^{うつは}と爲^なる。人^{ひと}は練^{れん}磨^まに依^よりて仁^{にん}と爲^なる。何^いれの玉^{たま}か、初^{はつ}めより光^{ひか}りある。誰^{たれ}人^{ひと}か初^{しよ}心^{しん}より利^りある。必^{かな}らずしも須^{すべ}らく是^これ琢^{たく}磨^まし、練^{れん}磨^ますべし。自^{みづか}ら卑^ひ下^げして、學^{がく}道^{だう}をゆるくすること勿^なれ。」

とありまして、總^{すべ}て實^{じつ}行^{かう}が伴^{とも}ななければ禪^{ぜん}とはなりませぬ。世^せ界^{かい}中^{ちゆう}悉^{ことごと}く禪^{ぜん}の現^{あら}はれでないものはな

く、禪^{ぜん}は世^せ界^{かい}が開^{ひら}けると同^{どう}時に、存^{そん}在^{ざい}してゐます。佛^{ぶつ}も禪^{ぜん}によりて生^{せい}じ、祖^そ師^しも禪^{ぜん}によりて生^{せい}じてゐ

ます。だから換^{くわん}言^{げん}すれば、禪^{ぜん}が世^せ界^{かい}を産^うみ出^だしたと言^いつても可^よい。吾^{われ}々^々も日^{じち}常^{じやう}禪^{ぜん}と同^{どう}生^{せい}同^{どう}死^ししてゐる

のであるけれども、修^{しゆ}行^{かう}が熟^{じゆく}せぬ爲^{ため}に、其^{その}禪^{ぜん}心^{しん}を捉^{とら}へることが能^できませぬ。古^こ語^ごに「一^{いっ}寸^{すん}座^ざれば一

寸の佛』とある如く、只管に打座修行すれば、必ず其境に達することが能きるのであります。既に悟つたならば、其悟りをも離れて了はなければなりません。毎も悟りにばかり引ツついてゐると、遂には毒海に墮ちて、揚つて來ることが能きない。悟りの當體には、毒蛇も棲んでゐなければ、又毒魚も棲んで居りませぬけれども、少しでもそれに引ツかゝると、却つて毒と變ずることに爲ります。誰れでも、一度悟ると、非常に嬉しい。それは從來の疑團が、一時に打開して、無盡の寶藏に驚入するからであります。嬉しいには違ひない。そして此境に達すると、自分だけが、ズツと豪いものに思はれて、他の人々が莫迦らしくして仕様がなない。それで悟つた人は、誰れでも一度は、此境涯に達するがそれを離れるやうにせねばなりません。悟つても、其悟りを樂んでゐるやうでは、未だ眞に悟りを離れた人とは言へぬ。去ればあらゆる煩惱を挫斷して、此世界に超越することができれば、これが悟りの境涯であると思ひ、安心して座り込んでゐては不可ぬ。此處に至りて百尺竿頭進一步の必要がありません。即ち其悟つた境涯から離れて、今日といふ實際世界へ飛び出し、自由自在の働きをするのでなければならぬ。古人の一言半句が、悉く分外に出てゐるといふのは、全く迷ひの分、悟りの分から飛び出して、物外に遊んでゐたといふ好個の證據で、悟りも此處まで來なければ質でありませぬ。物外に遊ぶといつても、自らを樂まんとするのではない。所謂人間世界に飛び込んで、人間と同生同死して、一般人間の迷情を救ふのであります。だから古人は

『三世の諸佛世に出現することは、唯法を説いて、衆生を濟度せんが爲めなり。これを以て四辨八音、竝びに説法の軌範たり。鹿苑、嶺巖又これ度生の道場たり。祖師門下の單提獨弄して、直に本文を示す。乃至而かも其旨的を鞠むれば、亦只法を傳へ、迷ひを救はんが爲めなり。』

と言つてゐます。恁くの如くにして初めて、大悟却迷の人と稱することが出来ます。禪家で能く『擇法眼』といふことを言ふが、これは諸法を揀擇する眼即ち智慧に依つて諸法の實相を明見する眼をいふのであります。南堂道興の示衆に

『五に須らく擇法眼を具すべし。六に須らく鳥道玄路を行くべし。』

ともありまして、所謂此大悟却迷の境界に達した人にして、初めて言はるべきものであります。此處に至りては、何をするにも實に自由自在で、既に自由自在の活機用を得てゐるのであるから、其應用も洵に圓融無礙で、擊石火、閃電光中に於ても、人の黑白を見分けることが出来る。十方世界を尻に引き据ゑて往く人でありませぬ。

黄檗希運禪師、此人は支那福州閩縣の生れで、幼少の折洪州黃檗山で出家された。次いで百丈懷海に謁し、其法を嗣ぎ、後唐の宣宗帝大中二年裴相國師の徳を慕ひ、宛陵に一大禪院を建立して、師を請じ、其寺を開元寺と稱し、四來の雲衲を説得し、示寂後宣宗から斷際禪師の諡を賜はりました。此希運禪師は、身のたけ七尺もあり、額に圓珠があり、容貌魁偉で、學人接待の手段は、極めて辛辣

であつたとのことであります。此希運禪師が南山に居られて、將に辭し去らんとするや、南泉普願禪師が、師を門送し、其笠を取り出して、
『長老の身材没量にして、此大笠子も亦た小なり』
と言はれると、

『笠子小なりと雖も、而かも大千世界は總に裏許に在り。』
と言つたまゝ、笠を冠つて飄然として去られた。こんな大丈夫な境涯は、佛眼も見れども却つて見ることができない。況んや魔魅などが如何に隙を狙つても、更に乗ることができません。恚くて活も自由、與奪悉く意のままであつて、拈却すれば全世界の上に、全自己を現じ、乾坤をも吞却し去ることができます。苟も禪に志を立てた人は、將に恚くの如き不動心を有すべきであります。

誰家竈裡火無烟 強向雪山費二年六一
休レ説見星悟レ道去 癡人尙仰五更天

軍人の修養

聚義の工夫

軍人の修養目的は、即ち軍人精神を完ふするにあります。吾が叡聖文武なる明治天皇陛下は、辱くも大御心を軍國の大事に注がせられ、明治十五年一月四日を以て、普く軍人に詔勅を下して宣はく、

- 一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし。
- 一、軍人は禮儀を正しくすべし。
- 一、軍人は武勇を尙ぶべし。
- 一、軍人は信義を重んずべし。
- 一、軍人は質素を旨とすべし。

又宣はく、
『右の五ヶ條は、軍人たらんもの、暫くも忽にすべからず、之れを行はんには一の誠心こそ大切

なれ。抑も此五ヶ條は、我が軍人の精神にして、一の誠心は又五ヶ條の精神なり。』
 と、吾等國民は拳々服膺して寸時も忘れられないのは、此詔勅であります。君民一體、上下一心、國家の爲めには、何時でも一命を惜まぬこそ、眞の軍人精神といふべきであります。故に『野外要務令』も亦、其綱領に於て、明かに示して曰く
 『義務を守りて、生死を顧みず、一身を犠牲にして、君國の爲めに盡す即ち是れなり』
 と。此精神こそ、眞に男子大丈夫の本領であり、日本魂の精華であります。若し此本領にして、方寸の中に確立せんか、百萬の敵軍も、何んの怖るゝところがありません。若し此精華にして發揮せられんか、其徳實に世界萬國を感化するに餘りありません。眞に是れ君子國の美風、豈に獨り軍人の道徳とのみ言はれませう。之れを要するに、軍人の本領は、即ち忠君愛國であります。其最も惡むべきものは生死であるが、既に生死を解脱し、忠君愛國の精神を完ふするならば、軍人としての所謂美徳は、自ら其中に圓かでありませう。

軍人修養の方法には二種あると思ひます。一を『聚義の工夫』といひ、一を『静座の法』とします。『聚義の工夫』といふのは、平時に於いて意志力を鍛錬するに、最も適切なる方法で、王陽明は之れを事上の練磨といひ、禪者は之れを動中の工夫といひます。即ち誘惑に打ち勝つて、義務を盡すの法であります。それ命令の服行、軍紀の維持、職務の成遂、時間の勵行等は、軍人としての義務であります。

ます。若し軍人の精神にして、常に元氣充實し、一毫の惰氣なかつたならば、是等の義務は、努めなくとも、自らは行はれるであります。けれども如何せん、人は總て此惰氣があるので、無量無邊の誘惑は、常に吾々の周囲を取り巻き、本心を晦まし、そして義務を忘れしむるのであります。誘惑には二種ありまして、一は外界から、吾々の慾心を挑發するものであつて、即ち名利、酒色、地位、權勢、歌舞、音曲等であります。他の一つは、心内に潜伏して、吾々の智眼を蔽ふものであつて、即ち恐怖、疑惑、躊躇、後悔、憂愁、怨恨、不平乃至睡眠等が之れに屬します。斯くの如きあらゆる内外の誘惑に打ち勝つて、吾が心をして亂さしめず、常に本心を以て一貫し、朝から暮に至り、元日より大晦日に至るまで、時々省察し、刻々に體究して、寸時も打失しないならば、誘惑はなく、又誘惑に打勝つものもなく、天地一枚の義務心と爲り終るであります。其極は則ち善惡を離れ、自他を離れ、天地と我れと同根、萬物と自己と一體にして、國家は即ち自己の身體、國家の歴史は、即ち自己の傳記、天皇陛下は即ち自己の元首にして、國民は眞に我が同胞血肉であります。之れを日本魂の大體、忠君愛國の根底とします。又『静座の法』といふのは、即ち静を以て、心身を養ふ法でありまして、或は數息觀とて呼吸を數ふる法もあり、或は古人の金科玉條を題目として、之れに向つて工夫を下す法もあり、或は禪宗の如く、公案を拈提して、直ちに生死の根本を截斷するの法もありますが、先づ數息觀に就いて、其大體の方針を示しませう。

静座の法

其法は、先づ自己の爲すべき總ての事務を、完全に處置し終りて後、静寂な室内で正身端座し、或は結跏趺座とて、佛の座相のやうにし、或は平素人と應對の儀に準し、或は足が痛いならば、椅子に腰をかけるも可く、上半身を眞直にし、兩手の拇指を相柱え、眼睛を一定にし、全身一様に力を入るやうにする。そして後徐々に身を擧げ、前後左右に反覆揺振し、確然として不動の姿勢を取り、所有念慮を癢して、徐ろに呼吸を數へます。出る息引く息に任じて、自然に之れを數へます。若し睡氣を催したならば、出る息を數へ、雜念が紛起したならば、入る息を數へるのです。恚うして緩ならず、急ならず、長からず、短かゝらず、一より十に至り、十より百に至り、百より千に至り、時間のあらん限り之れを體得するのです。そして忘なく、復なく、雜なく、斷なく、只々恚くの如くします。これは一見迂なるやうで、容易らしいが、其實頗る困難でありまして、其困難なるだけ、効驗も又從つて顯著であります。初め之れに着手すると、紛然、雜然、妄想亂れ起り、殆んど一分間も、繼續することは能きませぬ。けれども若し之れをもとせず、剛力無双の勇士が、百萬の敵軍の中に、唯一騎打ち向ふたやうに、勇往直前、不惜身命、一氣に進んで已まぬならば、奇なるかな、沸き立つ熱湯

の中へ、一杓の冷水を注ぐが如く、胸襟分外に清涼でありまして、萬里の氷層裡に座つてゐるやうで、前後截斷、心身共に打失する時がありませう。此時に當つては、妄想の把握すべきなく、生死の解脱すべきなく、自なく、他なく、天地なく、萬物なく、盡三千大千世界只此出入の氣息のみでありませう。之れを入息天地を呑むといひます。此内外一致打成一片の當體から普ねく世界を達觀すると、即ち鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍り、柳は緑、花は紅にして、自己本來眼は横に、鼻は直であります。之れを出息天地を吐くといひます。此呼吸に、天地を吞吐するの境涯は、即ち前の天地一枚の義務心と同一であります。之れを生死解脱の要徑、大無畏の境涯とします。生死解脱の境涯と、天地一枚の義務心とは、其名に於て異なるのみであつて、其實は皆是れ一心であります。即ち修養すべき精神の本體であります。孔子は之れを至誠といひ、佛陀は之れを佛性といひ、基督は之れを聖靈といひます。即ち衆徳の府であつて、萬全の基礎であります。既に此本體を完ふしたならば、即ち軍人として、完全無缺なるばかりでなく、人として精神修養の目的を達するものと言へやう。だから軍人としての所有美徳も自ら其内に圓かならんと。

智仁勇は天下の達徳

軍人としての美徳は何んであるかと言へば、三あります。一に勇、二に智、三に仁即ち優美なる感情であります。平時に於ては、つねに軍紀を維持して、一毫懦弱の所作なく、戦時に於ては、即ち生死の間に出入して、一念の怖思なきを、之れを大勇といふのであります。軍事の智識に精通して、日進月歩の學術に遅るゝことなく、事にあたつては即ち臨機應變、作略縦横にして無礙自在なる、之れを眞智と爲します。若し夫れ古の名將勇士が、戦陣の中にあつても、猶能く此精神を、無上の靈界に翱翔せしめ、士卒と寢食を共にして、其同情心を發表せしが如きは、最も感情の高尙優美なるものとします。

孔子曰く

『智仁勇は天下の達徳なり。』

と、此語軍人に於いても、最も適切であらうと思ひます。

古から、英雄、豪傑、志士、仁人皆此修養の工夫があります。王陽明の致知格物といひ、諸葛武侯の『静を以て心を養ふ。』といふが如きは、皆是れ修養の工夫であります。我邦では楠正成、北

條時宗、上杉謙信、武田信玄の禪的生涯より、加藤清正の南無妙法蓮華經に於ける、徳川家康の一日三萬遍の念佛に於けるが如き、何れも精神修養の爲めでないものはありませぬ。西洋でもナポレオンは常に『我何物ぞ。』What is myself と工夫し、ワシントンには戦中暗夜獨り森林に遁れて黙禱し、鐵血宰相といへば、鬼をも欺く荒くれ武者かと思はるゝビスマークも、其陣中から夫人に送つた幾多の書簡に於て、常に神と人との爲めに、禱れることを書き記しました。又グラッドストーンは、其國會に臨み、反對黨と一大論戦を試みんとするに當つて、必ず先づ其出席時刻前十分間ばかりは睡眠して、鼙聲雷の如くであつたと。其胸襟の洒々落落々として、綽々餘裕あるのは、如何にも修養のないものゝ學ぶべき所ではありませぬか。昔楠正成が湊川で戦死するに臨み、明極の俊禪師に問ふて曰く、

『生死交謝時如何』

師答へて曰く、

『截二斷兩頭一劍倚天寒』

正成曰く

『落處作麼生。』

師威を振つて一喝しました。其處で正成は、通身白汗を流し、禮拜して曰く、
『弟子今日初掀翻向上關振子了。』

と、蓋し正成は嘗て數員の善智識に參じて、心を問ひ、生死得脱の爲めに、幾多の工夫を累ねたのでありました。其末後得力非凡にして、明極の印可を得たのは、元より偶然ではありませぬ。正成の如きは、眞に智勇兼備、精忠無比の軍人といふべであります。

楠公湊川戦死圖

大概 磐 溪

王事寧將成敗論

唯知順逆是忠臣

斯公一死兒孫在

護得南朝五十春

心の大休息

禪は心なり

大抵の人の思ふには、禪といふものは、佛教の中の一つの宗派で、即ち一つの宗派の部類に屬する坊さんの始めたものだ、無論それに違ひはありませぬけれども、然う限られてゐると思つては間違ひであります。歴史上から言つても、禪といふものは、佛以前からあつたもので、達磨が初めて禪を考へ出したのではない。印度には、達磨よりも釋迦よりも、以前にあつたものであります。プラフマ即ち波羅門教の諸宗派の中で、ベダンタ、ヨーガといふやうな宗旨は、殆んど禪宗といつても可いので、禪を以て本意として居つた者があります。歴史上から考へて見れば、禪は佛教以前にあつたといふことが分る。獨り波羅門のみならず、耶蘇教マホメットのの中にも禪の意味があります。併し斷つて置くが、我々の唱へてゐる達磨禪とは、少しく違ふ。似たところがあるが、夫等の宗教のみならず、昔の道徳的、哲學的學問には、皆禪といふやうな意味が含まれてあつたのであります。

禪といへば、種々解釋があるが、禪は心なり。併し動ける心ではない。心といつても、其意味は非常に廣し。Mindといふ意味でもない。強いて言へば、心の本體とでも言へませう。其心といふものを言ひ直すと、昔から云ふ妄想的考へでなく、正思惟即ち靜慮といつて宜しい。斯る禪があらゆる宗教、哲學、倫理の考への中に含まれてあるといふても、専門的の禪を云ふたのではない。恚う言ふ場合に考へると、成程古人の言ふた如來の禪、菩薩の禪、菩薩といへば、大心の衆生と言ふ意味で、世界の平和を理想としてゐる大なる心を有つてゐる人をいふのであります。菩薩には、菩薩の禪があり、凡夫には、凡夫の禪、又外道禪なるものがある。外道といへば、今日では妙な所に使ふやうに爲つて、何か悪い事でもする人があれば、此外道がといふやうに用ゐられるが、宗教でいへば、外教を意味してゐます。即ち悪い意味で言ふのではありませぬ。内道に對する外道、自派自宗に對して、他派他宗といふのと同じであります。それで學者禪、凡夫禪と恚ういふ工合にいふ時は、何れの方面にも禪はある。此點から言へば、基督教が嫌だの、回々教は嫌ひだの、佛教哲學は好かぬのだと言ふても、禪といふ意味はあります。

此意味を應用して往きますと、算盤の上にも、鉄を擔ぐにも禪があります。學生達が教場で、教師の講義を筆記する鉛筆の先にも禪があるし、活花も、茶道も、柔道も、擊劍も禪から出てゐます。恚う弘く取れば、能を舞ひ、論曲を唄ひ、淨瑠璃義太夫、長唄、常盤津といつたやうなものも、又禪ならざるはなしと言ふても差支はないことに爲ります。植物學者が世界を見ると、總て植物的に出來てゐるし、動物學者が見れば、悉く動物ならざるはなしといふやうに見られ、經濟學者だと萬事の上にも經濟の理を説き、文學者、美術家は、總てを文學的、美術的に見ると、同じやうなものであります。けれどもそれ等は一つの感じから然うであつて、宇宙の本體から迄、然うだとは言はぬ所があるに違ひない。併し一つの眞理を、種々の方面から見ると、一つの本體を失つて居ないのが多いのであります。

惡魔の襲來

基督教のバイブルの馬太傳第四に、彼の基督が、ヨハネに就いて、ヨルダンの河で洗禮を受け、其後何うしたかといふと、大野原に往き座禪をしたとあります。其時種々の惡魔が出て來て、基督の靜座座禪を試めさうとしました。基督は四十日間も斷食して座禪をしてゐたところへ、惡魔が野原に落ちてある石を取つて

『お前が果して神様の子ならば、そんなに飢ゑてゐないでも、此石を麵麩として食べたなら可からう』と言ひました。すると基督は、

『人は麵麩のみで生きるものではない。』
 と答へたと書いてありますが、これは良い言葉であらうと思ふ。唯人間は腹一杯飯を食ふたら、活きてゐるといふものではない。如何ほど美しい衣服を、身に纏つてゐても、如何程立派な宏壯な邸宅に住んでゐても、如何程美味いものを食してゐても、又巨萬の富を有してゐても、高い爵位を有してゐても、此點だけでは、何んの價値もありません。人は麵麩のみで活きてゐると思ふたら大間違ひであります。信仰心といふものは、極めて堅固であつて、神の言葉、日本ですれば神の道に依つて、活きてゐるのであります。三十日四十日喰はぬからとて、死んだのではありません。それから惡魔が、種々の所へ連れて往つて、

『高い所から飛び下りて見る、若しお前が神の子なら、神様が救つてくれるから、怪我はしないだらう。』
 と言つて試めして見る。又惡魔が

『俺の足を禮拜しろ。然うしたら世界の榮華を究めさせやう。總て汝の意の如くならしめやう。』
 と言ふた。けれども如何に思ふまゝに爲つても、惡魔の足を拜することはできない。神と佛と違ふやうであるが、其名稱こそ異つても、眞の神佛に變りはありません。

釋迦が、菩提樹下で、悟りを開くまでには、種々の惡魔が出て来て、邪魔をしました。惡鬼羅刹青

鬼赤鬼が、飛道具で佛敎を迫害しやうとしました。それから一方より花の如き美人が現はれて、釋迦の心を蕩かさうとしました。こんな種々の迫害の中にあつて、安然自若一切の魔を降伏させました。ところで惡魔といつても、事實そんな怖しいものがあるわけではありません。これは内心の魔で、其魔が佛の禪定力を亂さうとしたのであります。吾々の心の中は、常に佛と魔が相闘ふてゐて、善と惡、正と邪とが組みつ轉びつして、佛が勝つか、魔が勝つかに依つて、互ひの價値が定るのであります。マホメットの傳を見ても、ヒラの山で座禪をしてゐる時に、コーランの經文を授つたと書いてあるが、恚ういふ有様で、何れの宗教の敎祖にしても、皆靜座座禪をせぬものはないやうであります。衲の考へでは、世の中が開ければ開ける程、忙しくなるから、それだけ此事は大切だと思ふてゐます。

能く働き能く休め

昔の人が『能く働き、能く休む』といつてゐるが、此言葉は大いに味はふべきことであると思ふ。休むといふても、不道德の遊びをするのではありません。大專業のみではない、何事をやらうとするにも能く働き、そして能く休まねばならぬ。それを西洋人は確に實行してゐます。一週間自分が事業に身體なり頭腦なり使ふと、日曜日には慾も得も一切打忘れて、先づ教會に往き祈禱を捧げ、空氣の

新鮮な公園に往つては、老若男女貴賤富打ち交つて、愉快に遊ぶのであるから、元氣を恢復する。其處で一時間遊んだのは、百時間働くことが能きるといふ理屈で、八方に向つて活動するのであります。或る人が、いつ何時でも汽車の中で、眠れるやうに爲りたいといひましたが、それは確に然うであります。いつ何時でも、眠むるといふことは容易ではありません。金があればある程、田地があればある程、神経が敏捷く爲つて心配でならぬ。朝から晩まで追ひ廻されて、安らかに眠ることも能きず、一生あがき死に死んで了ふのであります。差引勘定して見ると、何等残るところはありません。だから大いに休息することです。けれどもこれは極く卑近に取つたのであるが、もつと精神界の方に立ち入り、禪道の上から言ふて見るならば、休むのは必ずしも身心の疲れを慰せんとするばかりではない。我々の心意といふものは、常に妄動して右轉左轉、其安住するところを知らず、幻影のやうな妄境に囚はれて、彷徨ひ惑ふてゐます。其昏沈散亂せる妄情妄念を休息せよと言ふのであります。其處に永劫生死の業海を躍倒し、無明常夜の暗窟を撥轉して、歡喜踊躍の裡に、任運の活動が能きるのであります。大燈國師は京都の五條の橋の下で、乞食と衣食を共にし、行爲を共にして自分の修養を積まれたが、其時の和歌に、

座禪せば四條五條の橋の上

往來の人を深山木にして

といふのがあります。之れ心の大休息を言ふたとも言へませう。古來聖胎長養の歴々は、皆其大休息のところ、身心を棲まはせたのであります。座禪といへば、此活動世界を別にして、靜かな山中に入らなければ、修養が能きぬといふのではありませぬ。互に確固不動の宗教的信念を有つて工夫辨道するならば、如何なる時、如何なる場所でも構ひませぬ。畢竟此大休息の意味さえ、徹底してあれば、それで宜しい。大勝知勝佛が、十劫の間、道場に端座して、座禪工夫したが、佛法が現はれなかつた。成佛が能きなかつた。大悟せられなかつたといふことは、形の上にはかり囚はれ易い弊を、誠められたものと見て差支ありません。併しそれ以上のことは、直參の上で、篤と會得するが宜しい。

惡趣甚茫茫 冥々無日光 人間八百歲
未レ抵半宵長 此等諸癡子 論情甚可レ傷
勸レ君求ニ出離 認ニ取法中王

擔取し去れ

上醫は毒を藥とす

或る時臨濟和尚が、黃檗の僧堂の裡で、座睡しました。丁度其時黃檗和尚が、其處へ入つて來て見ると、柱杖を以て板頭を打つこと一下した。すると臨濟和尚は頭を擧げて、來た者は黃檗和尚であると知つて、却つてグウ／＼高駟で睡りました。此消息は知音同士でなければ、恐らく通じ難いでありませう。時に黃檗和尚は、再び板頭を打つこと一下した。これは果して何の伎倆を弄したものでありませう。恚くて黃檗和尚は、轉じて上間に往き、首座が熱心に座禪するを見て、

『下間に在る禪和子、臨濟を指すは後生なりといへども、却つて座禪す、汝は恚麼に妄想して什麼をか作す。』

と言つた。座睡してゐる臨濟和尚を指して、却つて座禪するといひ、之れに反し座禪してゐる首座を叱つて妄想といひました。實に師家の活手段は、鳥渡不可解であります。其處で首座は不審に思つて

『這の老漢什麼をか作す。』

と言ふた。すると又黃檗和尚は、板頭を打つこと一下し。出で去つたのであります。禪家の機用は恚くの如くであつて、到底普通の繩墨を以て測ることは能きませぬ。だから釋尊は、三百餘會の轉法輪の後に、最後となつて、

『我れ四十九年一字を説かず。』

と言はれた。亦維摩は、構説堅説頻りに兩片皮を鼓くけれども、入不二法門を一問されて、遂に一黙を打して、局を結ばれた。是等の妙味を咀嚼することができれば、必ず言外に宗を會することが出来るであります。

座睡といへば、世俗にもこれに似寄つた話があります。大石良雄が或る時、伊藤仁齋の門に入つて、講義を聴いた。ところが良雄は、講義半に、頻りと居睡を始めたので、外の聴講者は笑つた。講義が終つて後、仁齋は門人に向ひ、

『笑ふこと勿れ。彼れは決して凡器にあらず。必ずや大事に堪へん。彼れの睡眠は、汝等の傾聽に勝ること萬々ならむ。』

と言つた。後果して良雄は、赤穂の義士として其名高く、武人の典型として、敬慕せらるゝに至りました。何事も其道に達しなければ、役には立ちませぬ。邪人正を説けば、正も又邪と爲り、正人邪を

説けば、邪も又正と爲ります。下醫は藥を以て毒と爲し、中醫は藥を以て藥と爲すが、上醫に至つては、毒を以て藥と爲すと言ふではありませぬか。

自己を忘却せよ

文珠菩薩が或る時善財童子に命じて、藥草を探らせました。善財童子が普く大地を見ると、一草として藥でないものはなかつた。則ち手に任せて一草を探り、文珠菩薩に度與した。すると菩薩は、之れを接得して、衆に示して言はるゝには、

『此藥能く人を殺し、亦能く人を活かす』

と。草に殺活の定性あるのではありませぬ。殺活は自分の心に存するのであります。一切諸法は同一の性であるから、其體は迷悟の相を絶してゐるが、凡夫はこれに迷ふて、苦を招き、禍を牽きます。聖者は之れを悟つて、樂みを享け、喜びに住します。佛法も又此通りで、正人之れを説けば、皆正なりといへども、邪人之れを用ふれば、却つて邪見に墮ちます。だから永嘉大師の『證道歌』に、

『非も非ならず、是も是ならず、之れを差ふこと毫厘もすれば、失すること千里』

と言はれた。非に絶對の非はなく、是に決定の是はない。是非の根源は、吾人の一心機にあるのです。去れば毫厘の差が、遂には千里の隔たりを爲すやうに爲るのであります。然らば正を得るには、如何

にすれば可いかと言ふに、それには先づ自己を忘却せなければなりません。自己を忘るゝといふのは、所謂無我に住することでありませぬ。無我であるから、總て我他彼此の見解はありませぬ。どんな事に對しても、酒々落々として、一切の執着はなくなるのです。昔或る僧が、趙州禪師に問ふていふには、

『一物不將來の時如何』

と。これは拙者は嘗て一物をも將來せず、又妄想の除くべきもなく、菩提の求むべきもない實に通身是れ脱落であります。然るに和尚は、愆くの如き境涯に安住する拙者を、如何にしてか接得するかと言ふのであります。此僧は自分だけは、一切の我他彼此の見解を放下したと心得て、愆うした質問を發したものと見えます。趙州禪師之れに答へて、

『放下著』

と。即ち放つて了へ。一物をも持つて來ないと言ふが、一物も持つて來ないといふものを、持つて來てゐるではないか。それをも投げ捨て、了へといふ意味で、實に酒々落々たる所の答へであります。ところで僧は更に、

『己に是れ一物不將來、箇の什麼をか放下せむ』

と言つた。一物も持つて來ないと言ふのに、更に其外に何物を放下するといふのだとの問ひであります。これは一應至當のやうであるが、仔細に考へて見ると、まだ此僧は、一物不將來といふものに捕

はれてゐます。そこで趙州禪師は

『擔取し去れ』

と言つた。徹底放下し盡して、放下すべきものが無きに至らば、之れを擔いで持つて往けといふのであります。乃ち悟跡を忘却して、身心を放下するといふは、別事ではない。先づ已見と、己我とを遠離し、偏執邪智を解脱して、身心を佛祖の大道に一任することでありませう。

或る時蘇東坡が、佛印と遊び、觀音大士が、念珠を持し給ふ像を見て、

『觀音は既に是れ佛をり、如何んか念珠を持するや。』

之れに對し、佛印答へて曰く

『亦佛號を念するに過ぎず』

東坡曰く、

『何んの佛號をか念するや。』

佛印曰く、

『亦只觀音佛號を念す。』

東坡曰く、

『他自らは是れ觀音、如何んぞ自ら誦し自ら號する』

佛印重ねて曰く、

『人に求むるは、己れに求むるに如かず。』

自己の驗證の法は、先づ正心端座して、内心に向つて佛を求むるに如かず、これが最も心地空廓々地に到るの妙法であります。

自ら訓へ自ら誠む

往古震旦の二祖慧可大師が、少室峯頂に臂を斷ちて、達磨大師に參禪された時、第一に安心の道を求められた。すると達磨大師は、單刀直入に、

『心を將ち來れ。汝が爲めに安心せしめむ。』

と言はれました。それ程不安心といふならば、安心させてやらう程に、其心といふものは、一體どんなものか、それを此處に持ち出して見よといふのであります。

心とはいかなるものをいふならむ

墨繪にかきし松風の聲

で、此心の所在ほど、難かしいものはない。慧可大師は、此一問に於て、大疑團を生じ、仔細に研究

すること數年の後、漸く其答へが出来た。それは、
『心を求むるに終に不可得。』

恚ういふ答へでありました。心の本體を究め盡して、遂に心のないことを知り、心の究むべからざるを知る。これは決して心の存在を否定したのではありませぬ。又心の存在を是認したのでもありませぬ。乃ち自己が自己を忘れたのであります。爰に於て達磨大師は、

『汝が爲めに安心せしめ了る。』

と證明された。徹底不可得ならば、其時こそ眞個の大安心が決定されます。こゝを所謂、

『聖人に己れなし、己れならざる所なし。』

とも、又は

『大死一番して大活現成す。』

とも言ふのであります。

瑞巖禪師は、現今の福建省に當る閩の許氏の子で、夾山禪師に參侍し、臺州丹丘の瑞巖山に住し、常に磐石の上に座して、終日愚の如かつた人です。此瑞巖禪師は、二十年來自分で自分を主人公と呼び、自分で返辭をしたのです。そして自ら誠めて、
『惺々著、他時異日、他の謾を受くること莫れ。』

と。それで大いに發悟し、後來一千人の大師と爲つた。自ら誠むる力の偉大なることは、恚くの如しであります。現代の人々にして、此瑞巖禪師のやうな眞面目な人がありませうか。先づ自己に向つて
『オイ主人公居るか。』
と呼び、

『ウン居るぞ。』

と答へる。居るぞといふから、今度は

『醒めてゐるか、何うぢやなく。これから後も、決して他から莫迦にされるやうなことをしてはならぬぞよ。』

と自ら訓へ、自ら誠むる、一日一善とか、一日一訓とかの流行する現今、此瑞巖禪師の修養法を龜鑑として實行したならば、必ず向上の一路を踏み迷ふことなく、遂には本地の風光に合致するのは明らかであります。

秋涼し火宅を出で、寺住ひ 竹の島人

鏡を打破し來れ

道は近きにあり

鎌倉の執權北條時頼の末後の一句に、

『業鏡高懸、三十七年、一槌撃碎、大道坦然。』

といふのがありますが、誰れしも自身で、之れを咀嚼すると、餘程妙味のあることと思ふ。近頃は一般に、科學的智識の方に風潮が向ひて來て、大なる進歩をした代りに、東洋の古典、古文學に就いての智識が、以前より餘程缺けて來ました。これも時世で仕方がないのでありませう。けれども古文學の方にも、却々捨て難い妙所があつて、之れを味はふのは一種の修養でありませう。前述の『業鏡』の業は、佛敎の術語であります。これをどうと發音しますのは、梵語のカルマの漢譯であります。善惡の行爲より見る因果の連鎖又は原理とでも譯すべきであります。先づ大體此人生といふことにして置いて宜しからう。鏡とは之れを文學的詩的に言ふたのです。之れを高く懸くこと三十七年、時

頼は三十七歳で歿しました。一槌は一つの金槌で、業鏡を撃碎すれば、即ち善惡とか、生死とか何んとかかとか言ふもの、一槌に撃碎すると大道坦然で、坦然は平かでありまして、文字はこれだけあります。所が此大道といふことは、我々が常に口にしてゐることであつて、大道と言ふたり、或は眞理といふたり、宇宙の本體とか、實體と言ふたり、宗旨、學問に依つて、種々に文字を使つてあるが、指すところのものは總て一つであります。我々が品性を修養せんとか、精神を鍛鍊せんとか言ふても一つの標準が此處に定まらなければ、勞多くして効を收めることが洵に少い。我々品性を高めて往かう、精神を鍛えて往かうといふことに就いては、其精神とそれに相對する所のものとを合せて、假りに之れを大道と言ふても可い。其大道といふものを、向ふに的に掛けて置いて、そして此方から精神的の矢を放つのであります。然うした心構へを以て、我が精神を鍛鍊し、我が品性を修養するといふことに爲れば、其修養は著々として、意味ある仕事に爲つて來るだらうと思ひます。大道……大なる道と言ふと、何か人が目を睜つて、大層遠方に持つて往つて、之れを眺めやうとするのであります。けれども平素我々が勤めの上、朝から夕まで、行住座臥、造次にも、顛沛にも、常に働きつゝある其處が即ち大道の眞只中でありませう。それであるから、我々が座つてゐる時でも、立つてゐる時でも、一擧手一投足、其上にも實は歴々として現はれてゐるのであります。大なる道は、小なる道の上にあるので、然うしたことを考へて見なければ分りませぬ。

鳥渡例を引いて見ると、昔恠ういふ問答があります。『如何なるか是れ道』と問ふた人がありました。此道といふことは、種々の道があつて、歴史的に言へば、佛道とか、儒道とか、人道とか、恠ういふ風に、種々立てると、際限がありませんが、基督教とか、回々教とかいふものも、又皆道といふことが能きませう。其意味の道なのであります。今之れを尋ねた。『如何なるか是れ道。』すると古人は、『牆外底。』と答へました。『牆外底』といふのは、門牆の牆で、所謂垣、外は言ふまでもなく外、底は的といふ意味に使つてあります。『如何なるか是れ道』と尋ねたら、答へて曰く『牆外底』。お前は道を尋ねるが、門の前に出て見るが可い、壁一重外は道ではないかと答へました。學校へ往くにも、役所へ往くにも、會社へ往くにも、總て其道を通るのであります。其道であります。『如何なるか是れ道。』答へて曰く『牆外底』、すると問ふた人が『這箇の道を問はず、古より今に至るまで、一以て之を貫いてゐるといふやうな大道を尋ねるのである』と更に切り込んだら、之れに答へて曰く『大道長安に通ず。』と。支那では其當時、都を長安に置いてゐたので、それから出た詞であります。日本でいふなら國道、大きな道を尋ねるならば、眞直に長安の都に通つてゐるではないかといつたのであります。却々面白い。道は近きであり、却つて之れを遠きに求めやうとするのが、我々の常であります。

學問其儘は中毒

大道といふものを、修養上から味ひ得たらば、常道の上にあるのであります。それを遠くから見ると、分らなく爲るので、眞の妙といふものは、素人目に見えず、口で言はれぬ所にあるのです。カ
ーライルが、

『今若し、隻手を伸ばして以て、此赫々として空間に照り輝いてゐる太陽を、一と攫みにすると言ふたら、人は大なる奇蹟とするであらう。ところが實は奇蹟はそんなものではない。眞の奇蹟といふのは、此時間、空間といふものゝ上に、超然として外に出て眺めて見ると、今此瘦せた腕で、ペンを握つて、紙の上にスラ／＼文字を書いて往く、これが眞の奇蹟ではないか。然うであらう。幾百千萬年の歴史でも、一本のペンで、スラ／＼と書き出すことが能きるのは、眞の奇蹟ではないか。隻手を伸ばして、太陽を攫む如きは何んでもない事だ。』

と言つてゐるが、頗る面白い。禪宗の主旨と殆んど符合してゐるのであります。これは考へて貰はぬと解らぬが、禪語に、
『佛殿走つて山門を出で、燈籠跳つて露柱に入る。』

といふことがある。燈籠が跳り出して来て、大黒柱の中に飛び込んだ。佛殿が走り出して、何處に往つたかといふと、誰れしも知る通り、寺には山門がある。其山門の外に駈け出して往つた。愆ういふことを言ふと、寓言の如く思はれやうが、決して然うではない。カーライルが言ふた如く、小さい、短かい手で、空間に輝いてゐる太陽を攫むといふ如きことは、時間といふものを忘れ、空間といふものを忘れて、これも飛び越えてやれば何んでもない、丁度子供が熟してゐる柿を、手を伸ばして、取つて袂に入れるのと同じであります。今大道といふものを、悉皆我物にしてしまふと、大道といふ形がなくなる、食物も然うであります。外部のものを取つて来て、口を通して體內に入れる。そこで消化されて血と爲り、肉と爲る如く、種々の學說、學理も、只其儘では眞の悟りにはなりません。道臭いのは、眞の道ではなく、學問の學問臭いのは、眞の學問でなく、又悟りの悟り臭いのも、眞の悟りではあまりせぬ。人蔘、大根を食ふて、それが人蔘、大根其儘で排出されるやうでは、却つて身體を害します。學問も、學問其儘では、學問の中毒をするのであります。大道といふものも、我が品性の鍛錬、精神の修養が出来て來るに従つて、大といふ姿と、小といふ姿とはなくなつて了ふ。即ち消化されて了ふやうなものであります。然う爲つて來ると、『如何なるか是れ道』といへば、『墻外底』も大道なら、長安に通るのも、亦大道と爲つて來ます。我々は唯學問を取り込むばかりでは不可ぬ。取り込んだ智識學問を、一切我が心の齒に咬み締めて消化させて、力とするのが、それが眞の修養の道であります。『大道坦然』といふた北條時頼は、眞の悟り、眞の學問をこなし一人であらうと思ひます。歴史を見れば分りますが、内治に於ける時頼、外交に於ける時宗はどんなのでありませう内治に於ける其行り方を形容して言へば、春風煦日の如しと言へやうし、之外交に於ける時宗を形容して言へば、秋霜烈日のやうな有様で、此二つが對照して、北條氏の歴史を飾つてゐるのであります。北條氏は皇室に對して不敬であつたとか、國家に對して亂暴を働いたとかいつて、義時や高時を惡罵しますが、之れは善き人を言はずに、惡い人ばかりを擧げて言ふことで、これは史論に屬するから、爰に其是非を論ずる必要がありません。

精神的の明鏡

天下の執權職に爲つてからの時頼は何うであつたかといへば、陪臣から成り上つただけに、能く政治上に心を用ひて居ります。嘗て雪の降る晩、家臣の大佛何某を呼んで、自分の居室で政治を談じたところが、夜が更けて空腹に爲つたので、有合せの濁酒を温め、殘醬を甜めながら、堂々と天下の政治を議したといふことであります。勿論現今と其當時とを、物質的に比較する譯には往かぬが、兎角物質といふものに、眼を眩惑されて居る者は、時々古いことを顧みる必要があらうと思ひます。又早

魅の時、時頼が諸國の僧を集めて、雨乞の祈禱をしました。そして其僧達を饗應してゐると、彼の有名な青砥藤綱が出て来て、

「貴方の行爲は何事だ。恰も、牛が溝の中に放尿するやうなものだ。此早魅で、諸民が困つてゐるのだから、せめて牛が畑の中に放尿すれば、何分か潤ひに爲るものを、溝の中にするとは、何といふ愚かな牛であらう。今貴方の招待に與つて、出て来た坊主どもは、貪婪飽くことを知らぬ賣僧ばかりで、眞に尊ぶべき聖僧は來て居らぬ。今天下の民が困窮してゐる時に、こんな生臭坊主どもに、經を讀ませて、馳走をしたとて何んの効がありませう。」

と天下の執權職たる時頼を事もせず、憚る色なく苦言を呈しました。時頼は之れを聞き、藤綱の如き硬直の臣がゐて、遠慮なく言ふてくれねば、眞の政治は執れぬと感服し、それから愈々藤綱を重用したといふことであります。時頼の行り方は、こんな風でありました。他日執權職を投げ捨て、身は一所不住の雲水僧と爲り、日本六十餘州を廻國して、親しく民情を視察しました。或は後世の作か知れませぬが、佐野源左衛門常世のことに關し「鉢の木」といふ謡曲があります。然うした逸話さえ賄してゐるのです。『業鏡高く懸く三十七年』で、我々は鑄物師や硝子屋が造つた鏡でなく、精神的一面の明鏡を有つてゐるのです。我々は眼なり、口なり、耳なり、鼻なり、舌なりに何物が來ても遁しませぬ。周圍の境遇から出て來るあらゆる刺激、あらゆる誘惑、善か悪か、是か非か、美か醜か一々

此心の明鏡に寫して見る。花は紅に、柳は綠に、一點私なく寫して見るのです。決して愛憎偏頗がありませぬ。之れを業鏡といふのであります。畢竟時頼は、活きた一面の鏡に、一切萬象を寫して其上に活動したのであります。之れが三十七年間であります。實に一面の鏡が、明皎々と現はれて居りました。之れは修養が積まぬと能きぬことで、修養を重ねて、明皎々たる鏡が現はれて來る。此處へ到來すると、自己といふものゝ本體が分る、自己といふても、これは單にセルフといふことゝは違ひます、彼のグリーンの所謂ツル、セルフ即ち自己の實體であつて、それが現はれて來るのであります。一面の業鏡が、次第々々に光りを放つて來る。禪宗でいへば、悟りが開けかゝつて來た時であります。これは時頼が、禪に入つて、磨かれた力であつて、轉結「一槌に撃碎すれば、大道坦然でありませぬ。これに頗る妙味があるのであります。光り煌いてゐる鏡であるが、只明鏡の儘では未だ姿が残つたり。爰に頗る妙味があるのであります。光り煌いてゐる鏡であるが、只明鏡の儘では未だ姿が残つてゐる。悟りの臭味、學問の臭味、若くは哲學的に、何か一種の塊があつて、未だ充分消化されて居らぬ。然るに只今此光り煌いてゐる鏡を、鐵槌で打ち碎いて了つたといふのであります。其當體は大道坦然たりで、爰に眞の大道坦然が現はれて來て大安心を得る、恚う言ふて差支なからうと思ふ。昔或る人が『純清絶點の時如何』と問ふた。それは鏡に一點の曇がないといふ状況であります。古人之れに答へて曰く『猶是眞常の流注。』と、恚ういふのは禪語であるから、或は通じ難いであらうが、猶是眞常の流注、一と口に言へば、僅かな迷ひが賄つて居るといふ意味であります。すると更に其人



が『向上別に事ありや』と問ふたら、曰く『在り。』、『如何なるか是れ向上の事。』と重ねて問ふたら、答へて曰く『鏡を打破し來れ、吾れ爾と相見せむ。』と。眞に向上の事が聞きたければ、鏡を打ち砕いて來い。貴様は一つの鏡を有つてゐる、一つの見識を有つて居るから不可ぬ。それを打ち破つて來い。其時は相見するであらう。平常多少恚ういふことに、心を用ゐてゐる人だと、津々として味ひ禁ぜざるであらうと思ふ。

過二香積寺一

王維

不知香積寺 數里入二雲峰一 古木無三人逕一
深山何處鐘 泉聲咽二危石一 日色冷二青松一
薄暮空潭曲 安禪制二毒龍一

支那の佛教

極端なる個人主義

元來支那といふ國は、頗る不可解であります。だから一言以て、之れを適切に批評し去るといふことは困難であります。即ち支那は觀察次第に依つて、どんなにも批評されます。大といへば、大といふことが能きるし、小と見れば、小と見ることも能きる。其大なる點を擧げると、第一に其領土であります。支那の面積は、今更言ふ迄もなく四百二十四萬方哩と稱せられ、我が日本の面積の僅か四萬方里なるに比すれば、實に廣大なるものであります。第二は其領土の中に包有せらるゝ自然の天恵である大河は、縦横に流れ、大野平原は、南北に續き、五穀豊穰、交通運輸の便開け、加ふるに地下には無盡藏とも稱すべき礦物が埋藏されてある。揚子江の如き、其本流支流及びそれに連る湖沼の類を合すれば、其面積優に我が本土に比すべきもので、皆航運に利用され得るのである、第三は其人民で、人口に就いて種々の説あるが、普通四億と稱せられ、實に世界人口の約四分の一を占めてゐます。そ

して其數に於て大なるばかりでなく、四千年來の歴史と文明とを有し、多數の傑出せる人物を出し、今日に至る迄、形而上にも幾多感化功績を遺してゐるが、形而下即ち物質的方面に於ても、始皇の萬里長城、煬帝の大運河の如き、稀世の遺跡を有してゐます。殊に驚くべきは、其繁殖力と勞働力で、繁殖力に就いて言へば、四千年來天變地異、惡疫流行、外患内亂、洪水飢饉屢々あつたに拘はらず、生々止まず、今日に於て其或る部分の如きは、世界有數の密度を有してゐます。勞働力に於ては、支那苦力の如き、皆牛馬生活を爲して、一日の生活費僅に五錢乃至十錢にて足る有様で、歐米人の家畜家禽以下の生活を爲しつゝ、而かも其勞働力の大なることは、全く動物的といふも過言ではない。勞働の價値如何は別問題として、此の如き勞働力は他日世界に必ず何等かの力と爲つて現はるゝでありませう。併し其小なる點を擧ぐれば、第一支那人は、國民としては洵に小であります。即ち國家の一分子としての點から見れば、皆極端なる個人主義でありまして、四億の人間は、四億の心を有し、一致協力、一團と爲つて、國家的に活動することが能きませぬ。國家に關しては、一向無頓着で、統治者が楚人たると、越人たるとを問ひませぬ。所謂『日出で、耕し、日入りて息ふ、帝力我に於て何にか在らん』といふ有様であります。だから國家的施設といふものが、皆小さく爲つて來ます。納が巡錫中に氣付いた一端を擧ぐれば、兵制、幣制の如きは然うである。兵制に就いて言へば大總統に直屬せる國家的軍隊なく、多くは督軍、鎮守使以下の私兵であつて、部分的には強くも、國

家的に働くものはありません。だから其兵幾百萬あつても、之れを以て大なりといふことは能きませぬ。幣制の如きも、全く門外漢たる納の短時日の巡錫中に於ても、其複雑亂雜なるは看取し得られる程で、國家的に統一されたものはありませぬ。教育の如きも、定めて制度だけは、明文に規定してあらうけれど、實際では頗る亂雜であります。最後に宗教も亦極めて亂雜であります。宗教は彼の國教制度のやうなものを以て、其信仰の程度如何を忖度することは能きませぬけれども、支那の近き状態は、餘りに無秩序であつて、道教、孔子教(果して宗教なりや否やに就いては議論があるけれども)基督教、回教といふ如く、雜然として行はれ、特色ある宗教なく、之れを信奉する支那人に、確固たる信念、明かなる意識なく、餘りに不透明にして、殆んど無宗教の觀を呈してゐます。であるから支那を大といはゞ大、小と見れば小であります。實に不思議な國です。

道教及び孔子教

宗教者の納の立場から、特に支那の宗教に關し、一步立ち入つた觀察をみると、支那の宗教が雜然として存在してあるが、中に就いて固有の道教及び孔子教は、支那人間に根深深く、支那を今日に導いた主なる原因の一と稱して可からう。此二教は同一國に生れたものであるが、根本の宗旨は、極端

に相違してゐます。即ち道教は平等教でありまして、孔子教は差別教であると稱して宜しい。老子の語に、

『大道廢れて仁義あり、智慧出で、大偽あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠信あり』とあり、又

『古の善く道を爲す者は、以て民を明かにするにあらず、將に以て之れを愚にせんとす。民の治め難きは、其智多きを以てなり、智を以て國を治むるは國の賊なり、智を以て國を治めざるは國の福なり』

など、説いて居ます。一言以て之れを評せば、道教は虚冲、恬淡、寂寞、無爲を以て宗旨としてゐる有様で、社會國家の組織、活動、生活、秩序、形式を無視し、其外に超然として以て、高見の見物をするといふ宗旨で、眞平等か、悪平等か知れないけれども、兎に角平等教たることは、疑ひを入れませぬ。時代は異なるが、儒教は當初から、社會、國家、個性を眼中に置き、孝悌忠信といひ、禮樂刑政といひ、仁義禮智信といひ、人として是等の諸徳は、固定的に有するものとし、禮記の如き一言一行皆禮に叶ふものとし、一定の形式に據らざる可からざるものとし、禮儀三千威儀八百といふ語もあります。吾人の根本個性は、絶對的であつて、善惡正邪は、固定的にあるものでないのに、儒教は以上の如く説き、一身、一家、社會、國家皆之れを一の形式習慣を以て律しやうとしてゐます。此兩宗教

が、支那人に與へた利益の少くないのは勿論でありますが、同時に其の弊害も多い。支那を現今の狀態に導き、國家の獨立を危くし、人民の體面を損せしむるに至つた主なる原因と爲りました。即ち儒教の形式、禮儀を重んずる結果から生じた弊害として、徒らに虚禮に流れ、形式に捉はれ、虚偽の孝子、忠臣増加し、繁文褥禮と爲り、遂に精神を全く没却して、形式のみ取れば、可なりといふ有様と爲り、葬式には必ず泣男を傭ふといふ愚なる習慣をさえ作るに至りました。支那人を腐敗せしめたことの頗る大なるはいふまでもありません。同時に道教も虚冲、恬淡、寂寞、無爲の本領が一轉して萬事諦め主義と爲り、内亂外禍皆已むを得ぬことに諦めて、無頓着と爲り、敢て奮起健闘することせず、遂に國民として最も微弱なるものと爲したのであります。

次に支那の佛教であります。後漢の明帝の時に、初めて傳來されたのであります。前漢の哀帝の元壽年間に渡來したといふ説もあるが、爰には歴史の考證は避けます。即ち永平年代に、明帝が靈夢を感じ、博士秦景等に命じて、大月氏國に佛法を求めしめたところ、恰も可し、大月氏國から、迦葉摩騰、竺法蘭の二人が、佛經を白馬に載せて來るのに逢ひました。其處で洛陽に、白馬寺を建立して彼等を迎へたのであります。其後各朝相繼ぎ、佛教も之れに伴ふて榮枯盛衰がありました。現今に於ては、僅かに其形骸を貽してゐるに過ぎぬ状態に爲つてゐます。元來佛教は、各派に分れてゐるけれども、本來の面目は、差別即平等、平等即差別であつて、一面から見ますと超世間であるも、又一面

から言へば入世間であります。前者を眞諦といひ、後者を俗諦と呼びます。要するに平等差別の換へ言葉であります。即ち佛教は、安心立命を人間以上に求め、そして一々其行はるゝ國々の状態に適應して、社會の發達を助くる宗教であります。だから支那に入ると、一時は此兩者を凌いで、非常の勢ひで傳播し、其後二宗三武の排佛等の迫害に遭つたが、其都度反撥して、却つて盛大と爲りました。そして爰に注目すべきことは、佛教は幸か不幸か、初めから國王貴族の間に信奉せられて勢力を得、國王貴族が、盛んに爲れば、佛教も又盛んに爲り、衰ふれば又衰へ、盛衰を共にした觀がありました。が、清朝を以て、國王及び貴族は終りを告げたから、同時に佛教も衰へ、以て現今に至つてゐるのであります。

佛教は社會と没交渉

基督教と回々教は、支那人の一部特別なる方面に勢力を有してゐますが、先づそれは措くとして、第一に現今の儒教は何うかといふに、全く記誦辭章の學問の如く爲つて、一流の人士の間に行はれてゐるに過ぎませぬ。第二に道教は何うか、これは二三流の人士の間に行はれてゐるが、要するに吉凶禍福に就いて依頼し、不老不死を願ふて、以て飽くまでも現世の肉體的物質的の慾望を満足せんことを祈

る手段と爲り、福利を恣にして、人間の享樂を充分にする方便と爲り、老子時代の本旨とは、全く異り、娘々廟、關帝廟のやうなものを至る所に造つてゐます。第三に佛教は何うかと言へば、歸依者であり、保護者であつた國王亡び、纒に山林間に餘喘を保つゝの振はざる状態にあります。納の見たところに依れば、江蘇、浙江、福建地方の如きは、尙ほ盛んに行はれ、數に於ても、其實質に於てもこれを他の宗教に比して立派であります。けれども其昔のやうに盛んでないのは、保護者のないのと、元來人類救済のものであるに拘はらず、現今の支那では、全く社會と没交渉たるかの觀があります。佛教は現今の支那では、恡く不振の状態にあります。納は支那將來の宗教として、最も適應するものは、佛教以外にはないと信するのであります。佛教は決して貴族的ではありません。現に佛が山を出て、最初宣言せられた語に、

『四河海に歸すれば皆同一鹹味なり。四姓(波羅門、刹利、毘沙須陀)英國人は之れをカストと稱す』佛に歸すれば、同じく佛子』

とありまして、支那の將來は、此主旨を基礎として、一般民心を根本とし、平等即差別の教理を中心として、以て國家の隆昌を計らねばならぬと思ひます。平等即差別の教理を、極めて簡單に説明した二偈があります。

『身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々拂拭して、塵埃を惹かしむる莫れ。』

と、之れに反して、
 『菩提本樹に非ず、明鏡亦臺に非ず、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん。』
 と、即ち一は平等であつて、一は差別、互に相表裏して、其面目を此短偈中に説破し終るものであります。

西行

さとりえし心の月のあらはれて

鶯の高根にすむにぞありける

契沖

うき時は親だに子をばすつるなる

佛しなくばたれをたのまん

覺性

鶯の山月を入りぬとみる人は

くらきに迷ふ心なりけり

渡米雜感

座禪の思ひ立ち

納が亞米利加へ往つたのは、何うした動機からであつたか、先年シカゴの博覽會に往つたが、それは佛法の言葉で言ふたら、因縁であつたかも知れませぬ。其後十三年経て、或る米國人が、當時納がゐた鎌倉の圓覺寺に來ました。これはミセス、ラツセルといふ人の一行四人でありました。此人が横濱に上陸すると直ぐ、ガイドに向つて、日本に座禪をしてゐる人があるかと問ひました。此問ひは大いに所以があります。其ラツセル夫人一行は、圓覺寺に來た時よりも、七八年前から既に座禪をして居りました。それは銘々の吐から割り出して、座禪しなければならぬと思ひ付いたからであります。段々ラツセル一行にも訊き、又現に其状態を見ると、何處から恚ういふ心を惹起したか、今は文明の世の中でありまして、將來如何程此文明が、進んで往くかは、測り知ることが能きないと同時に、此進歩的世の中に、我々が處してゐるのは、一大幸福の如くにも見えるが、又一方から考へて見ると、

此文明なるものゝ爲めに、互に忙殺せられて居りはせんかといふやうな有様で、學者と學者とが互に競争してゐるし、智者と智者とが又互に競争してゐます。それから社會のあらゆる方面を観察すると貧乏人と金持、無學者と學者、地主と小作人、雇主と被雇人とが、互に權利とか、義務とかいふやうなことを口してゐる。畢竟何處に歸するかといふと、競争ばかりしてゐます。互に追ひ駆け合ひをしてゐるのであります。人間の壽命は、先づ五十年と定められたやうで、七十古來稀なりといふ位であるが、其月日の間に互に追ひ駆け合ひをしてゐます。言はゞ利益を得るとか、幸福を得るといふことが、總ての目的に違ひないけれども、其目的に反して、却つて目的を得んが爲めに、其人は常に追ひ駆けられ、苦しめられて、遂に闇から闇に飛び込んで了ふといふやうな状態ではなからうかと思ひます。獨りラッセル一行のみならず、或る人が宗教を一つ發起したと見る。それは博善的から來るものもありませう。若しくは逆境に處し、順境に處するといふやうな種々の動機はあらうけれども、要するに生存競争といふことに過ぎぬであらうと思ひます。此生存競争の中に立ちながら、如何にして我が愉快に此世を過すことが能きませうか。言はゞ不完全なる中に立ちて、完全なる状態を保つことが能きか、或は不自由とか、不平とか、不満足とかいふことでなく、一つの満足、一つの安樂といふものを得ねば、殆んど人間としての價値はない。昔から萬物の靈とか言つてゐるが、殆んど其價値はない。畢竟恚ういふやうなことに歸するのであらうと思ひます。ラッセル一行も、最初は恚ういふ

動機から來たのであります。ラッセルは大學も卒業してゐまして、中以上の財産家で、別に不足のない身分の人でありました。其不足のない身分の人であつたけれども、初めは競争の中に立つてゐて、其中に惑亂せられざるところの心の安寧を得ねばならぬと、恚ういふことがあつたに違ひない。獨りラッセルのみならず、他の人も然うである。又それと同時に、基督教並に佛教の二宗教があつて、基督教國にも佛教が入り、佛教國にも基督教が來たといふ譯で、學問に適した宗教を、互に擇ぼうではないかといふ氣運に向つてゐます。恚くの如き宗教の有様といふものは、學問が次第に開け、智識が次第に進んで來た賜物であらうと納は思つて居ります。一と口に言へば、生存競争に追ひ駆けられて、何うか心の裡に遁げ場所を拵えやう、又今日學問の開けた世の中であるから、此學理に對した宗教が、基督教國以外にもあらう。基督教以上の宗教があるであらう。然ういふことから始めたに違ひありません。果して彼等は、然うした動機から、座禪といふものを始めたと言ひました。其處で先づ三つ程の趣意があるのです。一つはピューリチーとでも言ひますか、最う一つはクワイエット、それからシンパシーとでも言ふか、恚う言ふ三つの趣意があります。何んでも我々は、世の中を清らかに送らねばならぬ。我々は騒々しい世の中に立つてゐて、極く靜かなるところの心の状態を維持して過ぎねばならぬ。又我々が萬物の靈とか、長とか、言ふてゐる以上は、慈悲とか、博愛とかいふ心を施さねばならぬ。恚ういふことを彼等は思ひ付いたのださうです。我々にも素より其趣意があります。靜かに清

らかにして、憐れみといふ心を益々助長して往くには、如何なる方法を取つたならば可いかといふことから、段々考へたさうです。我々は子供の時から、教へられてゐるから、何んのこともないやうに思ふてゐるが、誰れにも教へられないで、考へ付いたといふことは、餘程工夫を凝らしたに違ひない。それで何人にも能き易く、又何處でも能きるのは何んであるか。即ち座禪に限るといふことを思ひ付き、心の静かな清らかな状態は、身體と心と相伴ふて始めて其處に妙味が現はれるのであるから、何うしてもクワイエットといふ状態を保たねばならぬと、座禪を思ひ出したのであります。

衆生は悉く我が子

然うしたことは、佛も一番最初に教へられました。佛の教へ方は、唯神や佛を捉へて来て、我れに幸福を與へよ。我れの罪を遁かれしめよと、迫るが如くに祈ることを教へたものではありませぬ。清らかなる心の状態を維持して居れよ。言ひ換へれば、心の統一を保つて居れよといふことであります。釋迦自身が、其手本を示しました。釋迦はア、いふ身分に生れて、そして六年間山の中に入つて修養をしましたけれども、佛や神に向つて、一度でも或る一種の祈禱をしたことのないのは、傳記の中に書いてあります。どんなことが心の清らかなる状態、心の静かなる状態であるか、換言すれば六

年間座禪をしてゐて、そして曉の明星を見て、眞に清らかなる状態である。我が心は恰も明星の如く清らかなる状態である。又心其ものは清淨極まつた状態であるといふことを自覚しました。悟りを開いたといふと、妙に禪宗坊主のやうに聞えるが、悟りを開いたといふことは、大いに自覚をしたといふても可いのだらうと思ひます。恚うした順序で、ラツセルの一行が、日本に來たのでした。横濱に上陸して、ガイドに尋ねた。ところが此ガイドたる人が、嘗て衲の所へ來て、佛法の話を開いたことのある人であつたから、

『實は日本では、然ういふことが、一の宗旨として行はれてゐる。近い鎌倉でも、僧俗共に行つてゐる。』

『では早速連れて行つてくれ。』

といふので、一行はガイドに連れられて、衲の所へ來ました。我が國に來る西洋人は、先づ何を措いても、逸早く日光や箱根を見物するが、彼等一行はそんなことをせず、直ぐ衲の所へ來たのだから、餘程の變りもので、又それだけ熱心でもあつたのであります。それで坊さん達と一緒に、修行をさせてくれといふのです。ところが何分にも言語が違ひ、風俗も違ひ、習慣も違ひ、従つて心の有様、又平素の禮儀から何から違ふのであります。寧ろ形の上からは、極端と極端ほど違つてゐるのであります。それで坊主どもが、芋堀りをしたり、尻をからげて掃除をしたり、薪を割つたり、或る時には肥

桶擔ぎもするが、單にそんなことを見て、賤しいことをして居ると思はれたならば、誤解を來たし、自他に益がないと思ふたから、強いて謝絶をしました。すると謝絶をすればする程、彼等の熱心の度が増して來るので、仕方なしに承諾した。何故ならば、納どもは幼少の時から、言はゞ注入的に教へられて覺えてゐるが、佛の教へに

「三界は我が有なり。其中の衆生は悉く我が子なり。」

といふことがある。三界といふは、此世界であります。此世界は、我が領分である。そして此世界に立ち満ちてゐる人類を始め、其他の動物、植物は言ふ迄もなく、如何なる劣等なる物も如何なる微かなる物も、皆衆生だと佛法ではいふ。其衆生は悉く我が子であると、恚ういふことを常に言ふてゐるのだから、一切衆生は皆救ひ上げるといふことを、口癖のやうに言ふて居りながら、僅かに顔色の違ふた人間が來たとて、それに對し謝絶せねばならぬとは、甚だ恥かしいことだと感じました。彼等が進んで共に行つて見たいと言ふなら、廁の隅まで見せてやらう。其處で果して熱心であるならば、來れ共に行らうといふことで、最初は一週間か、乃至二週間位の積りであつたが、實際行つて見ると本當に其熱心なるには、納は大いに愉快を感じました。納は幼少の時から教へられたと共に、聊か人にも法を施したが、それは日本人同士、進んだところで支那人、朝鮮人位に止まつてゐて、三界は我が有なりどころではありませんでした。米國で七八年も修行してゐたラッセルの連中が、何ういふ工

合に行つてゐたかを研究して見ると、期せずして一致してゐるやうな心の状態が見えます。納どもが教へられた座禪法と、彼等が自分自身に思ひ付いて行つてゐたのと、少くも接近してゐました。本當に同じとは言はれぬにしても、近付いて來てゐるのでした。其處で納は非常に愉快を感じ、これは善い友達が來た。互に切磋琢磨しやうといふ心に爲つて、何もかも開け放した。勿論習慣なり、禮儀なりは、お前さん達は厭やだらうが従はねばならない。端座の時には禮拜せよ。提唱の時には、斯く如くせよ。我々が經文を讀誦すれば、お前さん達も經文を唱へる心持で居れよといふことで、總て此方に同化させやうとしました。彼等は感謝の意を有つて、夫等のことを受けた。で其年の十月から、翌年の四月に至るまで、日々進んで來たのです。恰も世界漫遊の期を、此所に送られて、格別撓む色もなく、屹々として勉めたのであります。其時彼等が言ふには、

「こんな有難いことを、自分等一行のみで味はうのは勿體ないから、他日都合を見て、自分の國に來てくれないか。」

と。其後間もなく日露戦争が始まつて、納は第一師團に隨屬して従軍し、其爲め健康を害したので、養生しなければならぬことに爲り、丁度好機會であると思ふて、翌年管長の職を辭し、身は所謂雲水と爲つて、彼等を米國に訪問したのであります。

日本には立派な教へ

此方が今度は、反對に米國へ往くに就いては、總てラッセルのホームに入り、彼れの指揮を受けることにしました。衲は英語といへば、若い時分慶應義塾で學んだのみので、片言を少しばかり饒舌り、漸く日用を辨ずる位であつたが、其當時彼の地に滞在する日本人々に、種々の世話にも爲り、九ヶ月程ラッセルの家に在つて、座禪をしたり、佛教の講話をしたり、又太平洋沿岸にゐる我が同胞より、來て講話をしてくれぬかと、いふことで、大抵一週に一度位づゝ、其方へ往きました。桑港を始めてとして、サクラメントとか、ローサンゼルスとか、爰に一々列擧するにも及ばぬが、諸所へ往つて講話をしました。幸ひにして日本が戰勝の揚句であつたから、内外人共に、日本へ大なる注意をして居りました。日本が露西亞に勝つたといふ事は、實に世界の人を驚動せしめました。何うしても物質の上や、唯一應の數學ばかりで以て、之れを比較し來つても、連戰連勝といふ結果が、理屈上現はれて來ない。これは維新後三十年や、五十年位ではない、二千年前から、日本固有の武士道、大和魂然ういふものを、傍助長して來たものがある。それを鍛鍊して來たものは、精神上の一つの教へであるに違ひありません。其處で儒教は如何に、神道は如何に、そして佛教は如何にといふことに注目して

來ました。米國では、學者でも、神道を佛教の一つのやうに思ふてゐる人があるが、それは無理ならぬことで、或る時代には、空海の如き大手腕を具へた人が、神教と佛教とを打つて一丸とし、國民の精神を叩いたことがあります。それで或る點を捉へて、神道は、佛教の一派なりと言ふても、大した誤解はないと思ひます。然うした時代であつた爲めに、衲はラッセルのホームだけに居る積りであつたのが、丁度我が同胞も彼の地にゐるので、それに話をしなければならず、又外國人が來て、意見を叩く者もあつたから、これにも答へねばならぬといふ仕儀に爲つて來ました。けれどもカリフォルニア邊りは、學問或は宗教の本場ではありません。又テキサスはカリフォルニアではないけれども、農事とか、商事とかは、大變に進むやうだが、宗旨や學問は、彼處で米國の値打を定めるべきではありませんでした。九ヶ月程経たところで、ラッセル一家が衲に御布施をくれました。衲は本來無一物である。其處へ金を四五千圓貰つたから、これは有難い。此金で少し東の方に往き、それから歐羅巴を廻はつて歸へらうといふ妄想が起つて來ました。それで東の方へ往つて、ヘグラ一翁並にケラス博士あたりと舊交を温め、更に進んで紐育に往つた。其時には内田總領事や、高峰博士など、我が同胞の紐育に居られた諸氏が喜んでくれられました。それからポストンとか、ノキラデルフキヤ邊りに往き、華盛頓に往つたら、代理大使を勤めて居られた人の紹介で、知名の博士とか、或はアラヒースとかいふ人にも逢ひ、又ルースベルトにも面會しました。或は地學協會又華盛頓の大學で講話を

し、それから紐育に戻りました。或る所で佛様の降誕會があつて、其處へも往きました。内田氏の紹介で、ドクトル、アドラーといふ人に逢ひましたが、それに就き、衲が感じたことがあります。其人の話に紐育に倫理協會なるものがあつて、頗る盛んな會で、紐育市は勿論のこと、廣く其市外にまで擴つてゐて、自分（アドラー）が會長に爲つてゐる。此紐育市に凡そ四百萬の人がゐるとして、其半分の人は教會に往かない。何故か寺に往くことを好まないといふ有様である。それは歡ぶべき徴候ではない。社會の上の状態として見ても、又國民として見ても、乃至個人として考へて見ても、歡ぶべき現象ではないから、寺に往かぬところの人を、拾ひ集めて、成るべく惡いことをせぬやう善い事のみをするやうに勸めるといふ主旨で、此倫理協會を設立したのであると、其外種々の知名の人達にも逢ひましたが、何れも其言ふところは異口同音に、日本には洵に精神的立派な善い教があると言ふのでした。恚ういふ人達は、多分日本人は皆研究が積んでゐると思つてゐるらしいのです。恚く他國の人から思はれて、大いに恥ぢるところがありはせぬでせうか、大統領などは四十七士の話をせられました。正義の爲めとか公道の爲めとか、少くとも國家の爲めにする恚ういふ健氣な心を以て、花々しい働きをする、自身を犠牲にするといふ心を有つてゐる。此自身を犠牲にするといふことを、立ち入つて言ふと、佛法の所謂小我、小我を捨て、公なることに従ふといふ考へが集つてゐるのであります。大統領と嘗て面識あるエリオット博士も來て居つて、矢張同じやうなことを言は

95
 れました。此我れを犠牲にするといふ事を佛法的に解剖すると、報恩の心と言はねばなりません。語を換へると、報恩が、今度は慈悲といふものに爲つて了ふ。振り返へつて見れば報恩、向ふから眺めれば、慈悲と爲ります。言葉は變るが、同じことでありませぬ。それと生死の間に立つて、決着といふものを明かにしてゐます。我れを犠牲にするといふ心が、躍然として現はれ出づる。詰る所然う詳しくは言ひませんでした。我れを犠牲にするといふ心は、他の國人にもありませう、けれども日本人の如く、明かに現はれては居りませぬ。日露戦争勝利の原因も其處にあります。他に澤山原因もあらうが、就中無形のもの、原因としては、此心であらうと言はれました。こんな有様で、先づ亞米利加の東の方は、僅か一ヶ月位の間に、彼處此處を往來して居つたが、大分健康を害してゐたので、コロンビア大學の哲學部などから、佛敎の話をしてくれと頼みもあつたが、それに應ずることができませんでした。併し紐育にゐる我が同胞から頼まれて、講話をしましたが、恚ういふ機會に、佛法の話を書く、佛法の言葉で言ふと、一つの因縁だから、之れを聞いて、幸に一言半句でも至當と思つてくれれば衲は有難い。又佛法といふものは、信するに足らぬ、洵に淺薄なものであると反對があれば、これも有難い。此兩方面から有難いとして、六七回重ねて講話をしました。

聖德太子は大ハイカラ

歐羅巴に往つたならば、納は佛教以外別に専門的の學問はないから、小さいな眼で見、そして耳で聞いて往かう。所謂百聞一見に如かずだから、見て来たならば、何分利益に爲るだらうと、あらゆる方面に就いて、研究したかつたが、倫敦に僅か五十日ばかり、其他佛蘭西、獨逸、奧地利、伊太利などは、ほんの通り一遍に往つたに過ぎませんでした。彼れは一年餘米國及び歐羅巴を出行いて来たから大變ハイカラに爲つたらうと思はれさうであります。あちらの善い事を紹介しやうとすれば、何うしても彼國に同情を寄せて話をするから、歐米に心酔したやうに思はれるかも知れぬ。此頃バンカラとか、ハイカラとか言ふ言葉が、流行つてゐるが、若しハイカラといふならば、聖德太子の如き、先づ大ハイカラであつたと思はれます。其他空海上人、傳教大師、榮西禪師又は禪宗歴代の僧侶の如きは、悉くハイカラであります。當時支那の文物が、我國に傳はると同時に、繪畫、彫刻其他茶の木を植えるも、皆僧侶の手を経て来たから、悉く皆今日の所謂ハイカラに屬するものであらうと思つてゐます。納は少しく彼國の善い事を見たいと思つて、感じたところは個人主義、之れに就いて納は深く感じたのであります。何うしても西洋人は、個人から出来てゐます。現在の如く文明の發達を来た

した其一大原因は、何んであるかと言ふと、個人の獨立、個人の自由、然うしたことから来たといふことを感じました。ところが我が東洋、就中日本は何うかと言ふたならば、家族主義から出来上つたものであると思ふてゐます。納は亞米利加人のホームの中に居つて、考へて見るに、誰れが一番可愛いか、それは我が可愛。我れの次ぎには妻、それから子、子の次ぎが親、それから其他に及びます。若し假りに順序を立て、見ると、然ういふ有様が歴々として、何事にも現はれてゐます。爰に至つて西洋の今日の文明は、個人主義から出来上つたと納は思ふ。之れに反して我が國は、我れが一番後で、即ち我れは既に犠牲にしてゐる。第一が親、親の次ぎが子、それから妻兄弟といふやうな順序に往くのでありませうが、一口に言ふて了ふと、日本の親孝行といふことが、西洋人の妻を大切にすることに當ります。西洋人の妻孝行といふこと、日本人の親孝行といふこと、心に於て變りはありません。けれども形からいふと、大變に違ひます。西洋は總てのことが進んでゐるから、それを採るかと言ふならば、納一個人としては、頑として採ることは能きぬと決心して來ました。若し日本の特色たる親孝行を捨て、妻孝行に變へる。又これと同様に、西洋人が妻孝行を變へるに、親孝行を以てしたならば、西洋は西洋の特色を失ひ、日本は日本の活きた精神といふものがなくなつて了ふでありませう。恚ういふことを、納は大變頑固に思ひ詰めて來たのでありませう。だから今日女子教育が盛んに爲ると同時に、種々の問題が、學者や、識者の前に横つてゐるのであります。日本で

は親に孝行をする。君に忠義を竭すといふことは、愈々益々獎勵して往かねばならぬと思ふて居ります。西洋人の妻孝行は、意味のあることで、彼國では妻を粗末にする、若し虐待でもしたならば、日本で親不孝をしたよりも、實に不道徳な人間と認められるのであります。次ぎに久しぶりに、印度に往きまして、以前往つた所に、厄介に爲りましたが、其處の和尚は亡くなつて、三代目位の住職が居りました。淋しい寺に入つて、詩など作つたりしました。其他以前恩に爲つた人に禮を言ひ、更に進んで、佛跡を参拜しましたが、實は以前居つた時に、何うか佛跡を参拜したいと思ひましたが、思ひ通りにならなかつたのです。爾來二十二年間胸にあつたのですが、今度は幸ひにして参拜することができました。これは全くラッセルなどの賜物でありました。古人の傳記を讀んで見ると、玄奘とか、義浄とか、法顯とかいふやうな人達は、一年二年三年と、あらゆる辛苦を甜めて、印度の佛跡を探つたと書いてあります。ところが現今は、便利な世の中であつて、金さえあれば、樂な旅行が能きるから有難くも参拜をして、素志を遂げて來ました。

編者云く、ラッセル夫人は、其後米國で歿したが、遺骨は深き信頼と畏敬する宗演禪師の下に安置してくれとの遺言に依り、禪師の隠棲せし鎌倉松ヶ岡東慶寺内に、石の五重塔を据え、それに今尙安置されてある。縦令外國人であつたとはいへ、恚うして禪師とは、永久に深き因縁が結ばれたのである。

狗子に佛性ありや

眞意は深遠高妙

『子曰く、參乎吾が道は一以て之れを貫けり。曾子曰く唯、子出づ、門人問ふて曰く、何んの謂ぞ。』

曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ矣』

是は論語の里仁篇にあるのです。或る時孔子が參やと呼んだ。いふまでもなく孔子の道統を得た者は、曾參一人であります。其曾參に對し、參よ吾が道は、一以て之れを貫けり。吾が大道は、唯一以て貫いて居る。それに對して曾參は唯と答へました。唯とは「曲禮」に

『父召す時は諾することなし。先生召せば諾することなし。唯して起つ。』

とあつて、諾といふ時は、明かにハイと返辭をするのでありますが、唯といふとハツと最も速かに返辭したことに爲ります。ところが此間の眞意が、外の弟子達には更に解らなかつた。其處で孔子が出た後で、弟子達が曾子に向ひ、

『孔子様の御言葉と、貴方の御答へとは、何ういふ意味でありますか。』
 と問ひました。すると曾子が、『夫子の道は忠恕而已。』と答へました。これは曾子は、一といふことを、忠恕とのみ解釋したやうであるが、此處は所謂人見て法説けの手段でやられた。此問答往來の有様を、禪門公案の中で、類例を擧げて見ると、多少會得が能きませう。或る僧が趙州和尚に、
 『狗子に還つて佛性ありや。又無しや。』
 と尋ねました。之れに對して趙州和尚は

『無』

と答へました。之れは『從容錄』第十八則に出てある禪門で有名な難かしい公案で、此一無字の公案を、古來幾多の人々が、皆血の涙を流して研究し、立派な人に爲つて居ります。此趙州從容禪師は、支那山東省曹州鄆郷の人で、幼少の時、本州屬通院に於て薙髮し、池陽に南泉普願に參じ、師の提撕に依りて契悟し、嵩嶽の瑠璃壇に於て、戒を受けて南泉に歸り、これから黃檗、寶壽、鹽官、夾山、等を歴訪し、衆の請ひに依りて、趙州觀音院に住し、早くも北方に、南頓の玄風を振ふたのは、禪師實に其著しきものであります。それで傳へて趙州の門風といひ、聞くもの悚然として信伏せないものはなかつたといひます。さて問ふた僧は、始めから理窟を有つてゐます。佛は一切衆生悉く佛性ありと言はれたのに、何故狗にだけは、佛性がありませんか、無といふ字を、虚無又は滅無の意味

に誤解したのであります。こんなことでは、到底禪宗の本當の味は解りませぬ。此僧は只當り前の學問的の理窟で解しました。無といふのは、狗子に佛性が無いと受けたのであります。其位の僧であつたから、趙州が再び彼れに、

『業識性あるが爲めなり。』

と答へました。業識とは、平たく言へば、迷ひの心だ、之れを教相的に解釋するならば、餘程の辭を費さねばならぬが、恚ういふことは文字や、言語の表面からは、逆も其眞意は解りませぬ。解らぬが、其問答往來の様子が、能く似てゐます。一以て之れを貫けりを、唯と受けました。それは孔子と曾子との間には通じてゐます。弟子達には薩張解らなかつたのであります。其處で問ふたら、曾子は忠恕のみと答へました。これは曾參の力であります。忠恕といふことも大切ではあるが、一貫といふことに就いては、忠恕と世間で解してゐる位の意味では、未だ盡きませぬ。先づ文意は洵に見易い言葉であるが、さて其孔子の眞意を推測して見ますと、却々深遠高妙であります。

道の解釋

道といふものに就いて、吾々は平素屢々口にしてゐるが、さて如何なるものが道であるかと考へて

見ると、茫たり、漠たり、何を指して道といふか、捉へ悪いのであります。先づ二古人の道に對する言葉を擧げると、老子の語に、

『物あり混成す。天地に先つて生る、寂たり、寥たり、獨立して改めず、周行して殆からず、以て天下の母たるべし。吾れ其名を知らず。之れを字して道といふ。強いて之れが名を爲して大と云ふ。』と。却々面白いのです。未だ名がないから物と云ふ。物と言ふても、或る一つを物といひ、一つを心と言ふやうな、然ういふ相對的の物ではありませぬ。今爰でいふ物とは、或る物と言ふより仕方がありませぬ。未だ神とも、佛とも、道とも、本當の名が付いて居らぬ。恚う言ふ言葉の意味は、修養のある人には、自分の頭に、自ら概念が現はれて來るでありませう。物あり混成す、一切の物が混成してゐる。天地に先つて生る。大抵吾々が見聞覺知してゐる所の物は、天地始まつて以來の現象で、此現象は即ち天地分れて後の現象であるが、此處に所謂物といふは然らず。天地に先つて生ずるとして見ると、何ういふものでありませうか。人が眼を欸て、見やうと思つても、一向音も沙汰もないから、寂たり、寥たり、極くヒソソリとしてゐます。孔子も或る場合に、上天の事は、聲もなく、臭ひもなしと言はれたやうな意味で、獨立して改めず、其物は對待的のものではない。嶄然として獨立してゐます。

凡そ世の中の物は、皆對待的のもので、天あれば地あり、陰あれば陽あり、山あれば川あり、男あれば女あり、皆相對して、相手方があります。今物ありと指したのは、獨立的で改まらぬ。昔にあつても、今にあつても變らず、此處に在つても、彼處に在りても同じことであり、周行して殆からず、周行は普ねく行はると讀んで宜しい。そんな獨立の物であるが、其獨立の物に離れて、何か別に一つあるかといふに、然うでもない。獨立といふことを、佛敎の語で言ひ換へると、平等のものであります。平等ではあるが、直ちに差別の上に行はれる相對的のものかと言へば、然うでない。獨立して改めず、それでは一切の現象から離れて、獨立のものかと言へば、然うでもない。何事も行き渡つてゐる。地を這つてゐる蟻の鬚のやうな小さいなものにも、野原に咲いてゐる名もない小さいな花にも、行き渡つてゐる。そして小さい花は、小さいな一つの天地を造つてゐます。小さいな蟻は、小さいな宇宙を含んでゐます。テニソンは

『一輪の花を知れば、天地及び一切萬物を知る』

と言ふてゐます。矢張り普ねく行はれて、殆からずの義であらうと思ひます。其物に何ういふ名前があるかと言ふに、名はありませぬ。名がなければ、人に示すことができないから、已むを得ず字して道といふのであります。

生活の眞意義

曩きの圓覺寺管長洪川老漢は、衲の師匠であります。此洪川老漢が、

『一とは數の義にあらず、凡そ道の禮たるや、甚だ言ひ難し、其用たるや、亦測られず』
と言ふて居りまするが、一と此處にあるのは、數字上の意義ではない。暫く道といふことを體と用との二つに分ける。體用といふものは、必ず何事にもあります。今道體といふものから言ふと、孟子は『曰く言ひ難し。』

と言ふてゐますが、言ひ難しどころではない。實に言語、文字、想像、分別といふやうなことは、すつかり立ち超えてゐるから、如何なる人と雖も、此處に一言も、扱むことは能きませぬ。此儘大道は顯はれてゐるといふより外はないのです。『これはく〜とばかり花の吉野山』、『松島やあゝ松島や松島や』、それでも道體に遠ざかつてゐるが、恚ういふより仕方はないのであります。然るに其大道の作用といふものに至つては、實に千變萬化、變現極りない所のものであるから、却々目の子算用で、推し測ることが能きませぬ。現今科學とか何んとか言ふてゐるのは、其部分々々に就いて、只或る程度までの道理を明めて行くだけで、其用といふものは、實に限りない所のものであります。恚ういふ

工合に、之れを考へて來るといふと、我々は矢張其中に宿されてあると言つて可い。又主觀的に考ふれば、其物と共に起き、其物と共に寝ね、其物と共に常住活動してゐると言つても可い。老子はそんな鹽梅に言はれてゐます。又バイブルの中にも

『大初に道あり。道は神と共にあり。神は道なり。道は神なり。』

ともあつたやうに覺えてゐます。それが佛敎とか、禪とかいふものに入つて見ると、佛の一代の説敎も又祖師の千七百の公案も、畢竟道といふものゝ甚深微妙なることを示されたに外ならぬ。三祖僧璨大師は、性山水を好み、舒州皖公山に隱棲されたが、後周の武帝佛法を破滅するを以て、司空山等に往來して住所を定めず、二祖慧可の法を繼ぎ、隋開皇十三年、道信を得て衣法を傳へ、羅浮山に遊び又舊地に歸り、四衆の爲めに心を説いた人でありましたが、此僧璨大師の言葉に依ると、

『至道は無難なり。唯揀擇を嫌ふ。但だ憎愛なければ、洞然として明白なり。毫釐も差あれば天地懸隔す。』

とあります。去れば此道を得た人が、釋迦なり、孔子なり、基督なり、マホメツトなりで、其得た所に、多少の深淺優劣の別はあるかも知れぬが、大體に於て其道を得て、初めて釋迦たり、初めて孔子たり得るのであります。此道は釋迦獨り專にして居るのでもなく、孔子獨り之を恣にして居る譯のものでもない。畢竟此道あるが爲めに、天地は爰に成り立つた。此道あるが爲めに、吾々は生活の眞

意義といふものを、此處に現はして居るのであります。

八つになりし年、父に問ふていはく、佛はいかなるものにか候ふらんといふ。父がいはく、佛には人のなりたるなりと。又問ふ。人はなにとして、佛にはなり候ふやらん。父又、佛の教へによりてなるなりと答ふ。又問ふ。教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひけると。又答ふ、それも先きの佛の教へによりてなり給ふなりと。又問ふ、其教へはじめ候ひける第一の佛は、如何なる佛にか候ひけるといふ時、父、空よりやふりけん、土よりやわきけんといひて笑ふ。問ひ詰められて、えこたへずなり侍りつと、諸人に語りて興じき。(兼好)

儒教と禪宗

明德を明かにす

座禪といふことは、敢て禪宗ばかりではありませぬ。如何なる宗旨でも、如何なる學問でも、皆此意味が籠つて居ります。英語の書には、之れをクワイエツトとか、或はメヂテーションとかいふやうな字が書いてある。然ういふ意味は是非ともなからねばならぬ。大學の言葉を藉り來ても、確然とそれが具へてあります。

『大學の道は、明德を明かにするに在り、民を親にするに在り、止善に止まるに在り、止まることを知つて而じて後に定まる事有り、定まつて而じて後に能く靜なり。靜にして而じて后能く安し。安んじて而じて後に能く慮る。慮つて而じて後に能く得。』
恚ういふことがあります。これは言ふた人が違ひ、そして行はれた國が違ふから、座禪とは品物が異なるやうに鳥渡見えるのであるが、靜かに考へて見ると、殆んど此大學の一章といふものは、座禪法を

勧めたと言ふても可い位の言葉であります。凡そ紳士とか、大臣とかいふ、それだけの資格を備へるには、何うしてもこれだけの考へがなければ不可ぬ。明德を明かにするといふ、恰も恚ういふことを佛教の方へ當て簞めると、言ひ方は違つてゐるけれども、眞如と言ふても、佛性と云ふても、菩提と言ふても、涅槃と言ふても、それは百も千もあるのですが、畢竟吾々も同じものに使つてゐるのです。外部の誘惑と言ふか、外界から出て来る刺戟といふか、然ういふものゝ爲め、殆んど明德を味ましてゐるから、第一明德を明かにすると言ふことが目的であります。既に己れ明德を明かにしたならば、推し及ぼして民を新にするといふにありと、若し初めの明德を明かにするといふことを、自利といふやうな方へくツつけるならば、民を新にする方は利他や、自利と言ふても、利他と言ふても、矢張り一つの吾々が、勇猛精進に進んで行く。今の言葉で言へば、向上心、努力心一つのエネルギーなるもの、ドシ／＼進歩向上して行く、其上に両方面から名を興へたといふても可い。自利が先き、他利が先き、何れが先き、何れが後といふことは、一の銘々勝手の議論に過ぎぬ。何うしても是れは相兼ねてゐるし、並び行はれて往かなければならぬ。第一先づ明德を明かにして、そして民を新にする、己れ先づ之れを信じて、然うして人をして信ぜしむる。己れが明德を明かにし、民の徳を新にするのです。換言すれば、人の明德を明かならしむると言ふて置いても可い。自利と他利と相俟つて、至善といふことに至るのだらうと思ふ。至善に止まるのである。總て目的を達せんとするには、一つの實行方法

がなくては不可ませぬ。恚う言ふ明德、新民、至善といふ一つの者、又言ひ換へるならば、恚ういふ的を掛けた以上には、之れを一つ認める所の實行法がなければ不可ぬから、後の五ヶ條が出て来た。止まることを知つて而して定まり、定まつて後に靜なり、即ち止まる、定まる、靜に、安し、慮るといふ五つであります。これが實行法若し此五文字が未だ多過ぎると言ふならば、靜慮といふ字にしても可い。恚ういふことを當て簞めて見ると、最う禪宗だとか、佛法とか言はないでも、既に支那では、孔子が先づ明かに、恚ういふ禪定法を一つ貽して居つたと言ふても宜しい。憶ふに孔子などの學問といふものは、學藝に重きを措かずして、實行法に重きを措いてあります。又三千年の今日に至るまで、孔子生前の感化を貽してゐるのは、全く實行法にあるだらう。其學藝に至つては、今日からいへば、實に幼稚なものといふても可い位なるに拘はらず、千歳どころではない、二三千年の今日に至つて、歴史が古くなればなる程、此一つの精神上の、インプレスといふものが、益々新になるといふは何處にあるかといふと、これは實行法にあるといふて可い。支那でも既に孔子が、恚ういふ手本を出したのであるから、段々後に爲つて、唐宋といふ時代に爲つて來ると、丁度内にあつた寶物を、他山の石を持つて來て、磨くやうな恚ういふ機運に際會して、達磨宗即ち禪宗を専門にするといふやうなものが出て來て、それが丁度儒教と禪宗とが殆んど賓主地位を分つことが能きぬ位密接に、互に相助け相俟つて、一つの妙な新機軸を出し、新學説を唱へ出した。彼の大極無極といふ説も其一です。

何處から出來たといふと、皆禪宗通は、彼の儒教の道具を、餘程能く用ゐて居る。又彼等儒者なる者は、此禪宗の宗意を、儒教の方へ持ち込んで、大變融通されてゐるといふことは、其時代の歴史に眼を注いだ以上、歴々として何れの書物にも、此意味が現はれてゐます。殊に王陽明の一派は、殆んど變形的の禪宗の如く思はれる。或る僧に就いて、入室した譯ではないけれども、其爲すところは暗合してゐます。王陽明ばかりではない、蘇東坡でも其他アの時代の先生達は、此一つの精神修養法といふか、平たく言へば、工夫鍛錬法といふか、恚ういふことで以て、大變な一つの感化を貽して居ります。これは支那に於けるところの、禪宗の種々の方面で働いた一部分のことを、思ふに任せて言ふたのであります。例へば今行はれてゐる大きな宗旨、即ち印度のバラモン教であるとか、或は最う少し西の方へ往つて、彼のマホメット教であるとか、或は基督教であるとか、種々の宗派は、必ず一つの禪定法がある。靜かに吾が身心の状態を見て、靜かなる境涯とする、恚ういふ意味の禪があります。これは又必要であります。

活動力は休息から

専門的の禪でなくとも、二分間でも、三分間でも、身體をして不動の地位に立たしめ、心をして寂

定の境涯に置かむるといふことは、頗る良いと思ふ。衲が言ふまでもありません、素人でも種々の効果がある。其種々の効果のある方を後にして置いて、極く消極的の効能をいふても、人間には休息といふことが、頗る必要であらうと思ふ。衲はこれだけの時間を、無駄に休む怠けたといふならば、これ位惜しむべきものはないのだが、怠けるといふ形と、休息といふ形が、殆んど影に於て相似たるもの、ところが其精神の状態に於ては殆んど氷炭相容れぬ別なところの有様、其休息といふことは、植物界、動物界あらゆる生物界に於てなければならぬ筈のものであるが、殊に人類に至りては、休息といふことの効能が、益々現はれ來つてゐる。又野蠻時代に於ては、此休息といふことは、左程必要ではなかつた。ところが野蠻から未開といふか、半開といふか、段々文明に進めば、進む程人間が複雑な仕事をしなければならぬ。従つて忙しく爲つて來る。忙しく爲れば爲る程、人間には休息といふことが、愈々必要に爲つて來るのであります。生理學上の作用に於ても然うだ。吾々の活動力は何處から來るかといふと、前夜能く休息した。それが現はれて來る。恚ういふ意味に於て、大なる仕事をしやうとするならば、大いに休息しなければならぬ。活潑な仕事をしやうとするならば、寂靜極まるところの休息をしなければなりません。伸びんと欲するものは、必ず屈せねばなりません。放たんとするものは、必ず控へねばなりません。恚ういふことは見易い道理であるが、人間は割合に、見易い道理に氣が付いて居らぬ。だから瀧壺に飛び込む者もあれば、噴火山の中へ飛び込む者もあり、

鐵道往生をする者もあるが、人間が大いに働かんとするには、大いに休息しなければならぬ。これだけのことに気が付いた。餘り気が付き過ぎて気が付いて居らぬ。此處へ少し気が付いてゐるならば、如何なる繁雜極まつた中に於ても、何ういふ複雑な事務の中に立つても、昔から能く言ふ通り、八島檀の浦の、斬つたり、はつたりの中でも、大寂定といふ豪い禪宗式の必要がある。是れは大言壯語のやうだが、決して然うではない。當然のことを言ひ現はしてゐるのであります。又心理學上で言ふならば、妬ましいとか、怖しいとか、其他種々の根性を、悉く撲滅する効能を有つてゐる。兎に角禪宗を、引ッ込み思案の方に、消極的だけに言ひ現はした時は、休息と思つてゐれば宜しいのであります。

卯月八日死んで生るゝ子は佛 燕村
 死花をはつと咲かせる佛かな 一茶
 佛には佛がなつて涅槃かな 完來

無我即ち大我

世界は戦争の生活

世の中は、總て生存競争でありまして、活けるは如何なる小さいものでも、悉く戦争的の生活をして居ります。それは單に動物ばかりではありませぬ。植物でも又然うであります。艶麗なるところの花を咲かす植物があれば、これを妨害する雜草が生じて來ます。尙ほ害虫が、其美しい花や、葉を喰ふのでありますから、相當の保護をして遣らねばなりません。又動物の方は何うかといふに、至極微弱なものでも、皆それ／＼に戦争をしてゐます。蛇の蛙に於ける、蛙の小虫に於ける、何れも然らざるはなしであります。去れば蟻や蚊の如きまでも、それ相當に外敵を防禦する武器が、天然自然に備はり、以て剛きは弱きを制してゐます。一羽の鳩が、何か餌を啄んでゐると、其後ろの松の樹に、猛撃なるところの鷲がとまつて、鳩を狙つてゐると、何んぞ知らん、鷲の後方から、一人の獵師が、銃を擬して、鷲を目蒐けつゝ、今にも火蓋を切らんとしてゐます。鳥獸、昆虫、植物でも斯る状態を

あります。して見れば、今日の世界は、宛るで戦争の生活であります。東洋哲學者の開祖ともいふべき莊漆園が、或る時一羽の鷺が、渚にイんでゐるのを捕へんとしたところが、其鷺は知らぬ顔をして、少しも驚きませぬ。莊子は歩一步進んで見ると、其鷺は、一疋の蛙を睨んでゐました。ところが其蛙は、又前なる小さい虫を睨んでゐたといふことで、莊子は大いに感じたのでした。鷺を捕へんとする自分の背後には鐵棒でも振り揚げて、自分を打ち殺さうと窺つてゐるものがあらうと恐怖し、直ちに遁げ歸へつたといふことであります。總じて老莊の悟りは、こんなものであります。往古は人間も動物と闘ひ、毒蛇猛獸から制せられつゝあつたが、人間には天賦の才能があつて、種々の武器を製作し、又は團體を作つて協力し、毒蛇猛獸を驅除すると、其果は、今度は人間同士の競争が起り、畢竟強者が弱者を制伏して、二十世紀の現今の如く進歩して來たのであります。戦場の屍山血河苦楚慘憺たる状態を見ては、實に悲しむべきであります。一方には大いに喜ぶべきことがある。伏屍累々、負傷呻吟、阿鼻叫喚の間に於て、赤十字社などの救護班があつて、慈悲博愛の旗章を翻しつゝ、其間を驅馳し、負傷者は敵味方の差別なく、之れを救護し、療養し、恰も地獄と、極樂とを一緒に混じた如きは、人智の發達した文明社會の有様であります。人間には憐み悲しむ同情といふ一種特別の感情があるからして、之れを救護し、愛憐しなくてはならぬのが、社會の状態であります。それは何處から來たかといふに、吾々の理想から來たのでありまして、即ち吾々は道徳の作用、宗教上より漸養

所謂常樂我淨

せられて、茲に及んだものであります。吾々は此社會に棲息して、朝から晩まで、戦争しつゝあつたが、心の中に正氣を現はしたる人を佛ともいひ、聖人とも、完全の人ともいふ。畢竟吾々は恁く戦争状態の中にあるが、其目途とするところは、自己即ち吾が心を取りて、眞正なる命令に服従せしめんと欲するに外ならぬのであります。其韜略は如何なるものであるか、それは無我即ち大我でなくては叶はぬのであります。

總じて社會は、動機論と、結果論とが、互に競争しつゝあるので、彼の島田一郎の大久保利通に於ける、西野文太郎の森有禮に於ける、伊庭想太郎の星亨に於ける、何うでありましたか、其所爲たる人を殺して憚らず、暴戾惡逆に違ひないが、彼等も又一つの理想がありました。社會の爲めに一身を犠牲にして、天に代つて誅したと言つてゐるが、即ち結果論に掣肘せられ、其誤解上から事爰に及んだのは、憫れむべきの情實があるのであります。人間の道徳心即ち佛の教は、無我であります。無我といへば、寂然として活氣のないやうで、其爲め印度は亡滅したと、誹議する論者もないではないが、それ等は誤解の甚しきもので、吾々が所謂無我とは、そんなものでなく、大なる活潑潑地のものであ

ります。佛の教は、實相の我を取りて、假相の我を忘れしむるにあるのであります。吾々人間は、手足身體を取り放した時に、我れと名づけ得る者は、一つも見當らぬではないか。全く此五尺の體は、地水風火の四大元素の假和合物であつて、實は一つの影だもなくして、喜、怒、哀、樂、愛、苦、欲、の七情は、其假相の感情に過ぎない。それが朝から晩まで付き纏ひ、千變萬化して、種々なる幻想を現じ來るに過ぎない。斯る小さき我、即ち利己心といふものがあつては、畢竟萬物の靈長たる公明心を發揮することはできません。衲が軍人社會に於ける議論を聞きまするに、戦争は一方では名譽といひ、一方では義務と言つてゐるも、是等は即ち假相である。そが假りの心を打ち破りて、自我實現、無我即ち大我であるのであります。飽くまでも假相を打ち毀さなくては、眞相の我體を見出すことはできぬのであります。これを一家の涅槃那、所謂常樂我淨と言ふので、恚、死生の界を飛び越えて、眞の大我の境界に出づることを得たならば、戦争するにも、名譽の爲めでもなければ、義務の爲めでもなく、何にかなしに國家を存置する爲めには、彈丸雨注の間も何にかあるべき、肌を劈き、眉を凍らす嚴寒も何にかあるべき、火に入りても焼く能はず、水に陥りても溺るゝ能はず、縱令身體が碎けても何にかあるべき、凜乎たる一片の理想は、天地に充滿し、千古に涉りても、消滅するものでないといふことを悟るのが、即ち大我であります。乃木大將は、此血誠を以て、軍神と仰稱せられたではありませんか。是等は以心傳心、自己の心念を究め、假相の疑いと、畏怖心とを脱却し、自己の一心

明かに截斷せんか、

「兩頭俱截斷、一劍倚天寒」

であります。北條時宗も、楠正成も、此一心を以て、一代の事業を成就したのであります。恚うした心を以て戰はんには、死して憾みなきのみか、却つて大なる喜びがあるのであります。

宗 演

謁三曲阜孔子廟

不レ孤之徳及ニ吾儂、 萬里遙來仰ニ聖容

崇殿傑宮何足レ説、 千秋景望素王宗

意味ある生活

ハイネの疑問の詩

吾々が此の世の中に生れ出まして生存するのは、僅か三十年か、五十年、乃至七十年、七十は古來稀なりと言つてあります。今日百歳、百二十五歳まで活けると言つて居る人もあるけれども、吾々は機械の如く物質的作用に使ひ廻され、唯齷齪として此生を了つて、そして夢の如くに死んで仕舞ふと言ふことであるならば、洵に人生と言ふものは意味の無い詰らないものであると思ひます。夫れで吾は此物質的生活以上、即ち現實より立ち超えたる上に於て、何物か無限絶大なる勢力があつて、さうして天地萬物一切の秩序がこれに由りて動き、一絲紊れざる有様に於てあらねばならぬと、斯う思ふのであります。只暗の中で物質と物質とが暗闘して、そして其中で動き廻はつてをる如き無意味なるものではなくして、吾々の一舉手、一投足、皆悉く何等かの意味を持つて居るといふことが、時あつて想起されやうと思ふのであります。

衲が聞いて居る所に依ると、彼の有名な詩人ハイネが疑問——一つの疑ひと言ふことに就いて、詩を作つて居りますが、夫れが頗る有名なものである。其詩の意味を掻い摘んで申して見ると、假りに吾々が大海原のほとりに立つたとして、さうして仰いで彼の蒼々たる天を視、俯して彼の茫々たる地を眺め、其周圍を眺めて見るといふと、脚下は蒼々渺々たる水、寄せては返し、返しては寄せる大浪小波が、朝から晩まで打逆し打返して居る。之は何の作用であらうか、又雲の飄々として棚引ける、松風の颯々として吹き過ぐる、皆其處に何等かの意味がなくてはならぬ。唯吾々は機械的に動いて、醉生夢死に了つてしまへば、人生洵に無意味である。天の天外、地の地外、其處には此の大なる宇宙を貫いて居るところの何等かの或物が潜んで居るであらうと思ひます。

斯う言ふと、何だか不思議な一物が、遠い暗い處に在るやうに思はれますが、決してさうではない。吾々日常の行動の上にも、眼を具して之を見れば、明に之を見得るのであります。或者は悲觀をする。或者は譯もなく樂觀をする。人生を果敢なしと見、人生を幸福と見て居る。さう見せしむる其根本を分割つて見ると、人生は實は苦でもなく、樂でもなく、無限の空間に涉り、無限の時間に涉るところの何物かが常に動き、何物かが常に働き、何物かが常に命令して吾等を働かして居るやうであります。之に名を與へて神と言ふも、佛と言ふも、夫は皆悉く符牒である。他に何等か活きたるところの大なる力と言ふものがなければならぬ。夫を解決すること能はずして、醉生夢死して了ふと

か、或は人生は幸福を得、快樂を得たならば、吾事了れりと言ふに至つては、動物に對して吾は萬物の靈長なりと言ふところの資格は毫もない。禽獸と何んぞ撰ばんやと言ふことになります。斯うした意味から言ふと、大抵の人は、必らず何等か心中に於て、常に憧憬してゐるものがあらうと思ふのであります。

信は眞なり

今納が言はんと欲するところのことは、歴史的の或物ではない。言ひ換へれば、他から注入したるものでなくして、自分自身の精神の内容に立入つて考へて見れば、丁度彼の鐘を叩けば音がする如く、吾々の此心の内容に向つて工夫し來ると、其中から、何等か應と答へて現はれて來るものがあらうと思ふのであります。納の常に言ふ所の宗教の動機、若しくは宗教心と言ふものは、さうした意味のものを指して居るのであります。人或は我は宗教に據らずとか、或は吾は無宗教であるとか言ふのは、夫は宗教の末端——末端と言ふのも可笑しいが、末を捉へた者で、必ず實體を無視して言ふて居る人のことであらうと思ふのであります。今言ふが如き意味に於ては、惟ふに何れの人でも大抵は何等か信念と言ふものを有つてゐる事と思ふ。此點に於ては、公衆の面前には吾は無宗教であると言ふやう

なことを言ひ出す程の大膽な者は無いであらう。若しさう言ふものがあらば、其大膽は無謀なるものと信はなければならぬ。それであるから、此の點に於ては納と讀者諸君と、既に或る一致せる物があらうと思ふのであります。それで是から納が説くところのことは決して佛教から來たことでもなければ、又他の宗教から來たものでもない。納の此の短い舌で言ふことは、即ち貴公方の精神内に在るところの或物を喚起すに過ぎない、と言ふ觀念を以てお読み下さるならば、不束な御話ではありますが、極めて親しく相通する點を見出し得らるゝことと思ひます。

或人が彼の有名なゲーテに向つて「貴君は何の宗教を信ぜらるゝや」と尋ねたら、答へて「君が指すところの宗教、其宗教に就いては何にも吾は信するところはない」と答へた。即ち佛教とか基督教とかに就いては吾は更に信するところがないと言つたら、其人がそれならば「無宗教か」と言ふと、「いや決して無宗教ではない」そんなら「何であるか」と言ふと「吾は我が宗教の爲めの故に」といつたといふことであります。眞に格言と思ふのであります。吾は我が宗教の爲めである、之れには種種の意味があつて解釋は出來ないが、此點は人々深く味ふべきことと思ふ。併しながら此様な工合に申せば茫漠として話が纏まりませんが、更に歩を進めて言へば、信すると言ふことと、行すると云ふことになるのであります。これは言ふ迄もなく佛教から申すので、今納が信する、行すると云ふことを説くに就いても、屢次佛教の術語を用ゆるのであります。決して佛教に限られた事を説くのでな

く、各宗教、少くとも合理的宗教に共通して居る點に就いて、衲が信する所を説くのであります。全體此信すると言ふことを講釋するのは間違つた話で、信は眞なりで、信すると言ふことは眞實なりと註釋を下しても可いのであるから、これは以心傳心的に味ふべきものであつて、信すると言ふことを講釋的に、即ち神學的方式に従つて、之を説明することは少し間違つて居ると斷言して可い位である。併し乍ら唯さう言つて了へば、萬事休するのでありまして、夫れでは詮がないから、講釋す可らざることを出來得る點まで説かなければならぬ。

解 信 と 仰 信

此信すると言ふことを二つに分けますと、まあ斯言ふものであらうと思ふ。解信と仰信の此二つである。眞實に活きた信仰と言ふことになれば、其様な迂遠なことを言ふに及びませぬが、先づ假りに解信と仰信とに分つて置く。此處で鳥渡附け加へて置きますが、同じ宗教といつても、佛教の如きに至つては、一面は智的要求、一面は情的要求に應ずることになつて居る。佛教は學問上より見れば一つの心理學の様にも見え、或は哲學の様にも見える。又一面からいへば、純粹の宗教的に出來て居る。意志の鍛錬等に於ては道徳的訓練を教ふるものゝ如くにも見える。夫れで佛教は一種の學問臭

いやうにも見え、而して又道徳的にも見えるが、夫れは一佛教の一部分である。總ての佛教全體を通じての場合ではないのであります。其ことを此處に一言附け加へて置きます。

それで今の解信の如きは、稍哲學的の方面に心を費さなければならぬと思ふ。之れが人を見て法を説くと言ふ手段の必要なる所以であります。今智慧の満足を得んとする人と、情の満足を得んとする人との爲めに説かれた所の法を、佛法の方で言へば、一を淨土門、一を聖道門と言ふのであります。智的要求に應ずるには、聖道門、情的要求に應ずるには淨土門であつて、解信は乃ち聖道門に屬し、仰信は乃ち淨土門に屬するものであります。そこで解信に於ては何うしても多少理屈の説明をしなければならぬが、仰信となると讀んで字の如く、仰いで信するのであつて、初めから神ありと信じ、佛ありと信するのである。そして其神、其佛は智徳圓滿の者である。全智全能の者である。此の神佛の教は吾々の如き小き頭腦を以て臆測するものでなく、あたまから仰いで信するのである。仰せ御尤と言つても、御無理御尤と言ふのではありませぬ。神の愛、佛の慈悲、其の物の中に飛込んで往くのであります。斯う言ふことに於て安心が出來得る人は、一の幸福であると思つて宜しい。色々理屈を言つて見ても、詰りは其點に歸着すると思ひます。動もすると感情一方に走つて、唯有難いとなつて、迷信が生ずることがないとも言へませぬが、併し眞の信仰の中にはさう云ふことはない。諸君の中に自身に學問ありと雖も、智識ありと雖も、初めから神佛の教を信すると言ふ所に立つてゐる人が必

らずあらうと思ひます。それで其信仰によつて、一生涯の活動力を、其處から喚起して來るとなれば、それは大なる幸福であると申してよいのであります。然るに今の學校教育を見ますと、動もすれば只人の智慧をのみ誘き出さうとして居るやうであるが、若し斯う言ふ行方方に依ると學問の力を高めて行くことは能きるが、併し神は有難いから信ぜよといつても、神とは何の様なものであらう。佛は有難いから信ぜよといつても、佛は何の様なものであらう。それを信じて果して何の效があるかと言ふ、總べて今の學問の教へ方はさうであります。智識を進めると言ふことが、學問の上からは、勿論正しき事でありませう、併しさう言ふ様に教へられた人間には、昔の人の如く、始めから神佛を有難いものとして信仰する様な事は出來ない。洵にそれが當然であるから、こゝに至つて初めて解信と言ふ側に眼を轉じて見ねば分らぬ。それで如何に解して信ずるかと言ふことに就いて、少しく言葉を費さねばなりません。併し乍らこれは到底一場の話で以て、其微細の意義を盡すことは出來ないのであります。

佛法の言葉では平等

吾等の知る所に依れば、如何にして此宇宙を解するかと言ふと、之を三つに分けることが出来るの

であります。其の一を實在と言ふ。斯う言ふことが今は通じ易い。佛敎の言葉で言へば平等である。其次は現象、即ち差別である。今一つは何かと言へば、現象と實在とを結びつけたるもの、即ち現象即實在之れを佛敎語にすれば、平等即差別である、此實在、現象、現象即實在、實在即現象の三を以て宇宙を大觀することが能きやうと思ふのである。今平等と言ふ所に立つて之れを觀れば、何程の無限の時間に涉つても、色香を變へて居らない。昔も今も將た未來も、通じて一以て之を貫いて居る。又これを無窮の空間に就いて考へても然うであります。東西南北遠い近いの隔りは毫もない。所謂萬里一條の鐵であります。故に平等界に於ては、實に絶對であつて、遠近とか、長短とかさういふ物と物と相對する形は、此處に無いのであります。實に此境界は空蕩々として物の拘はるなしと言ふ有様であります。吾々は平生智慧とか、學問とか、理屈とか、議論とかを頼みにして居るが、其吾々が頼みにして居る所は、僅に此感覺世界に止まつて居るもので、若し假りに此五感を取り除いた時に當つては如何であるか。吾々の智識學問、この耳、この口、この眼、この鼻、この舌、——果して能く如何なる作用をなし得べきものでありませうか。茲に至つては其作用も其力も到底及び難いことになります。それであるから、吾々の此相對的感覺、物質的智識は、頓と力にならぬことになります。茲に於てか、何等か此物質世界を動かすところの原動力となるべき物がなくてはならぬことになるのであります。併し乍ら此感覺なり、智識なりの外に、其處に障壁を築いて居る或物が別に存在して居る

譯ではなく、此智識、感覺の現象、差別界の一面が直ちに絶対平等の實在界であります。恰かも一枚の白紙の如きものでありまして、一面は表、一面は裏となつて居りますが、其裏と表とを別々に引離すことはならぬ。表裏相合して一枚の紙となる如きものであります。此點は常に吾々が根本問題として研究を要する所でありまして、此佛敎にせよ、又彼の基督教にせよ、一度此根本問題に觸れなければ、つまり作り附けたる宗教といつて可いと思ふ。それで今言ふた如く、時間空間の無限大に行き渡つて隙間も無い所を、カントは無上大法と名づけて居ります。フイヒテは大我と言ひ、ヘーゲルは理想と言ひ、グリーンは實我と謂つて居ります。今一々哲學者の言を取次するにも及びますまい。其名は何と言つてもよい。

實我の働き

兎に角、吾々人生僅かに五十年か、長くて百年の此の短い間を、只利益幸福のみを捜し廻つて、齷齪として世を終つて了ふと言ふのは、洵に情ない有様であると思ひます。抑も吾々が斯く朝から晩まで働くのは、何者の業であるかと言へば、言ふまでもなく、只この意識の働きのみではない。此宇宙に満てる實我の働きでなくてはならぬ。人間としての價値は之を自得する所にあるのであります。吾

が大乗佛敎に於ては、明に其意味が説いてありますが、彼の華嚴經に「奇なる哉、奇なる哉、一切衆生悉く佛の智慧徳相を具有す、只妄想執着を以ての故に、之れを證得せず。」と、之れは釋尊が宇宙の眞理を悟られた時に、叫び出された言葉であります。今迄は思ひも掛けぬ事であつたが、此一切衆生即ち總ての動植物は勿論、其他の萬物、有機體も無機體も、皆悉く佛の智慧、徳相、換言すれば此不變の一大眞理——宇宙に充ち満てる實我を具有せざるものはない。而かも妄想執着の爲めに支へられて證得すること能はずといつてあります。太陽は間斷なく光りを放つて居る。晝夜の差別なく光輝赫々として光りを放つて居るが、時あつて雲霧の爲に鎖されると、人が其光りを認めることができないと同様であります。

それで序に此佛と言ふことに就いて説いて置きたいのであります。此佛といふ意義を、一般に誤解して居るやうであります。僧侶も亦多くの中には誤解して居るかも知れませぬ。誤解も其甚だしきに至ると、少し足らぬ人間、少しぼんやりした人間の事を佛と言つて居る。又活きて居る時は人間で、死んだ時には佛と言ふて居りますが、かう言ふことは實に馬鹿げた間違ひであります。全體何時の世、如何なる時に間違つたものか分りませんが、元來佛とは自覺、覺他、覺行圓滿と言ふのが、普通の定義であります。一切衆生皆佛の智慧徳相を具有して居るので、吾々今更新に佛になるのではない、元來佛であるのであります。元來佛ではあるが、妄想とか、執著とか言ふ雲霧の爲めに妨げられて、之

を明かに悟ることが出来ぬと言ふのであります。

兎に角眞理は、一面は現象差別であり、又他の一面は實在平等であります。平等と言ふても、決して何時もかも空々蕩々たるものではなく、實在の中に現象あり、平等の中に差別が現はれて居るのであります。今仰いで天體を眺めて見れば、日月星辰、光りを放つて少しも其實體をくらまして居りませぬ。俯して地上を眺めて見れば、山は峩々として聳へ、鳶飛んで天に至り、魚淵に躍つて居る様に、皆意味ある働きをして居る。古人の語に「無一物の中、無盡藏、花有り、月有り、樓臺あり」とある乃ち無一物の中に、萬物が整然として、備つて居らねばならぬのであります。故に若し現象と平等と根底が二つあると思ふと大變違ふ。體と心とは引き分けらるゝ物と思ふと違ふ。身體を透して精神が働く、精神が働いて身體が動く。其の間寸毫の隔りもありません。現象即ち實在、實在即ち現象であります。之れを學問の原理から照らして見ても明かであります。假令ば一方に、一致と言ふ原理があれば、他の一方には獨立と言ふのがある。けれども此一致なり、獨立なりが、箇々別々のものではない、其の二つのものゝ調和したる所があるのであります。斯様なことは、我々の日用行事の上に現はれて居ります。譬へば平等の水を離れて、差別の波は無く、現象の波の外に、別に實在の水はないのであります。これは極めて平凡なる道理であります。眞理は何處まで行つても變りませぬ。昔から今日まで、この道理を決著する爲めに、東洋でも、西洋でも、彼の唯心論者と唯物論者とが、敵

味方に立ち分れて、鎗を削りて戦つて居りました。唯心と唯物とは別と思つて居つた。極樂と、地獄は別種の様に思つて、其間に塹壕や、城壘が設けられて居る様に思つて居つた。所が漸次學問の進むに連れて、二つと思つて居たことは、一つであると分り、二元的は遂に一元的に歸するに至つた。即ち一切が一元に歸した。佛教にも萬法一に歸すと言ふてあります。

筆が手か手が筆か

併し萬法一に歸すとか、差別即ち平等とか、種々と説いた所で、若し此理を了解して、深く信受しなければ、何んの所詮もないこととあります。又信受して而して後、是れを身に行はねば效はないのであります。要する所は只此實行と言ふ點にあるのであります。元來信とか、修養とか言ふことを語るのには、恰も一本の筆に付いて、其成立は如何、使用法は如何、と言ふて論じてゐる様なものであります。若し其議論が、如何に高尚であり、其説明が如何に巧妙であらうとも、其筆の精神を發揮すると云ふ點に至つては、所謂畫餅飢に充たすであつて、殆んど徒勞に屬するのであります。然らば其活きたる精神を現はすには如何にするかと言へば、種々の議論はさて置き、先づ筆を振ふて紙に臨み、縦横に筆を走らせて、所有思想道理を書き現はして、手と筆と相忘れ、筆が手か、手が筆か、天地一

の筆となりて、自由に使ひ廻した上、始めて其筆の本領が發揮され、精神が活現さるゝのであります。信なり、修養なりも、亦復此の如きものであります。要するに、解信と言ふのは、抑も何んの道理を解して信ずるかと言ふならば、一面に於て、平等の眞理を信じ、一面に於て差別の眞理を信じ、又之れと同時に平等即差別の眞理を信ぜねばならぬのであります。

只こゝに一言しなくてはならぬことは、平等を信じ、差別を信ずると言ふても、決して偏頗なる平等、偏頗なる差別を信じてはならぬ。彼のルーソーの自由平等説の如きも、大いに結構ではあります。併し若し其説が偏頗なるものであると言ふと、人をして大なる誤解を生ぜしめて、世を亂し、人を誤るやうな事になるのであります。此誤解からして社會に害毒を流した例は東西古今の歴史に徴して明かなる事實であります。彼の無政府黨であるとか、虚無黨であるとか、言ふやうなものゝ多くは、大抵此偏したる平等説が産み出したるものであります。それであるから古人も『差別なき平等は悪平等なり、平等なき差別は悪差別なり』と言ふて居ります。それでありませうから佛教なり、若くは其他の宗教に於て、健全なる信念を得んとするは、此點からして趣向せねばならぬのであります。彼の最初よりして、神なり、佛なりを絶対的に有難いと信じて、之れに依りて生涯の働きの根源が見出さる人は、洵に幸であります。多少智識なり、學問なりが出来ますと、其處に種々の懷疑やら、煩悶やらが起つて來ますので、なか／＼さう言ふ工合には行きませぬ。此點からいふと、却つて何も知ら

ぬ人こそ幸で、熱い時に畑の畔に腰を掛けて、青天井を見て居るやうなのは、實に呑氣な有様であります。併し若し此人達にも多少の智識が開けて來ると、一つの疑ひが起つて來て、それから煩悶の種となるのであります。學問々々と言ひますが、學問をする程疑ひが多くなつて來ます。隨つて煩悶が多くなるのであります。故に疑ひのないと言ふ人は、つまり智識が開けて居らぬ人と言ふても可い。人は大いに學問を進むるがよい。そして又大に疑ふがよい。疑ひ去り、疑ひ來つて、初めて眞理の光明を發見することが出来るのであります。禪宗では何んでも疑つて來い。大に疑へと言つて、決して盲從して來いとは言はぬ。大に疑ひ、疑ひの決せらるゝまで進めと云ふ遣らせ方でありませぬ。

けれども之れが仰信の方になりますと『何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるゝ』で其の中に眞理があります。純粹の信はこれで宜しく、何にか分らぬが、唯有難さに涙こぼる。此一の信仰がありますならば、毎日々々感謝の念を捧げて仕事をすることが能きやうと思ひます。即ち命令を受けたのでなく、我が仕事は我が自身の天分として、働くといふことになりませぬ。さうすると日々夜々働いて居る仕事も、有難涙がこぼるゝ感謝の念を有ちて、倦むことなく、今日を渡ることが能きやうと思ひます。

上根中根下根

眞劍の修行

悟りには階級があります。「一超直入如来地」など、言ふけれども、それは上根の人に就いて言ふことで、鈍根のものは、容易に一足飛の悟道は能きませぬ。古からの例に徴しても、それは一夜にして悟つたといふ人もないではないが、多くは二十年三十年と苦修して、其結果漸く悟道の域に達してゐるのであります。全體人根には利鈍の別あるとは、衲が説明するまでもないが、佛教では之れを上根、中根、下根の三段に分けてあります。之れを喩へて言へば、一を聞いて十を知るは上根で、例へば僅かに鞭影を見て馳する駿馬の如きが之れであります。中根の人に爲ると、恰も馬が、一鞭を加へられて、それから走り出すが如くでありまして、十を聞いて十を知るの類であります。第三の下根の人に爲ると、一を聞いて十を知るところか、十を聞いても其十すら知ることが能きず、繰り返へし繰り返へし幾度も反覆して、嚙んで含めるやうにして教へ、初めて知るので、馬が骨身に泌み込む程強

く鞭を加へられて、初めて走り出すが如き類であります。ところが上根の人は稀れで、中下の二根の人が多いのであります。若し上根の人であつたならば、直ちに如来地にも一超することが能きますけれども、中下の根機の者は、然う容易に、悟道することは困難であります。それには矢張筋の皮を、一枚々に剥ぐやうに、修行を積んで往かねばなりません。現今の禪學者は、多く此點に就き間違つてゐます。現今の禪學者は、空見識の徒が多く、悟道もせず、悟道したやうに見せかけてゐます。それでゐても亦禪、座も亦禪、語黙動靜體安然など、言つて澄ましこんでゐます。永嘉大師が『行も亦禪、座も亦禪、語黙動靜體安然。』

と言はれた通り、それに違ひないけれども、こんなことはズツと修行の能きた上で言ふべきであります。初心の時から、こんなことを言ふのは、それは空見識であります。現今吾が臨濟宗には、二十四箇所も僧堂があり、又曹洞宗には、それ以上多くの僧堂があります。けれども衲どもが修行時代の雲水の風儀なり、見識なり、又それを化導する師家なりを比較して見ると、十年二十年と次第に衰へて來てゐる。勿論これは時世といふこともあつて、以前のやうに行かぬかも知らぬが、段々に衰へて來てゐるのは事實であります。専門に禪を修する人も、其時代よりか下火に爲つてゐるし、在家の人も又、其時代よりか下火に爲つてゐるやうであります。これといふのも、矢張現代の禪を修する人が、熱心でないからだと思ふ。禪は眞劍の修行でなければならぬに、それを撞球でもやるか、ローリング

スケートでもやる位に考へてゐる人が、多く爲つて来たから、無理もないことでもあります。一應禪の現痛だけを知り、其概念だけを捉へやうとする人なら、未だそれも可いが、苟も専門に禪を修せんとする人は、眞面目に行らねばならぬ。禪を修するといふことは、斷じて樂な仕事ではない。それは寧ろ苦痛である。釋尊六年の端座も、達磨九年の面壁も、眞劍の修行であつたに違ひありません。靈雲志勤和尚は桃花を見て悟道された。此事は、

『師初め瀉山に在り。因に、桃花を見て悟道す。偈あり曰く、三十年來劍を尋ぬるの客、幾回か葉落ち又枝を抽く、桃花を一見してより後、直に如今に至りて更に疑はず。瀉、偈を覽て其所悟を詰り、之れを符契す。緣より悟達する者は、永へに退出する無し、善く自ら護持せよ。』

と『靈雲章』にあります。又香嚴智閑和尚は支那青州の人で、幼少の時、世を厭ひ、親を辭して百丈懷海禪師の下で出家し、百丈遷化の後には瀉山露祐禪師に従ふて參究し、後瀉山を辭して、南陽の武當山に入り、慧忠國師の遺跡に庵居し、一日庭を掃除するに方り、瓦礫の竹に當りて聲を發するを聞き、忽然として大悟されたのであるが、靈雲和尚といひ、これといひ偶然に大悟したのではない。長い修行が其處まで至つたのであります。工夫辨道の因がなかつたならば、決して大悟の果を見ることができなかつたであらう。彌々悟つた境涯に爲ると、佛眼も亦見れども見ることができない。何故見ることができないかと言ふに、洵に無望得自在で、一々の動作が消息であるからであります。これを見

る人の智慧が足らないのではない。天地と一枚に爲つて了つたからであります。此處を玄沙といふ人は、

『盡十方世界沙門の一隻眼』

と言つてゐます。此境涯は又獨立無胖とも、獨座大雄峰とも言ひ得るのであります。此處に達するには、一と通りの修行では不可ぬ。苦んで修行して往くところに味があります。近く修行に苦心した例を擧げると、越溪和尚の如きは、修行中薪の上に、尻を捲つて三時間も四時間も座禪してゐたといふことであるし。又獨園和尚は、嚴冬座禪するに、傍に碗を置き、其碗に降る雪が一杯溜るまで、雪中に座禪してゐたといふことであります。全く眞劍であつたのです。眞劍であつたればこそ、修行にも實が入ります。だから如何なる苦行も、一向氣にも留めず、本當に禪の味ひがあるのであります。

執着心がなくなる

近頃世間には、生死問題が大分喧ましいやうであるが、一切見性すれば、生死はなくなる。生死がないからして、菩提などの求むべきところがありません。洵にサラリとして、一切に執着心がなくなる。自分が佛の境涯であるから、自分の心の外、自分の身の外に向つて、佛や神を尋ね廻はる必要が

なくなるのです。だから其手段として、座禪せなければなりません。内心に向つて、佛を求むるには、座禪に越したものは無い。それで静座するには、先づ初めは、鼻端の白きを見て、工夫して往く、すると眼が疲れて来て、眼球が抜けさうに爲つて来る。それを堪へ忍んで行つて往けば、遂には三昧に入る事ができます。そして初めは手が無いやうに爲り、次には身體が無いやうになります。それから頭がないやうに爲ります。其果は遂に何も無いやうに爲つて了ふ。そして氣の抜けた如くポカンと爲る、ところで此境涯は、矢張座禪せぬと解りませぬ。けれども唯座禪ばかりしたからと言つても、空々寂々であるのでは、本當とは言へぬ。矢張自分と自分で、本當に座禪して見なければ、其妙味は解りませぬ。

これにつけても後の世を、願ふぞ誠なりける。
砂を塔とかさねて、黄金のはだへこまやかに、
花を佛に手向けつゝ、悟りの道に入らうよ。

(謡曲卒塔婆小町)

五種の禪

精神上の實地の經驗

禪とは何んぞやといへば、禪は心である。だから人は生れながらにして、禪を備へてゐて、學者には學者の禪、酒屋には酒屋の禪、米屋には米屋の禪、廣義から言ふと、各人に有してゐないものは無いと言つても可い。それで此心といふは、何んであるかと言ふに、古註に従へば、心とは心の姿にあらずして、心の本體なりとあります。衲に言はせると、心は妙なりで、思想感情の最高潮に達したのを言ふのであります。去れば到底之れを言句を以て、形容することはできません。ところが世間では、禪のことを種々誤解して、禪學などいふてゐるが、禪は決して科學ではありません。いふまでもなく宗教でありまして、學問といふよりも修行であります。言ひ換へれば、智の働きではなくて、身を以て努力すべきものであります。現代の言葉なら、精神上的の實地の經驗とでも言ひませう。更に甚しきに至りては、或る博士の如きは、禪は催眠術の一種であるなどいふてゐる。衲は之れを聞き、一

種の門外漢として、一笑に付して置いた。能く考へて見ると、世間には似て非なる野狐禪なるものがあります。智の發動を止めて、枯木の如く、殆んど死人の状態に心を止めて居ります。恁くの如きは道ではなく、術であつて、眞に禪の本旨を得たものとは言はれませぬ。圭峰宗密禪師は、支那泉州西充の人で、唐の建中元年に生れました。資性英邁、幼少から儒道を學び、二十八歳の時、貢擧に赴かんとして、偶々遂州道圓禪師の開法の席に至り、法を聞き、欣然として大いに會するところがあつた。遂に道圓禪師に就いて薙髮されました。或る日「圓覺經」を讀み、未だ卷を終らぬに、豁然大悟された。其後諸所を徧參し、荊州の惟忠、洛陽の奉國臣照等の諸老宿に參し、華嚴の第四祖清凉澄觀法師に就いて、華嚴を研究し、次いで終南山草堂寺に住し、更に寺南の圭峯蘭若に入り、これから著述に従事されたといふことでありますが、此宗密禪師が、禪を五種に分けて居られます。

- 第一、外道禪
 - 第二、凡夫禪
 - 第三、小乘禪
 - 第四、大乘禪
 - 第五、諸佛頂上禪（これは一に一行三昧或は又最上乘禪ともいふ）
- 第一の外道禪は、恰も印度の波羅門教に於けるが如く、只管此厭ふべき黒土を去つて、淨土に行か

んことを希ふの餘り、身には異形の装ひを爲し、一週の間食はず、飲まず、眠らずといふ状態であります。更に甚しきに至りては、一本足で立ち通しにするとか、高い竿に昇るとか、實に愚昧極まる苦行をするのです。恁くの如き迷信は、古今東西を通じて、世に盡きませぬ。これが即ち外道禪であります。

- 第二の凡夫禪には、迷信はありませぬが、常識の上から考へを立て、早く天國へ往きたいといふ因果に律せられてゐます。
- 第三の小乘禪は、自利上の座禪でありまして、自我の満足のためには、世界は何うならうとも構はぬ。唯自分の満足を以て、無上のものであるとしてゐるのです。
- 第四の大乘禪は、全く利他上の座禪でありまして、自我の満足どころの騒ぎではありません。之れを小にしては一家一社會、大にしては世界人類の爲めに、貢獻しやうと言ふのであります。菩薩の位にある人は、即ち之れに相當します。
- 第五の諸佛頂上禪は、小我は大我に歿し、大我は小我に歿入して、自利、利他の區別などは、全くなくなつて、三界は我が有なりと、佛の仰せられた通り、此世に活きとし活けるものは、皆我が子の如く愛するのを言ふのであります。これを倫理的語法を以て言へば、至善の境にあるものを指すので、これが佛の極、禪の極致であります。

和光同塵或は入塵垂手

愆くの如き極致に到達せんとするには、七情を除去せねばなりません。勢ひ其人の心は、死灰のやうに爲ると思ふものもありませんが、それは大なる誤解であります。一端悟りを開いたものは、今まで厭ふ可き七情と思ふてゐたものが、今度は實に愛すべきものと爲る。王陽明の語に、『耳目見聞は外賊なり。情慾意識は内賊なり。只それ主公惺々不昧、中房に獨座する時は、賊即ち化して家人と爲る。』

とありますが、これ其場合に於ける状態を、適切に言ひ現はしたものであります。迷と悟とは別のものではありませぬ。迷へるものには七情と爲り、悟れるものには、それが智ともなり、光明とも爲る。これを喩へて見れば、澁柿を湯につけて置くと、甘くなるのは、澁があるからこそ、甘く爲るのであります。それと同様に、悟れるものには、今までは厭ふべき七情も、遂には愛すべきものと爲るのであります。去れば眞に、禪に依つて悟入したものは、決して死灰のやうなものではなく、血あり涙あつて、人類に臨むやうに爲るのであります。世には遠く俗塵を避けて山中に入り、獨り自らを高くするものがありますが、それ等は禪の本旨を得たものとは言はれませぬ。禪は何處までも、血あり、涙

あつて、俗世間のものを救ふといふ大慈悲心のあるものでなければなりません。世間と離れて、禪を求めんとするのは、大きな相違であります。經文にも治世、産業皆佛法と違背せずとか、和光同塵とか、或は又入塵垂手とか言つて、心は佛の許にあつても、此俗世間に交つて、何處までも俗世間の爲めに竭すといふことを述べてあります。又動中の工夫は、靜中の工夫に優る千百倍なりとあるが、これも又同じ心であります。

全く悟入の境にあるものは、厭ふべき七情も、愛すべきものと爲つて、俗世間の爲めに竭すことができず、又禪の要旨を得ないものは、如何にして此困難多き社會に處して、往くかといふに、自分の従事してゐることに、心の熱誠を捧げて、最も敬虔に、最も丁寧に、行るのであります。初めの間は、随分困難のこともありません。併し毎日々々試験を受けてゐるのだと思ひ、我慢して一難を経たは、一勇を鼓して往く。愆くして進むと、今まで逆境と思ふたのが、逆境でなくなり、難事であつたのが、難事でなくなつて、外目には随分困難に見える事も、自分には一種の快感と爲つて來ます。然ら爲ると、艱難汝を玉にす、遂には禪の要旨をも會得するに至るのであります。禪宗の古徳が、

『一日爲さざれば、一日食はず。』

と言つてゐますが、此心懸で總て物事を行れば、禪を修行するに、態々山中に入る必要もなければ、寺に入つて、僧と爲る必要もありません。

禪と武士道

起つた新宗教

往昔の鎌倉は、政治に於ても一新機軸を出してゐるし、又武力に於ても強大なものでありました。それと同時に、佛教に於ても、一新紀元を劃して居るといつて可からうと思ひます。それから遡つて、奈良朝時代の佛教とか、天平時代の佛教といふものがあつたにも拘はらず、鎌倉といふ時代に至つて、初めて佛教中の新宗教といふものが起つたので、これは其邊の歴史を調べて居られる人は、能く知つて居られると思ふ。衲が今記憶から浮んだ名稱だけ擧げると、鎌倉時代に起つたのは、融通念佛宗とか、淨土宗とか、禪宗とか、淨土眞宗とか、日蓮宗とか、時宗とかで、それ等が鎌倉時代の新宗教と言つても可からうと思ふ。之れを鎌倉時代に於ける新宗教と言はゞ、其以前のは舊佛教と言つても差支なからう。鎌倉以前の佛教は、總て貴族的であつたと言つても宜しからう。では鎌倉時代に起つた佛教は、何うかと言ふに、貴族に關係はないことはないが、大體から言ふと、平民宗といつて

も差支なからうと思ひます。舊來の佛教は、動ともすると、繁文褥禮に流れてゐるが、鎌倉時代に起つた佛教は、頗る直截簡明であります。早い話は、鎌倉以前の佛教は、理論的、學問的の宗旨と言へる。然るに鎌倉時代に、新に起つた佛教なるものは、理論よりも實際を貴び、學問よりも信念に、重きを置きました。例へば日蓮上人は、天臺が種々理論を以て、解釋したるところの佛教を、即身南無妙法蓮華經として、活きた題目を唱へ出しました。淨土教といふのも、學問的に解釋しやうとすれば却々難かしいが、偏に南無阿彌陀佛と切り出したは、即ち法然上人の力で、勿論南無阿彌陀佛は、今新に唱へ出された譯でないが、兎に角新しい叫びと爲つて、現はれ出たことは事實であります。それに次いで起つた禪宗は、何のであるかと言へば、これは亦いろいろ唱へ方があるが、禪は極めて單簡明瞭であります。即ち『莫妄想』の三字でも可い。又『無』の一字でも可い。或は『一喝』で可い。例へば往昔『如何なるか是れ佛』と問ふた者があるに對して『即身即佛』と答へられた古徳もあるし『麻三斤』と答へられた古徳もあるし、『乾屎橛』と答へられた古徳もあります。恁くの如く鎌倉時代の佛教は、何れも直截簡明を貴びて、時代人心の要求に應じて起り、他力と言はず、自力と言はず、恰も寸鐵人を刺すの概があります。此活力あり、生命ありて、宇宙の根本に接觸し、人生の眞歸趣を指示するものを、衲は禪といふのであります。去れば佛教各宗には、熟れも禪といふ意義を備へて居らぬ宗旨は、一つもないのであります。各宗それ／＼の堂奥に入つたら、必ず禪に歸すると思ひま

す。敢て必ずしも、禪宗として成り立つてゐる吾々の宗派の途轍の如くならなければならぬといふのはありませぬ。
先頃の世界的戦争に就いて、吾々の如き者でも、實物教育でいろ／＼の事を見せられました。平素富の高きと、兵の強きとを以て、内外から信ぜられてゐた國が、さて戦端を開始して見ると、存外然うでもなかつたやうであるかと思へば、前夜見た夢が、一朝覺めたやうに、ロマノフ朝廷が、脆くも覆つて了つた如き、國勢岌々として危く、恰も大地震があつて、又次ぎから次ぎに餘波が揺つてゐるやうな有様で、其國が民主國に爲るか、或は帝政國に爲るかは、逆睹すべからざるやうな状態であるが、之れは露國のみではないと思ふ。先頃の戦争で、新に起つた譯ではないが、近い隣國の支那は何うか、戦争の導火線であつた塞耳亞は何うか、白耳義は何うか、段々其國に就いて見ると、吾々が平時に於て考へてゐたのと、實際とは餘程思ひ違ひがありました。吾々素人は勿論であるが、其玄人と稱する經濟家、政治家に於ても、思ひ違ひがあつたと思ひます。彼の戦争に就いて、各國夫々長所も現はし、短所も現はした觀があります。

敵は富なり

要するに物質的戦争に於ても、精神的戦争に於ても、渾然として統一を爲して、確固不拔なる中心のある國が、今日まで勝つものは勝ち、勳功を奏するものは奏してゐると思ひます。國には國の中心があるので、あらゆる異分子を打して一丸とし、各々精神的統一、學國一致の此精神が、強いか、弱いか、此精神が、全く亡びたか、亡びぬかに依つて、殆んど其國の盛衰興亡を、豫じめ想像することが能きる。そして吾國の現状は何うかと言ふと、吾々が平生誇つてゐる武士道、日本魂といふ此精神が、開國三千年後の今日、果して儼然として、金鐵の如き者があらうか。此五千萬なり、六千萬の人間の心が、殆んど擧つて、爰に一致して居るものであらうか。それは一致したものが、如何様に働いて居るだらうかといふ實際に就いて、眺めて見ると、衲には判らぬ。何うしても判らぬと言つて置くより仕方がありませぬ。世間の人々は、之れだけの言葉で、人々箇々の常識なり、學問なりに照して、考へられたならば、此世界に誇つて居る國は、皇統一系の國、人は忠孝一致の民族、其日本魂……武士道……といふ精神が、現在如何やうに働いて居るか、衲には判らぬと言ふたが、各人には必ず判つて居ることと思ふ。
先頃の歐洲戦争の始まらぬ前、英國の或る識者が、恚ういふことを言つたと聞いた。英國の敵は、決して獨逸ではない。勿論他の國々でもない。動もすると英國人は、英國の敵は獨逸だ／＼と、子供などにまで言ひ聞かせたのであるが、今の識者の言ふ所に依れば、英國の敵は、獨逸でもなければ、

其他の國でもない。然らば何が英國の敵かと言へば、敵は英國の富である。總て英國を亡すものは、此富であると言ふたのであります。聞きやうに依つては、如何にも矯激の言葉のやうであるが、決して然うではありませぬ。納に言はしむれば、今日の日本の敵は何んであらう。敵國外患なきものは其國亡ぶで、常に敵を假想して居らねばならぬ。政治界から見ても、將た經濟界から見ても、敢て血を流して、戰爭するばかりでなく、吾々の敵が、吾々の周囲を取巻いてゐます。若し納をして、前の識者の言を藉り來つて、日本の敵は何んであるかと言はしめたならば、日本の敵は經濟戰の外國貿易でもない。無論これは敵でない譯ではないが、併し小敵だ。小敵だからと言つて、輕侮しては大變であるところが納は極く單純なるところの物質主義、極端なるところの黄金崇拜、而してそれに伴ふ淫靡、奢侈、怠惰、墮落、これは何にしても吾國に取つての強大なる敵であると思ひます。實に大々的強敵であると思ひます。日本の國家は、此通りにして往つたならば、何時か亡びるかも知れぬと歎じた人もあるが、これは極言である。極言は納共の如き者は言ひたくないが、併し同感であります。納は泣言や愚痴を言ふのは大嫌いでありますが、現今の世上の有様を見ては、辦慶ではないが、泣かざるを得ませぬ。吾が國民精神の統一は如何、精神界の現象は如何、其紛々たる亂麻の如き状態を悲觀すれば、吾が日本國中の精神上の危機と言つて可からう。現に吾國には、基督教もあり、佛教も固よりある。而かも佛教にも各宗派があり、基督教にも各宗派があります。それが混亂してゐると言ふのでは

ない。宗派は幾らあつても可いが、吾々は國民の一人として考へて見ると、果して吾々國民が、克く忠、克く孝の犠牲的精神を以て、事實に統一されてゐるか何うか、これは統一されて居らぬといふやうなことは、納は斷言能きぬが、大いに疑はしい。それ故吾が日本の佛教各宗派が、禪といふ意義の下に、結び付けられて居るやうに、吾が國民全體が、總て武士道的精神に統一せんことを希望するのであります。爰に鎌倉武士と言ふても、鎌倉といふ猶額大の一地方を指して言ふのではありませぬ。鎌倉は日本全土を意味し、武士は國民全體を代表せしめた納の考へである。けれども言葉の言ひ廻はしが拙いから、然う受け取れぬかも知れぬが、其處は宜しく察して貰ひたい。

先づ慾を去れ

先づ鎌倉時代の禪に因縁ある北條氏を擧げて見ると、北條氏は九代といふが、二代は執權者が短命で、數に入らぬ位で、事實に於ては七代であります。北條氏が、陪臣から起つて、天下の政權を握り七代までも之れを傳へたといふのは、傳へらるべき所の原因があつたからであらうと思ふ。頼山陽が書いてゐる中に、單に北條氏の悪るところばかり論じて、然かもそれが禪を信じたから來た悪感化のやうに曲筆し、唯彼の義時、高時のみを擧げて、畏れ多くも一天萬乗の君を、孤島に流し奉り

其他暴戻があつたのは、彼等が佛教を信じ、就中禪を修めたからだ、巧みな文章を以て書いてゐます。彼等は博識だと言はれてゐるに拘らず、事實を誤つてゐるのは何事か、元來義時、高時は、禪に参した者ではない。縦令彼等が圓顛方袍の姿をしてゐても、眞の宗旨には門外漢であつた。人もあらうに、此二人を、北條氏の代表的人物にあるかの如くに引き出したのは、偏見も又甚しい。寧ろ深く佛教を信じ、禪を修したのは、泰時、時頼、時宗である。兎に角北條氏が、彼の立派な治績を擧げた裏面を窺つて見ると、泰時の如き、最も敬虔な佛教信者でありました。或る時泰時が、明恵上人に向ひ、治國の要を問ふた。すると、上人は、

『國を治むるは、病を治むるが如く、宜しく、其因を察せねばならぬ。公先づ其慾を去るべし。慾は國を亂すの本なり。』

と言はれた。又泰時は上人から、

『あるべきやうわ』といふ七字の教を受け、之れを堅く守つて、實行したので、政治上にも、立法上にも、好成績を擧ぐる事ができました。當時、武士道を組織的にしたのは、泰時與つて力ありと云ふても可い『あるべきやうわ』此言葉は古臭いか知れぬが、實に千古の名言で、これを實行してこそ、初めて國家の秩序も保たれ、又健全なる國家が形造られたのであります。泰時が明恵上人から、『天下を治めんとする者は無慾といふことを守らねばならぬ。』

と論され、

『自分一人は、之れを實行しても、民百姓が守らなければ、如何ともすることができぬ。』

と言ふと、

『それは人民を責める必要はない。執權者それ自身が、慾を去れば宜しい。』
 と言はれたといふことであります。これは華々しい舞臺に現はれたことでなく、北條氏の善政を布いた樂屋の苦心であります。次に泰時から轉じて時頼も尊王心が深かつた。唯に尊王心が深かつたばかりでなく、國家人民安かれと、最も治世に意を用ゐてゐたのは、世人周知のことです。其時頼は、如何にして精神を修養したかと言ふに、先づ一國の人民をして、武士道的精神を旺ならしめ、日本魂を發揮し、元氣あらしむるには、先づ以て自分自身を鍛えねばならぬと、佛法へ入り、そして参禪したのでした。最初の師は、曹洞宗の開祖たる道元禪師でありました。禪師が支那から歸朝されて、都會の風塵を避け、越前の傘松の里に、庵を結んで居られた當時、時頼は其道名を聞き、禪師を鎌倉に迎へて、自分の館に半年餘りも逗留させた。年號から言ふと、寶治元年の八月頃であつたらう。寶治元年の八月から、翌年三月頃まで居られ、時頼は弟子の禮を以て、菩薩戒を授つたのであります。

荒磯の波もえ寄せぬ高岩に

かきもつくべき法ならばこそ

これは時頼が参するに就いて、禪師が見性成佛を詠みて示された道歌であります。これが抑も始めで、それから半年餘で、禪師は越前へ歸へられたが、丁度其時分、多分寛元四年頃でありましたらう。請はずして來られた大覺禪師（蘭溪道隆）を、鎌倉郡大船村に常樂寺といふ寺、これは今でも残つてゐるが、其處へ迎へ、そして次に建長寺を創建して開山とし、親しく師の鉗鎚を受けました。そののみならず京都東福寺の開山聖一國師（辨圓圓爾）に参禪したのです。當時國師は、宋國徑山無準和尚の法を受けて、歸朝されてゐた。殊に時頼は、文應元年に來朝された兀庵禪師にも参じて、遂に大悟徹底したのであります。それを聖一國師が、兀庵の韻を次いで、證明された偈があります。

大機 大用 大根 人 鼻孔 遼天 獨露身
 凜々 威風 行三關 外一 五湖 四海 一天眞

といふのがそれでありませう。是程肉身の菩薩でも、不幸短命であつて、春秋僅かに三十七にして此世を去つたのが、弘長三年十月廿三日でありました。（其臨終の偈は、前章に掲げて置いたから爰には省く。）縦令不幸短命であつても、天下後世に遺した精神的感化は、甚だ偉大なるもので、今尚世道人心の上に生きて居ります。

空前絶後の壯舉

時頼の次ぎに出たのが、兒童走卒までも、能く其名を知つてゐる相模太郎即ち時宗であります。文豪頼山陽は、彼れを評して膽斗の如しと云つてゐます。其膽玉は水甌の如く大きいといふので、彼れは確に膽の人でありました。時宗が執權職に就いたのは、年齒僅に十九歳で、其時初めて蒙古から使者を寄越したのでした。それから廿四歳の時に、初めて蒙古の來襲を受け、三十二歳即ち弘安四年再度の大舉來襲を引き受け、外敵ごさんなれとばかり、敢然として起ち、國家を雙肩に荷ひ、美事外寇を掃蕩して、武士道を千歳に扶樹し、吾が皇國を、泰山の安きに置いたことは、眞に是れ空前絶後の壯舉であつたと言はねばなりません。此奇蹟的戰勝は、彼の國の史乘にも見えてゐるが、之れより先き、彼の蒙古は、國號を改めて元と稱し、時の元首忽必烈は、これも世人の知る通り、世界に名を得たる英雄で、所謂英雄英雄を生むで、成吉思汗の子でありました。忽必烈は、當時非常な勢力を有して、天下を蹂躪し、東は太平洋、北は北海道、それから西の方へ至つては、歐羅巴の獨澳の或る地點までも、勢力範圍が達して居り、南は印度、亞刺比亞を包み、そして亞細亞の八九分、歐洲の大半は彼れの網の中に入つて居つた時分であります。獨り日本が、東海の一孤嶋として、超然彼れの毒牙を

遁れて居りました。若し大蒙古を猛撃なる大鷲に喩へれば、日本は蜻蛉位のものでありましたらう。然うして彼れが、他國を侵略するのは、只自己の封豕長蛇の慾望を満たさんが爲めで、殊に日本へ押し寄せて来たのは、彼れの黒幕たる伊太利人のマルコポールが、日本は天國の如き黄金國で、金銀珠寶あらゆる世界の至寶が、満ち／＼てゐるから、速かに往きて取るべしと進言したといふことが、歴史上に見えてゐます。初めて元が使者を寄越した時は、單に信交しやう、互に交情好くしやうといふやうな書翰を持つて来たに過ぎなかつたが、後には吾が言ふことを肯かなければ、干戈に訴へるぞと、威嚇し文句が書き加へてあつたので、鎌倉幕府は、何んとも答へませんでした。其後文永八年元は更に超良弼なる者を使者として、又もや書翰を寄越しましたが、時宗は其國書の文が無禮であつたのを憤り、使者が京都並に鎌倉へ来るのを許さず、筑紫に於いて、聖一國師や、大應國師をして應接折衝せしめ、敵國の事情をも搜らしめたのでありました。忽ち烈は吾が意の如くならざるを怒り、吾が文永十一年に、高麗の戰艦を合せて攻めて来た。其時肥筑沿岸一帶の地方は、元兵の亂暴狼藉に委せられ、壹岐、對馬の守護職は戰死し、無辜の良民を殺戮し、殊に慘虐の甚だしきに至りては、掌に穴を穿ち、そこに繩を通して、戰艦の周圍に垂下したといふことでありました。何んといふ残酷さでありませう。其翌年更に杜世忠外五人が使者として來ました。時宗は憤然として、『彼れ、無名の師を起して、慘殺を恣にしたがら、尙ほ厚顔にも、使ひを送るは、無禮至極であ

と、直ちに龍口で斬首した。此時既に時宗は、弘安四年の外寇に對する處置は、堅く決心するところがあつたと思はれます。決して輕舉妄斷ではない。而して又他の一面には、彼我兩國の高僧に就いて安心の秘要を受くる旁、敵國の事情を聴取し、身は鎌倉の幕營に居りながら、大蒙古の狀況は、手に取る如く知つて居つたと思はれます。でなければ如何に膽斗の如しと雖も、あれだけの大英斷は能きませぬ。時は弘安四年の六月五日、果然蒙古の水師は、筑紫瀧に現はれて來ました。其兵船四十餘艘、水兵十四萬と記されてありますから、勢ひ當るべからざるものに違ひなかつた。其以前から、時宗は國防に留意し、戰備を怠らなかつたのは、今でも博多に残存して、古き歴史を實證してゐるところの、十四五里の間に築かれてある石壘があります。そこで鎮西の探題北條實政を始め、諸國の武士の馳せ集つた軍勢が二十五萬といふので、天下は恰も鼎の沸き立つ如き有様でありました。畏れ多くも龜山天皇は、身を以て國難に當らんと、伊勢の大廟に祈願を籠め給ふといふ有様でありました。ところで時宗が禪の師と仰いだ佛光國師のことを説くことにするが、國師字は無學、別に子元とも號された。支那明州慶元府の人で、十三歳にして父を亡ひ、出家を志し、北碭居簡を禮して落髮し、奉勤すること五年、辭して徑山の無準師範に依られ、一夜板聲を聞き省あり、無準禪師の寂後、遊方して靈隱に石溪月に謁し、育王に偃溪聞に參じ、後小朶峰に寓されました。又大慈寺に太觀物初に待す

ること二年、明年邑宰羅季莊、東湖の白雲庵を以て師を招く、移つて母を養ひ居らること七年に及び、母亡じて後靈隱寺の退耕寧に参じ、請ひに依りて台州の眞如寺に住し、徳祐元年元の兵亂を温州の能仁寺に避けられたところが、元兵が温州を侵略した。すると師は獨り堂内に坐して居られました。元兵が白刃を振り冠つて師の首を刎ねやうとしたが、師は神色自若として、

乾坤無地卓孤筇 喜得人空法亦空
珍重大元三尺劍 電光影裡斬春風

の偈を唱へられると、元兵は敢て刃を下さずして去つた。此偈は國師の名と共に有名なものであります。弘安二年時宗が、元に禪の明師を求むると、師は選ばれて、日本に渡來し、先づ太宰府に來られた。其時が弘安三年であつた。秋鎌倉に來り、建長寺に住し、同五年時宗が圓覺寺を創建して、師を開山としました。九年八月病を得、九月三日寂し、其遺偈に、

來亦不進、去亦不後、百億毛頭獅子現、百億毛頭獅子吼

と、壽六十一、佛光禪師と諡され、又光嚴帝が圓滿常照國師と加諡せられました。「佛光國師語録」は、即ち此無學祖元禪師の語録でありまして、侍者の一眞、徳温、眞慧、一愚等の共編に係る禪書です。第一卷は眞如寺の語要、第二卷は拈古、偈頌。第三卷は建長寺の語要。第四卷は圓覺寺の語要、普說。小佛事。第五卷は建長寺に於ける普說。第六卷は普說。第七卷は法語、心要。第八卷は佛祖讚

偈頌。第九卷は拾遺。第十卷は塔銘と分けてあります。此佛光國師は、毎朝楞嚴神呪を讀誦して、外敵降伏を祈られました。今臨濟宗の寺院で、夏楞嚴會を營むのは、此時から始まつたのであります。其他あらゆる人事を竭して、命を天に任せて居つた有様が、歴然として史上に顯はれてゐます。右の「佛光國師語録」に、

『弘安四年、虜兵百萬在博多、略不經意、但毎月請老僧、與諸僧下語、以法喜禪悅一自樂』

とあり、之れに依ると時宗は、他の一面佛天に向ひ、敵國降伏を祈願し、毫も油斷をしなかつたのであります。又「佛光國師語録」に、

『主帥平朝臣、深心學般若、爲保億兆民、外魔四來侵、舉國生怖畏、朝臣發勇猛、出血寫大經、金剛與圓覺、及諸般若部、精誠所感處、滴血化滄海、滄海渺無際、皆是佛功德、重々香水海、照見浮幢刹、諸佛坐寶蓮、常說如是經、一句與二偈、一字與二畫、悉化爲神兵、猶如天帝釋、與阿修羅戰、此般若力、皆獲二於勝、捷今此日本國亦願二佛加被、諸聖神武威、彼魔悉降伏、生靈皆得安、皆佛神力故、世々學般若、報佛威猛力。』

とありまして、此偈を讀んで見ても、時宗が人知れず、如何に國家の危急存亡を念として居つたかゞ

窺ひ知らるゝでありませう。龜山天皇の御製と承つてゐる御歌に、
國民の誠心をつくしてし

後こそ吹かめ伊勢の神風

此御製にて、當時舉國一致の精神が、如何に旺盛であつたかゞ分りませう。

忘れられぬ美談

これより先、弘安四年の正月、時宗が佛光國師の室に參禪した時、國師が

『莫煩惱』

と言はれた。即ち惱むこと莫れと、時宗は正月早々から、こんなことを言はれたので、不審に思ひつゝ、其意を問ふと、國師答へて曰く

『春夏之交、博多騷擾せん。而かも一風纔に起りて、萬艦掃蕩せん。願はくば慮とする勿れ。』

と。春と夏の間、博多が大いに騒ぐであらうと、此時既に佛光國師は豫言して居られます。これは國師が、蒙古の國情を能く知つて居られたからで、決して心配するには及ばぬ。必ず天風來りて、皇軍を助くるであらうと。果して弘安四年の六月五日に至り、彼の通り大學して來たのでありますが、

其結果は敵兵の生きて歸へる者、僅に三人でありましたと。

當時博多の急報頻りに至るや、編者曰く佛光國師と時宗との此商量は、前章にも掲げたが、爰にはそれよりも詳細に説かれてあるから、重複ながら再記することにした。時宗は甲冑を着し、國師の室に至り、

『弟子即今大事到來せり』

と言ふと、國師曰く、

『如何か向上せん。』

すると時宗は威を振ふて一喝せりとあります。これは四百餘州を擧ると言ふて、小學兒童が歌ひますが、其歌の根據は、恚ういふところから出てゐるのであります。それで國師は、

『眞の獅子兒、能く獅子吼す、驀直に前進して、回顧する勿れ。』

と勵されたのであります。時宗ばかりでなく、其旗下の長崎次郎左衛門、太宰少貳、高橋道妙、宮内平左衛門、諏訪左衛門、糟屋三郎左衛門、稻津左衛門等一騎當千の武夫等が、次ぎから次ぎへと、國師の室に來て、一々活きながらの引導を渡して貰ひ、勇みに勇んで、西に向ひ出馬したのであります。

鎌倉は覇府の地としては、實に猫額大のところでありました。けれども當時の日本國民が質實剛健

であつて、義勇奉公の精神に富んでゐたから、大いに内に恃むところがあつて、物資兵站總て不充分不完全なるにも拘らず、彼の大敵に當つて、痛快極まる戦捷を得たことは、長く吾々が後世子孫に傳へて、忘るべからざる美談であります。時宗は僅に三十四歳で歿しましたが、其愛國護法の大精神は今に至るまで、六千萬國民の頭腦中に活躍してゐると言ふても然るべきであります。それで禪的修養の力が發して、武力とも爲り、亦善政とも爲り、其他あらゆる方面に關聯し、鎌倉時代に於て、吾が武士道が大いに發達したのも、此佛教の眞髓たる『禪』の道が、與つて力ありといふべきであります。次に鎌倉の政治は、何うであつたかといへば、勤儉尙武これでありました。佛法各宗は何うであつたかといへば、直截簡明な南無妙法蓮華經、南無阿彌陀佛、莫煩惱これであります。此直截簡明な安心決定の宗旨は、現今の複雑なる社會生活に於ても、國家獨立の上に於ても、愈々益々其必要を感じるのであります。敢て元來の宗教を崇拜するまでもなからう。因みに當時の北條氏の位地を一瞥して見ると、彼等は所謂陪臣でありました。それで時頼なり、時宗なり、彼の如く外寇に對しても又内治に於ても、共に大功を奏してゐるにも拘らず、其官位は、僅に一國の太守相模守で、位階は從五位で、其待遇は、今の勅任にも及ばず、彼等が寤寐にも、聖恩を忘れず、殆んど活ける神の如く敬愛してゐる所の至尊にも、直接拜謁を許されなかつたのです。加之時宗は、戦勝の神佑佛恩を感謝する爲めに、新に圓覺寺を創建して居ります。縱令北條氏は亡びて了つても、精神的紀念たる此寺は

今尙儼然として、六百餘年を経ても存立して居ります。古諺に陰德あれば陽報ありと。明治三十七八年日露戦役の當時、勸聖文武なる明治天皇は、厚き大御心を以て、時宗の大功を追憶あらせられ、破格の典を示され、從一位を贈位あらせられました。現今政治家も實業家も、誰れも彼れも皆此武士道的剛健勇猛の氣概を具へるを熱望すると共に、奢侈、淫靡、惰慢、享樂は、大敵であることを極言して置きます。

春 三 句

竹 の 島 人

菜の花や一路遙に寺見ゆる
 禪院に尼の寫經や木蓮華
 僧正は詩の一人者桃花盃

物我一體

心の本體を知る

横看成嶺側成峰。遠上高城入翠微。不識廬山真面目。只緣身在此山中。

恁ういふ詩句を前提して置いて、それから物我一體なり、萬物には悉く神性あり、修養の歸決はこれにありと云ふ義を説きたいと思ひます。絶句といふものは、僅かの文字、今の場合は二十八字よりしか成り立つて居らぬものでありますが、此中に頗る味ふべく、吟すべき趣があります。下手な辯をつけて講釋などすべきものでありませぬ。恰も鳥はその歌を聞くべくして、之れを捕ふべからず、花は其色を愛すべくして、之れを折るべからざるやうなものであります。併しながらそれは詩とか、歌とか云ふものに就いて、平常から多少考へを有つてをらるる人々に向つていふことで、時には已むを得ずして多少の辯を加へねばならぬことがあります。

抑も詩は志なりといひまして、即ち其志の在る處、情の動く處を述べるのであります。これを詩の本領と致します。嘗て日本を能く研究しました外國人の言ふには、日本の人は總て詩人である。文學の素養がない人でも、口を開くと直ぐに十七文字、或は三十一文字となる。さうしてこれが一種の詩となつて吟詠することが能きる。日本人は如何にも文學的趣味を有して居る人間であると言つて賞讃して居ります。

それから、又古語に、『詩禪は一味なり。』斯う云ふ言葉があります。詩と禪とは一味である。詩の心がある人ならば矢張り禪的趣味を解する人に違ひない。又禪を會する人であれば、必ず詩と云ふものに趣味を持つて居るに違ひない。古人が陶境超絶して思ふ所温雅ならば、假令詩を吟ずること能はざるも、吾は之れを眞の詩人といふと云つて居ります。これは柄の記憶の儘でありますから、或は二字や三字は違つて居るかも知れませぬが、意味は此通りであります。されば諸君も假令形式に則つて、詩は作らず、歌は詠まれぬにしても、自然界の狀況、此自然界の現象に對して何等か趣味を感じる所があれば、呼んで以て之を詩人と云ふことが能きやうと思ふのであります。詩は志であり、又詩禪は一味でありますが、然らば禪とは何ぞと云はゞ、これには種々専門的の解釋はありますが、禪は心なりといふて可いのであります。禪は心なり、言簡にして能く其の意を得て居るのであります。併しながら心と云ふものに就いては、多少哲學的思想があつて、自己とか我とか云ふ觀念を起す位

の人でなければ、實は話が仕憎いのであります。併し之れを通俗的にいふて見れば、心と云ふても、此我を取捨いて居る周囲の刺激を受けて、悲しいとか、嬉しいとか、苦しいとか、楽しいとか、云ふ感想が、勃々と起つて来る一時的の感情を心と云ふのではありませぬ。所謂感情なるものは、一時的の心の現象であつて、畢竟心の本体の影法師であります。それで衲が今禪は心なりと云ふ其の心は、言ふ迄もなく、吾々の心の本体を指して云ふて居るのであります。其心は何うかと言へば、古人の言に『大いなるかな心や、天の高きも窮む可らず、心は天の外に出づ。地の厚きも測る可らず、心は地の外に出づ。日月の明かなるも踰ゆ可らず、心は日月光明の外に出づ。大千世界も究む可らず、心は大干世界の外に出づ。(中略)。四時吾に依つて循環し、萬物吾に依つて發生す、宏いなるかな心や』と。斯う云ふ工合にいつて居る。衲が今禪は心なりと云ふのは、即ち此意味に於ける心を指すのであります。故に此の心と云ふものを味ふことが能きたならば、此禪の心を味ふと云ふことが能きる少くとも禪を味ふ人ならば、心の本体を知ることが能きやうと云ふのであります。夫れ故に心と禪とは一味なり、禪と心とは一味なりと云ふのであります。それで何人も一大奮發、一大努力をなして、之れを内にしては平和幸福を得、之れを外にしては事業に成功し、國家社會に貢獻する所あらむと期せらるゝのでありませう。之は勿論結構な事だ、誰しも此の志が無くてはならぬのであります。併し又翻つて考へて見ますれば、人間は智識慾とか、名利慾とか、名利慾とか、生存慾とか云ふやうなもののみ汲ればならぬと思ふ。

廬山が我れ

前に掲げました詩は、支那の廬山を吟詠したもので、蘇東坡の作であります。廬山は風景の絶勝を以て名高い所であります。此の高く聳えて居る廬山と云ふ山を、横に見れば嶺となりて丸く聳えて居るやうな有様であるが、之れを側つて見ると高く聳ゆる峯の如くにも見える。丁度古句に『蒲團着て寝たる姿や東山』とある様な鹽梅に、自分の身を横たへて見ると嶺と見えるが、端坐して見ると、山も亦端坐して居る如くに見える。遠近高低一同ならず、一つの廬山であるが、眺めやうに依つては遠くも見え、近くも見える。吾々は常に富士山を見て居りますが、見る毎に景色が變る。其如く廬山の眞面目は何處に在るか、近い處から見たのが眞面目か、遠い處から見たのが眞面目か、平つたく嶺の如きが眞面目か、高く聳えて居る峯の如きが眞面目か、何れとも分らぬ。そこで自分が氣を付けて心を

落ちて着けて見ると、成程分つた。何れも眞面目ならぬ筈だ。何故ならば唯身の此の山中に在るに縁で、自分の身體ぐるみ廬山の眞只中に在る——否、廬山が我れ、我れが廬山で、廬山と我と同化して居るからである。それであるから分らぬのも至當だ。其眞面目は高からず、低からず、遠からず、近からず、嶺にも非らず、峯にも非らず、併しながら同時に又嶺なり、峯なり、遠くあり、近くありでそれで一つの廬山が出来上つて居るのであります。之を只向ふの山と許りに考へずして、自分自身の上に乗せて、能く嚙み碎き消化して行くと、津々として味が出て来るのであります。吾々の修養と云ふのは斯う云ふ意味で、學問や理屈の話をするのはありません、修養と云ふのは、吾が持前の本體を百鍊千鍛して、精神上に一つの新しい力を得るを云ふのであります。

現今は科學萬能と云ふ有様であります。成程科學の立場から言へばさうありませう。道徳若しくは宗教と云ふものは、閑人のすることであると斯う譯もなく言つて了ふのである。併しながら科學萬能で人間が安心することが能きませうか。衲は科學者でありませぬが、斯う云ふ事を言ひ得ることが能きやうと思ひます。假令今日科學が進んで居つても、決して科學が總ての道理を盡して居る譯ではない。大きい立場から眺めて見れば、今日二十世紀の學者が言つて居る位のことには、闇路に唯一點の燈火を認めた位なものであらうと思ひます。何故と云ふならば、之れを時間的に云へば、科學者が一億年前の事を調べたかと云ふと、茫として見るところはないのであります。勿論多少の想像説はあり

ませうが、併し一億年前の事を一々實驗的に證明することは能きぬであらう。又歴史的に此處に説明すると云ふことも、恐らく能き難いことと思ひます。成程科學上から、天體の事も明かになつた。地理上の事も明かになつた。これも彼れも明かになつたと云ふが、併しながら若し顯微鏡とか、望遠鏡とか、さう云ふ物を學者の手から奪ひ取つたなら、何んとするでありませう。智識の範圍が擴がれば擴がる程、益々判らぬ事の範圍が擴がつて来る。學問が高尙になればなる程、愈々疑問が殖えて來ると云ふやうな有様であります。到底五十年や、七十年の短時間に於て、科學的智識ばかりで以て、吾々が大安心得やうと云ふことは到底能き得られないと思ひます。これは決して科學を退ける譯ではありません。學問も、智識も、大いに必要であります。が更に最う一步進んで、直ちに宇宙の大精神と云ふか、天地の實在と云ふか、本體と云ふか、種々の符牒は澤山ありますが、まあ宇宙の大精神と云ふて置いて宜しい。これと直ちに接觸しやうと云ふ堅實なる修養が、何よりも必要なのであります。科學はどうしても最後の智識ではありません。

吾々の立場から、直ちに宇宙の大精神と接觸せよと云ふのは、其物と我と一致しやうと言ふのであります。斯く言ふと學者は夫れは到底吾々の出來得られないことだ。此無限の宇宙は到底吾々の智慧を以て、之れを知ることが能きぬ、想像を以て計ることが能きぬと云つて居りますが、衲の云ふ一致とか、同化とか云ふ意味は、此宇宙の間に現はれて居る大精神——此大なる意思の力に依らうと云ふ

のであつて、決して絶大なる宇宙と此微妙なる我とが、智的推理の上に一致し同化しやうと云ふのはありませぬ。斯う云ふても、決して論理や推理を退くるのではありませぬ。論理に論理を重ね、推理に推理を盡した上に於て、何うともすることができぬ處は一度は必ず到着するものである。然うして此點に達してから何うするかと云ふと、其處に至つて始めて我が頭のぎり／＼から、足の爪先に至るまで、全然宇宙の大精神に没入して居ることが解る。即ちそれと親しく同化するであります。

心の現はれが物

宗教と云ふものは、そこから始めて生命を得て行くのであります。併しながら多少學問の素養ある人でなければ、遺憾ながら、エホバの神ならエホバの神、大精神なら大精神、南無阿彌陀佛なら南無阿彌陀佛を直覺することができませぬ。是等の題目は、云はゞ學問の理屈を煎じ詰めて來たのであります。丁度昔の千金丹とか萬金丹とか、云ふものは、種々の藥種を練り上げた物で、極めて小さき一粒の物であるが、萬病に應ずるやうなものであります。そして本當の宗教家は、此千金丹を充分に噛み砕きて、我がものと爲したる人々であります。ほんの一粒の千金丹、之れを嚙むは容易なりと思はれませうが、これには一生の信力と決心が必要であります。

扱此宇宙でありますが、此世界を假りに二つに分つとしたならば、物とか心とかの二つにしかできぬ。我自身を二つに分つとすれば、心と身體との外に仕様がなない。學問が進まぬ時分には、物と心とは殆んど水と火の如く、月と鼈程違つて居て、到底一致することができぬと考へて居た。それであるから、東洋でも西洋でも、唯物論者は唯物論の一點張り、唯心論者は單純なる唯心論を擔いで居つた。ところが漸次學問が進んだ今日に至つて、始めて物即ち心、心即ち物と云ふことに一致しかかつて來た。一致すると云へば、物が二つあつて、それが偶々調和して一つになつたやうであります。物と心は、根底に於て一つであると云ふことを、學問上にも發見しかつて來た。併し假りに之を二つに見れば、一面は物の如く、一面は心の如くに現はれて居る。此理を廬山の詩の上に於て、味つて見ると、其間の消息が分つて來るやうに思はれる。外から見れば物、内から見れば心である。斯う云ふことは何んでもなささうであります。吾々は動もすれば忘れやうとする。斯う云ふ意味から言へば、物ある處には即ち心ありと斯う云ふのであります。實は心の現はれたところが物であつて、物の現はれたところが心と云ふのでありませう。それで萬物は神である。神と云ふのは、佛と云ふのと違ふやうであります。實は佛と云つても可い、一切の現象は佛の心といつてよい。佛陀、ゴツド、若しくは眞理と云ふことも同じやうな意味であります。歴史的に言へば、ブツダとゴツドとは、別にしなければなりませぬが、其本源からいふ時には、同じ意味に使つて宜しい。畢竟物は心なり、心は物なり

であります。此現象が即ち本體、本體が即ち現象であつて、波即ち水、水即ち波であると言ふことになれば、萬物皆神の光りを宿さざるなしであります。

彼の有名なるギョルダノブルノー、此人は近代科學主義の大家で、汎神論的傾向を代表する一人であります。此人が詰らないやうなことから、眞理を發見して悟つたのであります、曾てシカダ山に登つた時、平素は遠方から眺めて居つたのであるが、丁度盧山の東坡に於けるやうで、表面から眺めて居つたとは、大いに趣が違つて來た。平素は殺風景のやうに思つて居つたのが、親しく山に登つて見れば、遠方で見たのと大いに趣が異つて、何とも言へない絶景である。今迄は噴火して居る殺風景の山で如何にも趣味の無いものであると思つた。が、扱登つて見ると、鳥も囀つて居る、木も茂つて居る、水も流れて居る、岩も聳えて居ると云ふやうな有様であるから、大いに驚いた。爰に於てブルノーは汎神教の原理を悟つたのであります。物皆然り、如何なる物でも表面から見れば、洵に何うも乾燥無味なる物質であるが、内容から味つて見れば、一々心あり、靈ありで、趣味津津たるものであります。

又十郎の劍道修行

肉と靈とは、分けて説くのが常であります。實は肉と靈とは分つべきものでない。肉のある處には靈あり、靈のある處には肉あり。宇宙間の現象を見れば野邊に在る名も無き一莖の草でも、矢張り神の光りを宿して居る。詰らない瓦の破片、石の塊でも、皆佛の心を現じて居るのであります。例を引きますれば、佛の言に、『一切衆生皆悉く佛の智慧徳相を具有せり』といつてあります。其通りでブルノーも山に登つて、僅かなことから汎神教の原理を發見したのであります。さうして見ると、事々物々新たならざるものなしと云ふ境涯に到達するのであります。眞に精神修養に志す者は、是非共斯う云ふ處を一つ味つて見ねばなりません。併し其妙味を現はすことは却々出来ませぬが、若し其處に於て少しでも力を得ることが能きますれば、世の中の苦惱とか、罪惡とか、さう云ふものは、此光りに出逢ふと、殆んど霜露の朝日に消ゆるが如く消えて了ふ。佛經には『衆罪は草上の露の如し、慧日能く之を消す』とあります。

どうしても吾々が安心を得やうとか、修養の立場を捉へやうとかするには、物我一體の此境涯に歸するより外ないのであります。そこに到達して吾々の心に得た力を、一切萬事の上に應用して、自由自在の妙を窮めますれば、修養の能事了れりといふて可いのです。併し斯う云ふことを餘り説くと、一種の理屈に墮することを免れないから、心を鍛錬すると云ふ實例を説きませう。それは彼の柳生又十郎の劍道修行のこととあります。

此又十郎は若氣の過から、遂に父但馬守の勘當を蒙りました。昔は之れが一種の制裁であつて、何にか一つの功を立てなければ、歸參を許さなかつたものです。其處で元來柳生家は徳川將軍の劍道師範の家柄でありますから、又十郎も之れは劍道の達人となつて、歸參を願ふより仕方がないと氣が附いた。そこで遙々二荒山に登つて、磯端伴藏先生の許を訪ね、今までの一伍一什を悉く懺悔した。『何卒して私も貴翁に就いて劍道を學び、心を練り直して、勘氣の免されるやう致したいと思ひます。就いては入門を願ひ度い、擊劍と云ふものは、何年程掛つたら出來ますか』と尋ねますと、伴藏先生も初めは軽く相手になつて云ふやう、『さうさ、何事でも生涯の仕事だ』と云はれた。『生涯の仕事と仰有つては取附く島もありませぬが、本氣になつて修業を致しましたら、何年位で出來ませうか』。『さうぢや、まあ十年位かな。』左様で御座いますか、私も年老つた親を控へて居りますので、早く歸參して不幸の罪を詫びたいと思ひますから、若し一生懸命になつて修養をしたら如何なもので御座いませう。』さうさ、一生懸命にやるならば、二三十年は掛らう。』段々長くなつて來た。『併し先生、精神一到何事か成らざらんと云ふこともありませぬ。其通り晝夜の別なくやつたら如何なものでありませう。』さうさな、まあ其位にやれば、六七十年も掛らうわい。』と答へられた。伴藏先生の答は、大いに意味があります。當今の學生などは修行中から、早や卒業後のことを空想して就職したならば、幾何位報酬が取れやうかとか、何々の椅子を占められやうかと云ふやうなことをばかり考へて居て、

事實の勉強は之れに伴はぬ者が多い。それであるから、一朝思ふ通りに行かぬと、煩悶を生じ、神經衰弱に陥るとか、一種の精神病に罹つて、逸まつた事をするとか云ふことになるのであります。此處に於て心の修養が必要になるのであります。今又十郎も然うで、何んでも氣早に成切しやうとするからして、段々年限が長くなつて來た。其處で氣が附いた『承知致しました、それでは今日から貴翁を師匠と仰いで、如何なる仰せにも従ひますから、どうぞ弟子にして下さいませ。』と言つたら、伴藏先生が初めて許した。『併し弟子にする以上は、今日只今から擊劍のげの字も口にする事は相成らぬ、木刀一つ振り廻すことは決して相成らぬ』と言はれた。擊劍を學びたいと云ふに、擊劍のげの字も口にする事はならぬと云ふのは。……それから又十郎は毎日薪を拾ひ、飯を炊き、水を汲んだりして居りました。昔は斯う云ふ意味に、人を育て、行つたもので、決して擊劍と云ふ一つの技術の末葉を學ばすのではなく、劍道と云ふ道を會得せしめやうとしたものであります。左様な譯でありますから、又十郎は三月経つても、半年たつても、一年になつても、木劍一つ持つ術を習ふ事が能きない。又先生から、劍道に就いて、一言半句の教も無い。斯うなると、誰でも退屈する。又十郎は心中不平に思つて、或る日椽端に出て、茫然と考へに耽つて居た。ところが先生がひよつこりと背後から出て來て『此馬鹿野郎。』と怒鳴りながら、ぴしやりと一本打つた。又十郎大に驚いた。斯様な鹽梅で飯炊く時でも、掃除して居る時でも、少しの隙があれば、先生が出て來て『此馬鹿野郎。』と一本打つ。爰に於



て又十郎も寸分の油斷が能きませぬ。斯る間に妙なものでありまして、自然と又十郎の精神が鍛錬されて来た。精神の修養は斯う云ふ意味から遣つて行かねばならぬ。丁度外界の誘惑物に出會つて居るやうな鹽梅で、彼れが勝つか我が負けるか、我が勝つか彼れが負けるか、一つに二つであります。

鍛錬修養は理論でない

王陽明の語に、「山中の賊は平げ易く、心中の賊は平げ難し。」とある如く、心中の賊を平げて、精神の力を増進するのは却々骨が折れる。伴藏先生が不意撃をせらるゝのは、取りも直さず精神の力を増進させたい計りであります。斯様にして又十郎段々精神が練れて来た。或る日飯を炊かうと思つて、火吹竹を握つて、頻りに竈の下を吹いて居ると『此馬鹿野郎』と伴藏先生が打掛つて来たのを、又十郎何んの氣もなく、手に持てる火吹竹を以て、ハツと受け止めた。これは初めから、打込んで来るなと思つて、待ち受て居つたのではありませぬ。心が段々鍛錬されて来て、寸分の隙もなくなつて居りますから、思はず受け止めた。其處で初めて剣道の極意を授けられ、其後歸參が叶つて、父の跡目を相續したと云ふことであります。斯う云ふ譯で、精神の鍛錬は、實地にしなければならぬ。心とか、物とか、神とか、佛とか云ふことは、萬己むを得ずして言ふことであつて、精神の鍛錬とか修養とか

の上には、そんな理屈を挟む餘地はないのであります。併しながら學問上の理合が合つて居らぬと、彼のスーパステション、即ち一種の迷信、一種の妄想に陥つて了ふ處があるから、學問の理合を定めることも大切であります。が、眞の鍛錬、眞の修養は、理論に非ずして實行の上にあるのであります。さうでない、學問ありと雖も、何んの用をも爲すに足りませぬ。それで吾々は先づ自己と云ふ物知らねばならぬ。吾々は決して他の命を受けて働くのではなく、自分の天職を完ふする爲めに働くと云ふ自主的精神が、高まつて行かねばならぬ。それは自身の修養から現はれて来るのであらうと思ひます。

春 海

たぐひなきかをよゝに傳へよと

御法の花やひらきそめけん

徳育の修養

攝受といふこと

修養に就いても種々な仕方がある。身體から修養するののも一つ、又心から修養するののも一つ。大別すれば此身體の修養と、精神の修養との二つに歸するのである。併しこれは假りに分けたのであつて、大體吾々の身體とか、心とかは引分けやうもないのである。聲と響、夫れを引き分けやうとした所で、能きない。形と影とを引分けやうとしたところで、引別けらるゝものでないと同じく、密接なる關係どころではない、殆んど裏と表と云ふ様な最も親しい間柄である。故に身體の修養とか心の修養とか云ふのは、假りに便宜上分けて言ふのである。此身體と心、物質と精神とは夫程親しい關係のものであるけれども、納共の立場から考へて見ると、心は主にして、身體は客と云つても可からうと思ふ。併しこれは學問と宗旨との立場に依つて異なるので、彼の唯心論者から言へば、心が何處迄も主であつて、唯物論者から言へば、物が何處迄も主となるのである。然し主と客とは地を易へれば同じもの

であるが、先づ少年少女時代には形の上から修養して、漸次心を謹直にすることが肝要である。さて又心から修養すると云ふ事は、吾々の理想通りに行かねばならぬ。そは何であるかと云ふに、先づ眞とか、善とか、美とか、斯ういふ様なものが理想である。眞なり、善なり、美なりを實現して活かして行かうと云ふのが理想である。教育の目的も進めて行けば此點に来る、吾宗教も亦其通り、戒、定、慧と云ふものを修して、理、智、用の完全を期するのであります。理窟は如何に立派でも、これを實行せねば宗教の本旨に叶はぬ。日日是好日と云ふ心持になつて、感謝の念に充たされ、深遠なる教理を取つて、卑近なる行持に現成するにある。併し云ふ事は易くして行ふ事は却々困難なものであります。今納が胸に浮んだまゝ、二三の例話を擧げて、修養の忽諸にすべからざる事を、互に心掛けやうと思ふ。

往昔、楚の國の楚王が、或時群臣百官を數多宮廷に招いて宴を賜ふた、夜は次第に更け渡り、宴漸く闌なる頃、當時の例として、王は無禮講を宣した。這は我朝徳川時代に於ても、能くあつた事である。乃ちこの無禮講に依つて、上下の心の疏通を計り、君臣の情の圓融を企てたものであります。時恰も盛夏の頃とて四方は開け放しになつて居る。折悪しくも一陣の風颯と吹き來つて、御殿の燭光は悉く消えて了ひ、忽ち四方暗黒となつたのであります。然るに宴に連り居る群臣の一人が、綺羅を装へる皇后の袖を惹いた。皇后驚愕と共に、直ちに其者の冠を抑へて紐を切り取り「誰そある、

早々燭を持て」と絶叫した。これには王も聊か驚かぬではないが、元來寛仁大度の君、特に無禮講の席上、罪人を出すも本意ならずと思召されてか、「暫時燭に點火する事を止めよ。卿等先づ冠の紐を斷て」と命じた。座に居る數百人の群臣悉く王の命令に依つて、冠の緒を斷つたので、皇后は折角證據物件を握つて居りながら、眞の犯人は分らぬで、其場は無事に治まりました。

聽て數年を経過して後、楚の國が他國と交戦すべく餘儀なくせられた事があります。然るに戦は何時も利あらず、王は敗軍を督して大いに奮戦せられたるも、却つて身は危地に陥るばかり、今や死を決して諸軍を指揮せんとするの時、敵の大軍俄かに押寄せた。間一髪を容れず、王の前に立塞つて、言はゞ王の身替りとなりて、惡戰苦闘の結果、敵の刃にかゝつた男がありました。王は其健氣なる勇氣を賞し「誰ぢや」と仰せられた。件の男は斷未魔に及び、王に言ふには「私は過る夏の夕、無禮講に際して、畏れ多くも皇后の御袖を惹きました。王の忝き慈慮により、其罪發覺せられず、今日迄餘命を保ち居りし者、只今の奮戦は些か御恩の萬一に酬ひ奉りしのみ」と言ひ終つて戦死し、爲めに王は一身を満足せられ、再び仁政を布かれたと云ふ事が、古い歴史に書き残されてあります。

佛敎に攝受と云ふ事がある、何でも受け攝める事、乃ち王は常に、能く群臣の心を我心として、受け攝められた徳によつて、一念誤つた行爲をした臣下も、一朝事あるに及び、斯の如き健氣の報恩を全うするに至つたものであります。

佛神には虚偽を許さぬ

又斯る例を求むれば數多くあるが、彼の有名なる英國のピクトリア帝の如き、尤も慈慮に富ませられたる賢君として、種々なる逸話が傳へられて居ります。其一例とも見るべきは、王の齡漸く五六歳の頃、或時市中を逍遙された。尤も外國では非公式の場合、帝王と雖も極めて簡單なものであります。そこでピクトリアが或る玩具店の前を通られると、其處には小兒の好きさうな洵に珍らしい玩具がありました。其價を問ふと、三圓であると云ふが、折悪くポケットには、三圓の持合せがなかつたので、急いで御住居に歸り、それ丈の金を持つて、件の玩具を買取られた。子供心に嬉しくて堪らず、頼摺して歸る途中に、憐れなる乞食が、路傍に立つて居ました。これを目見られたピクトリアは、そゞろ同情の念抑え難く、再び前の店に立戻りて「折角買ひ求めたが、暫時都合があるから、金を返して下さい。玩具は更に金を持つて買ひに来ます。」と云ふて三圓を受取り、悉く乞食に與へて了ふたと云ふ事でありませぬ。些細の同情が、總て世界的の仁君と稱せらるゝに至りしも、要するに宗教的感化が其素因となつたのであります。

又佛蘭西の巴里に、美しき心を有つた三人の少女があつて、或る日連れ立つて散歩をして居ると、

乞食が居つたので、一人は十錢を與へ、他の一人は二十錢を與へたが、最後の一人は折悪しく一錢の持合せもなかつた。併し溢るゝ同情心は、其儘行き過ぎる事が能きませぬ、依つて乞食の汚れたる頬に、紅薔薇の如き唇より、熱き接吻を與へて過ぎ去つたと云ふことであります。

斯様な麗はしき心を自然に養成し、修養せんとするには、單に小中學の教育のみでは不可ぬ。修身倫理素より結構であるが、更に智育をのみ主とする學校よりも、一般の家庭に於て、宗教的感化をば、其兩親自身が、熱く美しき信仰的生活より溢れ出でたる實行を主として、子弟に臨まねばならぬと思ひます。

然るに我日本に於ては、斯る家庭は不幸にして、あまり多くない。随つて智育體育以外、美しき信仰心より發露する徳養と云ふものが缺けて居ます。如何に文部省で、年々八釜しい訓令を發布したからとて、左程の効果を認め得るに至らぬのはそれが爲めであります。

西洋の人は「日本には年寄の子供が多く、西洋には子供の老人が居る」と言ふが、成程宗教的信念の薄い日本人は、自他を欺かぬ行爲をする者は、老人になつても至つて尠いやうに思はれます。内に燃ゆるが如き信仰心のあるものは、恰も室内に沈香を薫すれば、自ら衣袖香んばしきが如く、自を利し、他を利し、國家社會を利するに至るのであります。人間同志であれば、欺かれもし欺きもするが、佛や神に對しては虚偽は許しませぬ、此點に至ると宗教の力ではなくてはならぬ。

世には煩悶懊惱、不平不満に日を送つて居る人は随分あります。罪あれば、之を罰するに法律を以てすることが能きるが、是等の人々には、教育も可い、道徳も可い、けれども更に進んで、宗教的信念に依らずんば、眞善美の理想郷に到達することは能きませぬ。

開元寺

李夢陽

瀑布半天上 飛響落人間
莫言此潭小 搖動匡廬山

臨濟の四料簡

禪の本領

禪といふものは、素より宇宙の眞理を、言句思想の上に現はしたので、否實は其言句思想などいふものは超絶して了ふ。其處で始めて眞理に悟入するといふのが、禪の本領であります。去れば古人は、『吾が宗に語句なし。更に一法の人に與ふるなし』といふて居ります。これが禪宗の家常の茶飯で即ち彼れ是れと、辯舌や、筆を執つて説き現はすところの法ではありませぬ。何うしても眞の境界を得んとすれば、一回白汗をかいた上に、豁然として始めて貫通することが能るので、何程學理を論じても、禪の本領から見れば遠い。では禪と他の學問、其學問中の學問とも言ふべき哲學、即ち禪と哲學とは、關係あるかと言ふに、萬更無關係のものでもない。併しながら哲學を以て、禪を擱くといふのは、様に依りて胡盧を畫くと同じで、到底哲學者が、自分の智識の思想を以て、禪宗の本領を窺ふことは、斷じて能きぬと言ふて置かねばならぬのみならず、言語を絶し、思想を打ち超えた所に於

て、始めて悟入する、言はゞ直覺的のもので、それから入らなければ、禪の眞味は解らない。大抵世間の學問といへば、先づ哲學で言ふても、皆智識とか、經驗とか、然ういふ學理に當て候て、其考へた智恵を以て、そして眞理を規則的に、系統的に研究して行くといふのが、當然のやり方で、それは頗る有要な學問ではあるが、禪といふものは、其趣向が、大いに相違のあるもので、禪から哲學を見る、大變迂遠なものである。併し希くば、哲學を研究し、それから禪にも入り、兩面に通じてそして眞理を辨證しやうと言ふのが、互の希望であります。遺憾なるは、禪を會してゐるものは、他の學問の方に迂といふ傾きがあることです。それから學者は、只學理々々といふて、それに當て候めやうといふ矢張一方に傾く風があります。だから將來禪道佛法を世に現はさうといふには、兩方面とも、互に研究せねばならぬ。今臨濟禪師の語録の中にある四料簡に就いて、説くこととするが、此臨濟義玄禪師は、支那曹州南華の人で、幼少の折出家し、初め毘尼を究め、經論を探り、次いで黃檗に入り、黃檗三頌の棒を喫して、高安大愚の下に至りて一大事を了得し、而して黃檗に歸へり、其法を嗣いたのであります。後鎮州城の東南滄河の畔の小院に住されたが、雲衲雲の如く集り、師が是等學人を接待された手段は、極めて辛辣であつて、黃檗、臨濟の手段として、古今の歎稱するところであります。禪門五家七宗中臨濟の正宗は、師に依りて起つたのであります。此臨濟義玄禪師の法語を蒐録したものが、即ち「臨濟錄」で、語録と、勘辨とに分ち、語録中には、臨濟の四喝、四賓主

三玄三要等を收め、勘辦には、諸方に歴參中の商量、及び勘波の語等を蒐めてありまして、曹洞宗に於ける『洞山録』と同じく、臨濟宗の寶典とされてゐます。

原因と結果は同じこと

『師晚參示衆云』

これは『臨濟録』中の一節で、一段々々に切れてゐる其一段を掲げたのであります。

『有時奪人、不奪境、有時奪境、不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪』

此中文字から定めて置かなければならぬ。即ち人と境とを四つに分けてある。これが一番の主眼であります。人と境と使ふてあるのは、佛法の書物の中でも勘い。多くはこれを換へ言葉で言へば、常に心と境といふて居る。心は即ち一心、境は即ち萬境であります。心といふ字を、人の字に換へた。文字は變つてゐるが、平生言ふてゐる心と變りはありません。これは最初に吐に入れて置いて貰はねばならぬ。これを段々換へ言葉で言へば、名目が多いのだから、心と境といふても可し、自他といふても可い。又主と客と分けても可い。若しくは原因と結果に分けても可い。即ち世間の各學科に、種々さまざまの名詞がある如く、これも矢張り所に依りて、名を換へてあるが、兎に角心と境に定めて

置けば可い。ところが心と境といふ字は、常に佛法の中には使ふてある字だが、成程此世界は、諸法無自性と言ふて、元來諸法は自性なし、即ち一切の諸法には、自立の性質がないといふことで、此性質といふても、此處は能く噛み分けて貰はねばならぬ。例せば倫理學上、善惡と使ふても、即ち善があるから惡もある。惡があるから善もある。けれども善を取り、惡を取り除いたならば、惡獨り立つことは能きない。又惡を取り除いたならば、善獨り立つことは能きない。これを佛法の言葉で、諸法無自性といひます。此れがある故、彼れも立つ。彼れがある故、此れも立つて行くといふことに爲るが、進んで絶對界に入れば、そんな事はない。善惡是非總ての相對的の言葉は、皆なくなるが、暫く此處では人と境とに分けたところで、人といふもの、即ち此處で言ふ人、自己を原因とすれば、總ての萬物は、結果といふことに爲る。原因結果といふことは、互に常に使つてゐる言葉だが、原因といふものゝ大抵の定義は、此れあれば彼れあり、此れなければ彼れなしといふ、これが原因の定め方、それで結果の方は、彼れあれば此れあり、彼れなければ此れなしと言ふので、只此主客の二つがあるだけであります。自然人なら人、心なら心が、原因に爲ると、一切の萬物は、此原因の中に隠されて了ふ。若し又境が原因の主と爲れば、自己、心といふものは、皆萬境の方に覆はれて了ふ。奪はれて了ふ。これを虚心に平たい觀念で眺めると、原因と結果と同じことで、原因なきの結果は、本當の結果でない。結果なきの原因は、本當の原因ではないのであります。段々と煎じ詰めて見ると、原因と